ありし日のクェゼリン

林　幸市

マーシャル群島

米国のモリソン博士の書いた太平洋戦争の戦史には、つぎのように述べてある。

「南洋群島は、世界経済からみるとるに足らぬが、第二次世界大戦の戦略上には重要な地域であった。ギルバート、マーシャル、カロリンおよびマリアナ諸島は、米国、比国、支那および日本を結ぶ航路を横断し、あたかも巨大な熱帯蜘蛛が巣を張っているようにみえる。マーシャル群島のクェゼリン、カロリン群島のトラック、マリアナ群島のサイパンは、それぞれ防禦組織の中心をなし、日本から容易に支援補給がうけられ、航空および海軍兵力の集中展開ができ、飛行機および艦船の修理ができる。

現有連合国基地からでは、いかなる偵察機でもこれらの島にとどくことができない。もっとも近距離にあるマーシャル群島でさえ、ガダルカナルから一、一〇〇浬、カントンから一、一三〇浬、ジョンストンから一、二三〇浬の地点にある」。

この所説のように、日本海軍としては、米軍の太平洋渡洋作戦に備えて、これらの島は戦略的の要衝であった。とくにマーシャル群島、ギルバート諸島は、内南洋群島の最東端に位し、対米第一線のきはめて重要な防禦線であった。

東京湾口より南東方約二、五〇〇浬（速力一〇節の船では約十日間かかる）、そこに礁湖を包んだ環礁があり、その上高さ一、五米程度の低いやしの島が、あたかも広い庭の敷石のようにつぎつぎに浮んでみえてくる。この島はやしが密生しているので、遠くからは島よりもさきにやしが点線をひいたような情況で発見される。

ここでさんご礁について簡単に説明しておこう。温暖な海中にすんでいるさんご虫の石灰質骨格からできた岩礁であるが、一般に表面がガサガサしているので、はだしでこの上を通るとけがをすることが多い。

さんご礁は、一般に裾礁、保礁、環礁の三種類に区分されておる。このうちマーシャル方面の環礁というのは、陸地からまったく独立した海中のさんご礁脈でできており、環状または不規則な円状に発達してきたもので、この環礁の中には礁湖があり、礁湖と外海を通ずる狭い水道がある。

マーシャル群島は同じ内南洋諸島でも、高い山の多いサイパン、パラオ、トラックの島などとは、あまりにもその状況が変っているので、はじめて見る人には珍らしくかつ神秘的とさえ感ずるであろう。

クェゼリン環礁

クェゼリン環礁は、マーシャル群島でも最大のもので、この群島のほぼ中央にある。この環礁には約九〇個の大小の島が点々と浮んでいて、その中に長さ約六〇浬、最大幅約十五浬という世界最大の広さをもつ礁湖がある。

クェゼリン島は、この環礁の南端にあって、この環礁でも最大の島で、長さ約四粁、最大幅六〇〇米、やし樹の高さ二六米という小さい島である。九五二航空隊がいたエビゼ島は、クェゼリン島の北東方約四粁のところにあって細長い島であった。

外海からクェゼリン島への水路は、キーヨ水道、南水道、ピゲジ水道の三個所であった。礁湖内は広大で、水深が大体三〇米から五五米であったから好適の錨地であった。しかしこの礁湖内には浅礁が点々とあって、昼間の礁湖内の交通はなんとかできたが、夜はまったく動けなかった。南洋の海は清く澄みきっているので、この礁湖内では海底がはっきりみえていた。

原住民の生活

昭和十七年南洋庁の調査では、クェゼリン環礁の島々には、五一四名のカナカと呼ばれる原住民が住んでおった。この原住民は主としてやしを食料とし、雨露をしのぐに足る程度のやしの葉で屋根をふいた簡易な家屋で生活をしていた。日本の統治時代となってからは文化もややすすみ、服装も漸次整ってきて女性は日本の簡単服のようなものを着ていた。しかし男性は相変らず半裸体が多くまた男女ともはだしであった。

「私のラバさん酋長の娘」の歌で有名な南洋特有の踊がかれらの唯一の慰安のようであった。

カナカ族は、一般に皮膚が暗かっ色で、頭髪は大体黒いが一部ちぢれているものもあった。性質は温順、快活であるが、酒を飲むと狂暴性がでるというので南洋庁の達示で一切アルコール類は原住民に与えてはいけないことになっていた。

自然の天恵によって、衣食住が一応できているので、怠けものが多く労働することはとくにいやがった。戦時中クェゼリン島では三〇名近くの原住民がいたが、洗たくやその他の雑役に使用しておった。

原住民の生活が以上のようであったから、神経を使う必要もなく一般に長命であるともいはれていた。非常に目

立ったのは、女性の壮年期がきはめて短く、日本の女性で三〇歳前後でみられるような水々しい容色のものがまったく見られなかったことである。これは熱帯地方の特色として男女共早熟であり、女は十四歳で結婚するというのをきいて当然かもしれないと思った。

夫婦間の愛情は濃かで、中には熱烈な恋で結ばれたものがあるときかされた。このように外人の想像するような野蛮的なものではないようにみうけられた。

平和時代には、若い男女が月光の下海岸で恋をささやいている場面を見たことがあり、またカヌーに乗ってギターを弾いて楽しむ男女のラブシーンを見たこともある。トラック環礁の秋島で大酋長の娘が、軍艦常磐の若い士官に憧れていた。翌年再びこの島を訪れた時、この若い士官が必らず上陸するものと千秋の思いで待っていたらしかった。しかしこの士官がすでに転勤していないことがわかってがっかりしていた。こうした大酋長の娘の悲恋を当時私はつぎのように記していた。

可愛い眸を吾等に向けて、走り来りて吾を迎えぬ、君待つ人の姿は見えず、秋島乙女は寂しく笑う。

酋長は原住民に対し非常な権力をもっていて、クェゼリン方面では、クェゼリン環礁の南方にあるアイリングラブラブという環礁の島に住んでいた。そして戦時中でも時々クェゼリン島の第六根拠地隊司令部を訪れ、珍らしい貝類や鰹節などの土産をもって挨拶にきたことを記憶している。

日本の統治

一七八八年囚人をのせて、濠州に回航中だった英国船長マーシャルが、このマーシャル群島の東端の一つの島を発見して、自分の名を与えたのが今日そのまま残っているとのことである。その後一八八八年独逸はマーシャル群島を、英国はギルバート諸島をそれぞれ領有することとなった。

一九二〇（大正九）年、第一次世界大戦後ベルサイユ条約によって、マーシャル群島は内南洋諸島とともに日本の委任統治区域となった。東経一三〇度から一七五度まで、北緯〇度から二二度までの広大な海域に点在する島々を南洋群島と呼称して、この全般を統治する南洋庁をパラオ本島においた。なお支庁をヤップ島、サイパン島、トラック環礁の夏島、ポナペ島、そしてマーシャル群島ではヤルート島にそれぞれ設けて行政管区がきまっていた。

その後一九四五（昭和二〇）年終戦まで、二五年間この統治が続いたのであるが、その実績は前統治国であったスペイン、独逸の場合にくらべて、きわめて良好であったとのことである。この司政が原住民に好感がもたれた原因は、原住民の風俗習慣をよく理解し、また尊重して指導したことにあった。

とくに南洋庁がこの司政で留意したのは、産業開発と教育であった。産業としては、ボーキサイド、コプラ、鰹節、その他この地方特有の貝その他工芸品があったが、この産業の開発によって日本人の移住がさかんとなり、支庁の所在地ばかりでなく小さい島にいたるまで日本人が住んでおった。

支庁のある島では、日本人の店舗があって日本の品物とくに日用品、衣類など贅沢品は別として大体生活に必要なものが準備されておった。その他郵便局もあったし、まづ困ることはなかった。

教育については、移住した日本人のために小学校があり、原住民のために公学校が各地にあった。そして日本語の普及に努力したので原住民の子弟はほとんど日本語ができるまでになっておった。またこの子弟の中で優秀なものは日本に留学させる制度があったし、さらに優秀なものは公学校の先生となっていた。

なお、各群島で有力な酋長には、交互に日本内地を見学させ、日本の情況を認識させるよう努力をしたのである。こうした南洋庁の司政によって、原住民はまことに平和な生活をしておったのである。

軍艦常磐の巡航

日米両国の風雲が急を告げる昭和十五年となって、日本海軍は、はじめて南洋群島の防備を重視し、この方面に第四艦隊が常置されることとなった。

この艦隊は潜水艦、航空機を含む各種艦艇で編成されておって、南洋方面の防備を促進するために、現地で猛訓練を実施しておった。

と同時に各専門分野に応じて、各戦略地点の研究調査を急いでおこなって着々と作戦資料を整備しておった。

もともと国際連盟規約および委任統治条項によって、日本としては南洋方面に軍事基地を建設したり、砲台を築いたり、島民に軍事訓練をほどこすことなどいわゆるこれらの島を軍事的に使用することは禁止されておった。

そこで昭和十五年頃は、わずかにサイパン、パラオ、トラックの島に通信施設ならびに燃料補給基地が準備されていた程度であった。

防備施設を本格的に準備しはじめたのは、昭和十六年の初期であって、その第一に着手したのは、マーシャル方面の航空基地と防備施設の整備であった。

軍艦常磐は、第四艦隊でもただ一隻の機雷敷設艦であって、この機雷敷設訓練のほかに特殊な任務が与えられていた。そのために艦隊とともに行動する機会はほとんどなく、単独で南洋の主要島を巡航することができた。この巡航によって、主要島の情況を知ることができかつ原住民と親しく接する機

会も多かった。

パラオ本島のガラスマオというところで、軍艦常磐の幹部が、酋長以下原住民より南洋特有の踊で歓迎をうけたことがあった。仏桑華が紅白咲き乱れている小学校の校庭であった。三〇名に近い原住民の男女が手足を動かし腰をふり乱舞しはじめる。次第に興奮してくるに従って香の高い香水を踊っている人達にふりまく。この香水でなお刺戟されていよいよ踊は佳境に入り、その熱狂振りにはまったく驚いてしまった。遠く家族と離れて、ややもすれば郷愁を感じている一同には、この南海の僻地でこのような歓迎をうけようとは夢のようであったであろう。一同すべてを忘れてこの歓迎に感謝しつつ拍手を送った。

昭和十五年も年末となると、日本海軍恒例の定期異動があった。この時艦長以下幹部の大部分が交代したが私だけはそのまま残留することとなり、前年に引き続いて南洋の主要島を再び巡航することとなった。しかし昭和十五年度のような特殊な任務もなかったので楽であった。

一般に軍艦内の生活といえば、海に浮かぶ鉄材のワクの中で、男ばかりの集団生活であるために無味乾燥であった。しかも南洋行動ではその感が強かった。もともと艦艇の乗員が一番喜びまた楽しいものは、鉄材のワクから解放されて上陸することである。ところがマーシャル方面の巡航ではやしの繁った島だけで、しかも太陽の直射をうける暑さも加って、よほど珍らしいものがない限りその楽しさは半減する。このような感じもあって、この方面で折角上陸させて慰めようと考えてもその希望者は非常に少なかった。上陸しても浜辺で貝類を拾って帰るのが関の山であったからである。

そこで昭和十六年の巡航では乗員の士気をあげるために、艦内で充分慰安ができる方法を研究し、まづ艦内新聞を刊行すること、つぎにハーモニカ、アコーデオン、尺八など、手持ちの楽器をもってバンドを組織すること、また艦内にレコードを放送すること、なお映写機を準備した。幸に幹部および乗員の中に適当な特技者がおったのでこの人達の非常な活躍によって、軍艦常磐の南洋巡航はまことに快適であったし、病人も非常に少なかった。

一日の猛訓練を終って環礁内に碇泊するとやがて夜を迎える。南十字星が夜空に輝きはじめ、黒い影のやしの島が浮き出した頃、広い軍艦常磐の後甲板では、夜風に涼をとりながら六〇〇名の乗員が懐しいメロディにうっとりとしている。こうして乗員は、一日の苦労を忘れ、明日の訓練に備えることができた。

映画も好評だったが、艦内新聞は中々好評であった。和歌、俳句、散文、論説等乗員の自由な投稿を歓迎したので、趣味のあるものはもちろん、一般乗員にとっても楽しいものとなっていた。

クェゼリンを島を偲ぶものとしてその一部を紹介しよう。

○やし茂る島に憩いしわが艦の
　檣なつかに南十字星見ゆ

○みんなみの洋の入り日は美しき
　燃ゆる朱の雲むらさきの波

○亭々と島やしの樹の葉末ごし
　悠々と白雲の行く

○島　散　歩

一、名こそ知らねど木の実を食ひ
　言葉通ぜず手ぶりで話し
　南洋乙女と語らえば
　友ぞそばにてただ笑う
　朗らか勇士の島散歩

二、神秘の海に珍魚住み
　島のやしの樹繁茂する
　常夏の島夢の国
　南洋乙女のえくぼぞいとし
　朗らか勇士の島散歩

三、言葉通ぜず素振りで話し
　しばしの間の語らいに
　乙女と勇士の心はとけて
　とけて結んだ心をといて
　朗らか勇士の島散歩

昭和十六年九月初旬、私は横須賀防備隊に転勤命令をうけ、こうした約一年四箇月の軍艦常磐での南洋巡航に終止符をうち、数々の懐しい思い出を残して、トラック環礁にいざさらばした。

マーシャル方面防備部隊

前述のように、南洋群島は軍事的使用の制限をうけていたので、本格的にマーシャル方面の防備施設をはじめたのは、昭和十六年の初期であった。しかし現地の調査研究はすでに昭和十四年、昭和十五年の二回に亘って詳細実施されていたので、艦船、部隊のこの方面への進駐は比較的順調におこなはれた。

マーシャル方面の防備は、第六根拠地隊が担当し、まづ司令部をヤルート島におき、部隊（第六防備隊）はウオッゼ島に主力をおき、ミレ、マロエラップ、クェゼリン、ルオット等に見張所を設置した。

いよいよ太平洋戦争がはじまる直前には、この方面の部隊、艦船は急速に増強されて、防備態勢は一応完成しておった。開戦早々英国領のギルバート諸島（十二月九日）を、米国領ウェーキ島（十二月二十三日）をそれぞれ占領したので、マーシャル方面防備部隊の防備担任区域は、北はウェーキ島より南はギルバート諸島にいたるまで、南北約一、〇〇〇浬、東西約八〇〇浬の広大な海域となった。

この海域には約八〇〇の多くの島が点在していたが、このうち比較的大きくまた重要地点であったウェーキ島

（六十五警備隊）、ウオッゼ島（六十四警備隊）、マロエラップ島（六十三警備隊）、ヤルート島（六十二警備隊）、クェゼリン（六十一警備隊）には約三、〇〇〇名の警備隊主力が守備し、司令部はクェゼリン島にあった。なお小さい島でも原爆実験地で有名なビキンニ島をはじめ、比較的重要な島には特設見張所を設置して数名の見張員を派遣しておった。

海上部隊としては、約六〇隻の砲艦、駆潜艇、掃海艇、特設監視艇、徴傭舟艇、魚雷艇が各警備隊所在地に配備されていたが、魚雷艇以外は全部徴傭の船舶であり、また漁船であったからまことに老朽のものが多かった。ただ魚雷艇は当時日本海軍最新鋭のもので、三隻はウェーキ島に三隻はウオッゼ島にあって哨戒任務に従事しておった。

航空部隊は、第四艦隊長官の作戦指揮下にあった航空戦隊がクェゼリン環礁のルオット島に司令部をおき、ウェーキ、ウオッゼ、マロエラップ、ミレに航空隊を分派して遠距離の索敵、哨戒、攻撃に従事しておった。

水上機部隊は、第六根拠地隊司令官指揮下の九五二航空隊がエビゼ島にあって、水偵で比較的近距離の哨戒に従事しておった。通信部隊は第六通信隊がクェゼリン島にあって、主として敵の動静に対する情報連絡に従事しておった。なおクェゼリン島には、第六潜水艦基地隊があって、相当の宿泊、慰安施設があったが、この島に入港する潜水艦乗員はほとんどこれを利用しなかった。従ってこの隊の任務は潜水艦への補給が主であって、これには非常に活躍しておった。このほかクェゼリン島には朝鮮人の多い施設隊があった。

こうした兵力配備によって、マーシャル方面防備部隊は、防空、対潜水艦、対水上艦艇の哨戒見張に従事しておったのであるが、当方面が対米第一線のまもりであるだけに、いはば神経戦の連続であったといっても過言ではない。

クェゼリン島の初空襲

昭和十七年二月一日であった。米空母機動部隊がマーシャル方面の主要基地に早朝奇襲爆撃をおこなった。この大空襲によって各基地とも相当の被害があったが、クェゼリン島では第六根拠地隊司令部庁舎に爆弾が命中して、司令官八代海軍少将首席参謀法元海軍中佐が同時に戦死した。八代司令官の後任には阿部海軍少将が、法元参謀のあとには私がそれぞれ至急クェゼリン島に赴任するよう命令をうけた。私は南洋方面には経験があったし、何かしらこの度の赴任には宿命的なものを感じながら勇躍出発した。

いよいよクェゼリン島に着任してみると、司令官、首席参謀を同時に失ったこの司令部の寂しさがひしひしと感ぜられ、あたかも一家の両親が同時になくなったような情景であった。

次席参謀木下海軍少佐が私達の着任に心から喜びかつ安心した。しかし木下参謀はきはめて沈着冷静にこの大空襲による被害の復旧その他の情況報告など、テキパキと処理していたのには感銘した。その後この大空襲による貴重な戦訓によって、この方面の防衛対策を真剣に検討して逐次改善することにした。

隊員の生活

マーシャル方面の地理的特性によって、食物、衛生その他が南洋群島の中でも最悪の条件下にあったので守備隊員の物心両面の苦労はまことになみなみならぬものがあった。

暑さは日本の七月頃と思えばまづ間違いない。ところがこれが一年中続き、しかも昼夜の変化が少ないので、夜暑さのため眠れず真夜中に飛び出して浜辺で涼んだことがあった。

ただ有難いことには、大体毎日一回スコールが来襲して一時的でも暑さを緩和してくれることである。それと他の熱帯地方のようにマラリヤはまったくなかったし、毒蛇もいなかったので比較的に安易な生活ができた。

太洋に包まれた小島であるだけに非常に湿度が高く、棄煙草の火がすぐ消えるほど島内がジメジメしている。神経痛で困っている人だったら一日でも耐えられないであろう。南洋ボケとよくいわれるほど神経系統の作動がまことににぶくなり、身体がだるく頭がぼんやりすることが度々あった。

サイパンやトラックのように、バナナ、パパイヤその他の南洋特有の果実はなく、ただ、やしが生育しているだけであるから楽しみも少い。飲料水は雨水を貯えてこれを消毒して使用しているのでお茶の風味はまったくない。

井戸を掘ってみるとすぐ塩分の多い水がでて、飲料水には不適であった。湿気のために煙草は完全にカビがでているし、酒は暑いので防腐剤が混入してあった。キャラメルや菓子類は暑さのため全部軟くなっていた。

これでは、いかなる愛煙家、甘党、カラ党でもその魅力がないかというとそうでなく、そこは郷に入ったら郷に従えで、結構に喜んでこれらの嗜好品を愛用し、またこの方面ではこれが唯一の慰安であった、この点では相当のストックをもっていたので安心しておった。熱病では、この方面特有のデング熱と呼ばれるものがあった。まづこの地方で三泊すると必らずこの熱病にかかることになっていた。この熱病は、蚊の媒介によってかかるといはれていたが幸なことには免疫性があるので、一度かかっておけばあとは心配はなかった。

ただこの高熱のために余病が出ることが心配なので静かに休んでいる以外に方法がない。

ありし日のクェゼリン（その二）

林　幸市

私もクェゼリン島に着任して三日目にこの病気にかかって、三十九度位の高熱が一週間続き、蚊帳の中で汗を出しフウフウいいながら静かに寝ていなければならなかったのにはまったく弱ってしまった。

蠅の多いことも有名でまったく弱った。島の周囲に流れてくる腐った木材や、やしの殻などが海岸に散在して、蠅の生育するのに好都合であったらしい。島の消毒に関しては相当に留意していたのであるが、中々これを撲滅することは困難であった。

また雨水を使用する関係と蠅の多いために、アミーバ赤痢にかかることがあった。野菜は多少栽培していたが到底隊員全部の食料にはならなかった。クェゼリン島では豚の飼育をしていたが一匹が病気になったら半年近くで全部死んでしまった。

結局隊員の食料としては、日本内地より送ってもらう米と缶詰にたよるほかはなかった。

まれに近海でとった魚類やカニを珍重がったことはあるが、魚類は日本内地のものに比べて水くさく、とくに毒物をもったものがあるので非常に警戒しておった。もしこのような毒物の魚類を食べると全身がすぐしびれてしまう。軍艦常磐の乗員でこのようなことがあって大騒ぎをしたことがある

大体暑いので食欲が減退し、何を食べてもおいしいと感じたことはなかった。従って自分のペースによって保健を考えていくほかはなかった。やしの汁が非常に滋養があったので、毎朝一個分飲むことにしていたが、一週間ほど経過するといやな体臭が発散するのですぐやめてしまった。

厚生施設としてはラヂオ、碁、将棋、ピンポン、庭球など要具は一応整備しておったが、見張哨戒に交代し勤務し、寸暇を利用して兵器の整備、諸訓練に従事していたので、休養時間も少かった。とくにこの方面は夜がきわめて短く、朝が早いので、できるだけ睡眠を多くとるように留意した。これがために昼寝を励行しておった。このように娯楽の時間が少かったので、自分の趣味に応じて慰安をもとめる以外はなく、大部分は読書をしていた。平隠な情況でも、少しの油断もできないので、団体でおこなう運動会や慰安会は中々実施する機会はなかったが、外警戒を厳にしつつ情況の許す限り、隊員の士気を向上するためにこっそり演芸会をおこなって楽しんだこともある。

こうした生活の中で、隊員を喜ばしたものは、何といっても日本内地より直接この島に入港する輸送船の姿を見た時であった。まづ郵便物が各員に渡されると思い思いのやしの樹影で楽しそうに読んでいた。この時郵便物のこなかったものの寂しさはまた格別であった。

そのつぎは慰問袋の配給であった。ところが北方の戦場宛の慰問袋がこの南方海域に送られて、その通信文の内容を見て大笑いをしたことがあった。この慰問袋の中の品物で、もっとも一同に喜ばれたものは古雑誌であった。

また同じ古雑誌でも講談倶楽部とか一般大衆向けの雑誌が愛読された。現在のような週刊雑誌がその頃あったら随分歓迎されたであろう。この輸送船の入港は、故国よりの代表的使者として、隊員一同が慰められ、また故国への郷愁と感謝合掌の下に歓迎されておった。

慰問団の来島

昭和十七年の暮であった。第四艦隊司令部より慰問団をマーシャル方面に派遣される連絡があった。私は用件でトラックに出張している時であったので、案内役を兼ね輸送機で慰問団と共にクェゼリン島に帰った。

この慰問団は男七名、女三名、計十名であったが、日本内地よりトラック環礁に向う途中、乗船していた輸送船が米国潜水艦の攻撃をうけて沈没し、この慰問団は九死に一生を得て救助されたとのことである。しかし完全に丸裸となってしまったので、トラックで隊員の作業服を借用し、必要な楽器その他の要具はトラック在住の日本人から借りてきたものであった。私はこの情況をきいて、その上対米第一線の南海の果てまで慰問しようという心意気に感激した。また隊員一同もこの慰問団の来島に心から感謝し、双手をあげて歓迎した。

マーシャル、ギルバート方面の防備地域には、日本の婦人はまったくいなかったので、いよいよこの輸送機が九五二航空隊に到着すると、隊員一同の視線は三名の女性に集中されていた。久し振りに見る日本女性の姿が懐しかったのであろう。そして故国の空にいろいろの思いをよせたことであろう。

第一回の慰問演芸はクェゼリン島でおこなった。外警戒は常時厳重にしなければならないので、隊員の半数宛交代で楽しんだ。この慰問団は少しの疲労もみせず熱演によって隊員一同を笑わせまた喜ばせてくれたので、久し振りに何ものも忘れたかのようであった。この慰問団の来島は、隊員の士気を振作するのに何ものにもかえ難い効果があったと思った。

この慰問団は、マーシャル、ギルバ

ート方面の主要島を慰問することになり、北はウェキ島より南はギルバート諸島のタラワ島まで、各地で大歓迎をうけ、長期間旅の疲労もなく無事トラックに到着したことを知って、隊員一同を代表して感謝の礼状を送ったことを記憶している。

この慰問団の来島で、一番苦労したのは女性三名の宿泊施設とその警戒であった。久し振りに見る日本女性に対し、また非常な苦難を乗り越えてこの僻地に到着した人達に、もしも問題が起っては申し訳ないという老婆心からであった。しかし対米第一線の隊員にそんな不心得ものが一名もいなかったことは、今日において私達の誇りとしている。

ミッドウェイ海戦の前後

ミッドウェイ海戦は昭和十七年六月四日におこなわれたが、その一ヵ月前には第六艦隊(潜水艦艦隊)の旗艦香取以下多数の潜水艦がクェゼリン環礁内に碇泊し、ミッドウェイ海戦に備えて待機しておった。なお潜水艦以外でも特務艦艇が集合していたので、クェゼリン環礁内はまことに賑かであった。

いよいよミッドウェイ海戦がはじまると、通信情報で日本海軍に関する悲報が刻々に伝わり、敗戦の模様が判明してきた。開戦当時の真珠湾攻撃の場合とはまったく正反対に、隊員一同ががっかりし心配しておった。

この海戦によって、米軍は積極的に太平洋方面の進出を考えたらしく、まづ米潜水艦がマーシャルおよびギルバート方面に活潑に出没してきた。そしてこの方面に行動する輸送船の被害が急に増加してきた。

日本の連合艦隊としてはこの海戦を転機として最早や積極的に進出する作戦ができなくなり、マーシャル群島を決戦線として、邀撃するいわゆる守勢作戦をおこなうほかはなかった。

もともと日本海軍の研究では、どんな場合でも米軍の太平洋進攻としては、まづハワイを基点として、北部マーシャル群島からマリアナ群島(サイパン)への北方路と、中部マーシャル群島からカロリン群島(トラック)への中央路、そして南部マーシャル群島またはギルバート諸島から比島南部への南方路の三つの進撃路が考えられていた。

そしてこのいずれかの進撃路の主要島を攻略しつつ飛び石作戦を実施するであろうと予想されていた。これがためにマーシャル諸島とギルバート諸島は、いずれにしても米軍の最初に攻略する予想地点であることも大体想像しておった。それだけに、このミッドウェイ海戦の敗戦は、マーシャル方面防備部隊として他のいかなる部隊よりも一番深刻な情況を予想しなければならなかったし、いうなればいよいよ来るものが来たな——という宿命的な感じで任務の重大さを痛感した。

昭和十七年八月十七日未明であった。米潜水艦二隻がギルバート諸島のマキン島に近づき、乗艦していた海兵隊約一〇〇名がゴム浮舟で同島に奇襲上陸した。この島の守備隊員八〇名は、ヤルートの第六十二警備隊より派遣していた陸戦隊であったが、これと応戦したがついに隊長以下全員玉砕して、この島は米軍に占領されてしまった。

この報に接したマーシャル方面防備部隊は、早速各主要島より派遣した兵力をもって陸戦隊を編成した。さしあたり航空戦隊の中攻によって爆撃をおこない、同時に先発隊を輸送機で送り第一次奪回戦をおこなったところ、米軍はその夜待機していた潜水艦で逃げてしまった。こうしてこの奪回戦は無血占領することができた。この時マキン島を掃蕩中、潜水艦に逃げおくれた米兵九名が原住民の家にかくれているのを発見して捕虜とした。

米海兵隊捕虜処刑

米海兵隊捕虜九名は、その後クェゼリン島に連行して第六十一警備隊庁舎の一隅で保護しておった。昭和十七年十月頃となると、戦局はわが方にますます不利となり、マーシャル方面では、米軍の大進攻に備えてまことに緊張している時であった。

第六根拠地隊司令官阿部海軍少将は、この最悪の事態に備えて、米海兵隊捕虜九名の処置をできるだけ早く決定したいと考えていた。

そこで司令部としてつぎのよう案画した。第一案は、第四艦隊防備担任区域で比較的に安全なところに転送すること。第二案は、日本内地へ送還すること。第三案は、現地で適当な方法で処刑することであった。

この処理要領は、その後大本営および第四艦隊司令部に連絡されその指示を仰いだのであるが何ら回答もなかったので、再び至急回答を要求したが相変らず連絡がなかった。

当時はガダルカナル方面の失陥直後のことであり、ソロモン、ニューギニアの戦局もいよいよ日本軍が窮地に追いこまれた頃であったので、大本営や第四艦隊司令部として捕虜問題どころの騒ぎではなかったかも知れない。

しかし当方面としては、捕虜の処理はきはめて緊急を要する問題と考えていたからである。その後大本営海軍部部員が来島したので、早速この問題について協議したところ同部員はつぎのように述べた。

第一案については、輸送がまづ困難であるし、また米軍大進攻の地域については目下のところ予測がつかないので、いずれの地域に転送しても五〇歩、一〇〇歩で大差はない。第二案については、遠隔の地からの輸送は、現戦況下では不可能であろう。したがっ

て第三案によって、現地で最も適当と考える方法で処分するほかはない。これが現在として大本営の考えていることである。

そこで阿部司令官も現地処分を決心し、これに関する計画をつくりつぎのように実施した。

昭和十七年十月十六日午前九時であった。クェゼリン島西端の広場を処刑場と定め、捕虜九名は両手を後にしばられ目かくしの上トラックで運搬されてきた。マーシャル方面防備部隊隊員の中から、かって上海特別陸戦隊勇士であり、剣道の達人五名を選抜して、つぎつぎに日本の古式に従って日本刀で処刑した。死体は後方の穴に埋め土葬とし、その上には南洋の名もしらぬ花を捧げることにした。

戦争のもつ運命とはいいながら、こうして南海の僻地で最後をとげた米海兵隊も敵ながらやはり人間である。人類愛を感じながら一方やがては今後予想される米軍大進攻によって、私達の運命もかくあるのであろうと痛感したのである。ともあれ捕虜処刑という今まで当司令部の頭痛の種であった懸案事項も解決して、心おきなく敢斗できる情況となった。

終戦後この捕虜処分が問題となり、昭和二十一年五月十五日グァム島で米国海軍の軍事裁判がおこなわれ、私もグァム島に連行された。この裁判の結果、阿部司令官は絞首刑、処刑場の指揮官であった小原海軍大佐は十年の刑、捕虜を処刑場まで運搬した指揮官内木海軍少佐は五年の刑となって、当時首席参謀として当然処刑さるべき私がこうして奇しき運命の下に生きのびている。この私がどうしてこうなったのかまったく不思議としか思えない。

処刑当時、阿部司令官以下関係した幹部には、この問題がまさか重大な運命を左右することになろうとは、誰も予測した人はあるまい。唯運命の神だけが知っていたことであろう。

陸軍部隊の増強と主要島の築城

昭和十七年末であった。ウェーキ島に陸軍大佐を指揮官とする約五〇〇名の陸軍部隊が増強されたが、マーシャル方面としては陸軍部隊派遣の最初であった。その後昭和十八年六月には、比島方面から陸軍部隊歩兵一個連隊がクェゼリン島に到着した。この増強については、約一カ月前から判明していたので、宿舎の施設、食料の準備、防衛分担その他万般の準備を備えてこの部隊を歓迎した。この部隊が派遣される頃は、米潜水艦の横行時代であって、無事来島を祈っていたのであるが、駆逐艦二隻に分乗して全員元気にクェゼリン島に到着した。連隊旗を先頭に、この部隊がクェゼリン桟橋に上陸した時、私達はその偉容に非常に心強く感じ、心から御苦労様といいながらこの部隊を迎えた。

その後陸海軍協同について常時連絡協議して、対米第一線のまもりに遺憾なきよう、一丸となってこの重大な任務を果すよう努力した。この陸軍部隊はその後大本営の命令によって、連隊長以下主力はクェゼリン島に、その他は大体大隊を基幹として、ミレ島、マロエラップ島、ウォッゼ島に分派されて、それぞれ同島の海軍部隊と協力した。

昭和十八年一月、陸軍築城本部長がマーシャル方面を視察して急速にこの方面の築城が問題となり、陸軍築城本部より北村陸軍少佐が第六根拠地隊司令部附として、クェゼリン島に着任し、マーシャル、ギルバート方面の主要島の築城を計画指導することとなった。

同少佐は着任早々から各現地を巡回し、各島の情況を詳細調査した。築城した島は警備隊主力のいるウエーキ、ウオッゼ、マロエラップ、ミレ、ヤルート、クェゼリン、ルオット、マキン、タラワ、ナウル、オーシャンの十一カ所であった。しかし残念ながら要望のセメントが半量も到着しなかったので、計画通り実施できず重点的に一応完成することができた。ここで築城というのは、いわゆるトーチカ式の指揮所、通信所をつくることであるが、マーシャル方面のように低い島では、地下を掘るとすぐ海水がでてこの作業はまことに困難であった。

南洋部隊の防衛作戦会議と玉砕戦準備

昭和十八年五月中旬であった。トラック環礁内に碇泊する連合艦隊旗艦大和で、南洋部隊の各参謀が集り、各防備区域の強化について会議をしたことがあった。

予定時刻となると、各防備部隊の参謀がおのおの説明資料を携えて会議室に集合した。久し振りに会って懐しさのあまり、楽しそうな談笑がつづき、お互いに今日無事であることを喜び合った。そのうち古賀峯一長官が幕僚を従えて着席する。

この時はじめて山本五十六長官が戦死されたことを知って、山本長官および随行した幕僚達の英霊に哀悼の意を捧げた。会議は連合艦隊首席参謀の黒島海軍大佐の戦況全般に関する説明によってはじめられ、そのあと各地域ごとに代表者が防備の現状および要望事項について報告した。

最後に各地域の防備施設その他について真剣なる討議があって、古賀長官の挨拶によって本会議を終了した。

ここで当時の古賀長官の情況判断はまことに悲壮なものであって、その大要はつぎのようなものであった。

「すでに日本海軍兵力は、対米半量以下に低下し、その上ラバウル陸上航空戦の実施の結果、海上航空決戦兵力

の精鋭を失い、かりにわが所望の全力邀撃決戦ができたとしても、勝算はいちじるしく低下して三分もない。

ここにおいて、彼我兵力差をどうすることもできないので、海軍作戦に関する限り玉砕作戦をおこない。われ斃るるもなお彼に大きな損害を与えて時を稼ぐ以外にない。結局は、他の正面の支作戦には顧みず、ひたすらマーシャル、ギルバートの線を邀撃線として、艦隊決戦を企図することである。

勝算はいちじるしく低減したが、まだ絶無ではない。戦略的にも地理的にも我に有利なマーシャル線で、早期決戦をすることがよし玉砕戦に終っても最大の戦果を期待し得る唯一の戦法であると確信する」

その夜ささやかな夕食会があって、私もその末席におったが、本日の会議の全般からみて、マーシャル、ギルバート方面防備部隊に対する壮行会のようであったし、またこの夕食会は、われわれ代表者に対する送別会のようであった。

私は遠くマーシャル方面防備部隊を思い浮べ、この会議の情況をどのように伝達したらよいかいろいろと考えていた。絶対に負けないといえるような戦ならばいざ知らず、もちこたえるだけ時を稼いで最後の一兵となるまで戦うこの玉砕戦のなんと悲壮なものであろう。ありし日の大海軍を偲び、まことに感慨無量であった。これこそ死生を超越した崇高な愛国心に徹する以外に何ものもないと思った。

翌朝澄み切った南海の空を一路クェゼリン島に飛んで、早速阿部司令官に会議の経過および連合艦隊長官の悲壮な情況判断を報告した。そしてこの情況判断に基いて、マーシャル方面の玉砕戦準備に関する具体的方策について協議した。そしてその方策が一応まとまると、各主要島を巡回して、各警備隊、艦船その他の玉砕戦準備につき懇談し、早急にこれが完成を要望した。

玉砕戦準備方策は大体つぎのようなものであった。

一、戦闘指揮所の整備
二、防禦線（掩帯壕）の整備
三、文書その他重要物件の整理保管
四、レールその他在島の鉄材を集め、槍その他の応急防禦兵器の製作
五、米穀その他主食品をドラム缶に入れ、地下に埋没保存
六、在島の動物および植物の調理法の研究
七、対空、地上防備兵器の整備
八、敵上陸に対する防備訓練

こうして、マーシャル方面の玉砕戦準備は前述会議以来着々と整備しておった。この頃の米側の動静について、米国のモリソン博士は太平洋戦争史でつぎのように述べている。

「昭和十八年五月二十日、連合国合同参謀本部が承認した方策は、西太平洋に拠点を求め、航空攻撃をもって日本を屈服させる。万一それだけで効果を収めることができない場合は、北上して日本本土に上陸することである。

西太平洋に拠点を求めるには、まずマーシャル群島を占領せねばならない。このためには、準備行動としてギルバート諸島を占領して、同地からマーシャル方面の写真偵察をおこなう必要がある。」

昭和十八年十一月二十日、トラックにおける防衛作戦会議があってから六カ月、米国攻略部隊がきわめて機密な行動の下に、ギルバート諸島のマキン、タラワ両島に大挙来襲した。日本海軍守備隊は頑強にこれに抵抗して、相当の損害を敵に与えたが、同月二十三日ほとんど全員が玉砕して、ついに両島は米軍に占領されてしまった。

この作戦中、第四艦隊長官は幕僚とともにクェゼリン島にあって前線指揮をした。私もこれに参加して、作戦指導に協力した。つぎつぎに連絡される現地からの無電報告に切歯扼腕しながら、マキン、タラワ両島守備隊の奮戦情況を見守っていたが、ついに天皇陛下万歳の無電を最後に現地との連絡が杜絶してしまった。

やがてクェゼリン島（タラワ島より北方三五〇浬）も同じ運命となることをひそかに覚悟したのである。

私は十一月十五日附で艦政本部への転勤命令をうけていたのであるが、交代者がなかなか着任しなかった。いよいよ交代者が着任したので、事務引継ぎをおこなっていたところギルバート方面の防衛戦がはじまった。こうなると交代はもちろんできなかったので、この作戦が終了したあとやっと事務引継ぎを完了した。十一月三十日の朝、約一年八カ月間の住み馴れた懐しのクェゼリン島にいざさらばした。

タラワ島がクェゼリン島の南方三五〇浬の近距離にあり、この島が米軍に占領されたことは、マーシャル方面にとって、あたかも喉元に短刀をつきさされている情況であった。というのは、タラワ島の航空基地が急速に整備されているであろうし、敵航空機の来襲が今後はげしくなることが明白であったからである。私が輸送機でクェゼリン島を去る日も、すでに対空警戒を厳重にしていた時であり、果して私の出発が予定どおりできるかどうかが心配されたほどであった。しかし幸運にも予定どおり出発し無事トラックに到着し、トラックよりサイパン、そしてサイパンより横浜へと空の旅を続けて帰宅した。

◇　◇

昭和十九年二月六日、クェゼリン島もマキン、タラワ両島とほとんど同じように米軍に攻略されてしまった。

この悲報を知った私には、マーシャル方面の思い出があたかも走馬灯のようにつぎつぎに偲ばれてきた。

ありし日のクェゼリン（その三）

林　幸市

とくにこれが最後のお別れであろうと心に秘めてクェゼリン島を去る時、あの桟橋で見送ってくれた隊員の悲痛な面影がなんともいえない感じであったし、九五二空で司令と一晩中快談した時寂しく笑った司令の最後の顔がまぼろしのように浮んできた。

そして大挙した米軍の進攻に最後の一兵となるまで勇戦奪闘したであろうあの防禦線、最後まで敢闘したであろう戦闘指揮所など、クェゼリン島の戦場がまのあたりに浮んできた。こうして私は一晩中眠れず床の間に向って正座し、雄々しく散華した殉国の英霊に黙禱を捧げた。私の胸になにものかおし迫る霊感を感じながら。この日以来この思い出は私の脳裏に深く刻みこまれ、私の一生を通じ忘却できないものとなってしまった。と同時に御遺族の悼ましい御心境を拝察して、微力ながらできる限りの御力添えをしたいと念願し、またこれが英霊に対し今日生きている私達に与えられた唯一の仕事であろうと痛感した。

いよいよ二十年祭を迎える。御遺族も新なる思いで、久し振りに御霊と靖国神社で再会されることであろうし、私達もまた当時の思い出を新にすることであろう。

クェゼリン島の防衛戦

松平永芳

マーシャル方面の一般戦況

先にボーゲンビル島の無力化あり、又東部ニューギニア・ダンピールの失陥あり、所謂わが国防圏の前衛線は相次いで崩壊し、その東翼たるマーシャル群島の守備を担当する第六根拠地隊・第二十二及び第二十四両航空戦隊等の現地部隊は、戦力の強化促進（十二月五日の空襲によって失った七〇機に近い航空戦力の回復・十月下旬発令の陸軍海上機動旅団及び各南洋支隊の進出配備・各島に於ける邀撃陣地の構築等の強化促進）に昼夜を分たぬ努力を傾けつつあったが、目的達成意の如くならない実情下にあった。

マーシャル方面兵力配備

（昭和十九年一月二十九日現在）

南西方面艦隊	第三十二航空戦隊	第七五三航空隊	陸攻 一〇	ルオット
	第三十四航空戦隊（司令部ルオット）	第二五二航空隊	戦闘機三〇	タロア
		第二八一航空隊	戦闘機三五	ルオット
		第五三一航空隊	艦攻 一〇	ウオッジェ
		第七五二航空隊	陸攻 三〇	ルオット・タロア
第四艦隊	第六根拠地隊（司令部クェゼリン）	第六十一警備隊		クェゼリン・ルオット
		第六十二 〃		ヤルート
		第六十三 〃		ウオッジェ
		第六十四 〃		マロエラップ
		第六十五 〃		ウェーキ（大鳥島）
		第六十六 〃		ミレ
		第六十八 〃		クサイ
		第九五二航空隊	水偵 四	クェゼリン環礁エビゼ島
		海上機動第一旅団の歩兵第二大隊及工兵隊		
		南洋第一支隊の一部		クェゼリン
	海上機動第一旅団の歩兵一ケ中隊			
	南洋第一支隊の歩兵一ケ中隊・機銃一ケ中隊			ウオッジェ
	海上機動第一旅団の歩兵一ケ中隊			
	南洋第一支隊の歩兵一ケ中隊			マロエラップ
	南洋第一支隊・甲支隊の一部・山砲兵一ケ大隊・工兵一ケ中隊			ミレ
	南洋第一支隊の歩兵第二大隊			ヤルート
	海上機動第一旅団（第二大隊・工兵隊欠）			ブラウン
	南洋第二支隊			
	甲支隊の一部			クサイ
陸軍兵力			海軍兵力	

しかのみならず聯合艦隊司令部は、敵の主反攻は依然としてラバウル方面であるとの判断を下し、却って十九年一月には母艦航空兵力の最精鋭一〇〇機を南東方面に転用した為、混乱し切った動きの裡に同方面は一月三十日早朝の敵機動部隊による一斉攻撃を被る結果となった。

この時期に於ける同方面のわが兵力配置の状況は前頁の表の通りであった。

十九年一月三十日クェゼリン・ルオット・ウオッジェ等のわが航空基地を急襲した敵機動部隊は、ギルバート方面の基地航空部隊の支援を得て、更に翌三十一日及び翌々二月一日にも猛攻を加え続け来たったのに反し、わが航空兵力は反撃の余裕さえもなく、殆んど全部が地上に於て撃破し尽された。結局わが方は、時期的予想、敵上陸の地点的予想共々裏切られ（マーシャル群島に進攻の場合には、ラタック列島、就中ミレ・タロア・ウオッジェ等に上陸を企図する公算が多いと予想していた）、二月一日朝来の猛艦砲射撃の掩護下に、クェゼリン・ルオット両島に進攻上陸の米兵を迎え立たなければならない立場に追い込まれた。

ルオット島には第二十四航空戦隊の司令部があり（司令官海軍少将山田道行）、総兵力約二、九〇〇名を算したが、大部分は航空部隊の要員で、地上戦闘力は第六十一警備隊の約四〇〇名に過ぎず、加うるに敵上陸前の猛砲爆撃によって既に大半の者が傷ついていたので、戦闘開始の翌二日には全員玉砕し、交戦は僅か二日を以て終息した。

クェゼリン島の激戦

クェゼリン島には次表に示す陸海兵力が南北二地区を分担して守備していた。

第六根拠地隊司令官海軍少将秋山門造は、ギルバート作戦の戦訓に鑑み、敵の環礁内よりする上陸に備えて、礁内側の海岸に戦車壕機銃陣地等を急速に構築し、敵邀撃態勢に万全を期していたので、善戦敢闘、よく五日間に亘る敵の猛攻に耐え得たのであるが、この島は何分にも全員玉砕し、その詳細なる戦闘状況は殆んど不明である。

しかし僅かに残る作戦電報・戦況報告等を元にし、更に米軍公刊戦史の諸資料を加えて纏めた以下の戦闘記述によって、その動きの大要は理解し得るであろう。一月三十日、クェゼリン本島に於ては、敵機動部隊の空襲を被るとともに、〇七〇〇頃から戦艦三隻、駆逐艦五隻による艦砲射撃を受け愈々その強行上陸企図が明白になったので、暗号書は一部を除いて全部焼却処分に附した。而して一三三〇頃に至り、秋山総指揮官は、

敵ハ今タヨリ明未明ニ亘リ、湾内ニ侵入上陸ヲ企図スベキヲ以テ、海上部隊ハ全力之ヲ襲撃セヨ

との命令を下した。

なお、エニブージ島の第六通信隊送信所は、同日の砲爆撃によって破壊され、辛うじてTM電信機を以て連絡を保つ程度にその能力を激減した。

翌三十一日（敵の所謂D日）〇四三〇敵は戦艦以下十七隻の艦艇及びLST等四十五隻の輸送船を以て環礁に接近し、エニブージ島（本島より約六浬離れた小島）を始めとし、エニロペガン、キーヨ、ニンニ、チャンス各小島に上陸直ちにこれを占拠し、水深の深く船舶の礁内侵入に便利なキーヨ水道（キーヨ島ニンニ島間の水路）を確保した。

それのみならずエニブージ島に対しては、アーノルド中将（GENERAL ARNOLD）麾下の野砲兵五ケ大隊（一〇五耗榴弾砲装備の野砲兵第三十一・第四十八・第四十九第五十七大隊及び一五五耗榴弾砲装備の野砲兵第百四十五大隊の計五ケ大隊）を揚陸し、クェゼリン島砲撃準備を完成した。

一方同日の猛砲爆撃によってクェゼリン島の砲台は殆んど破壊し尽され、人員の損害は所在員数の約五分の一に達した。又同日の被害状況に鑑み、艦艇部隊の乗員はすべて陸上に揚げられ北地区守備隊に編入され、陸上戦闘に従事することに定められた。

なお、夕刻（一八二二）に於ける敵艦船の状況は、礁外視界内に戦艦五隻（米戦史によれば、それはミシシッピー・ペンシルヴァニア・ニューメキシコ・ミネアポリス・ニューオルレアンの五戦艦である）・巡洋艦五隻・駆逐艦十隻、輸送船十四隻が確認され、輸送船の一部はゲア水道を通過して礁内侵入に成功した。

明くれば二月一日、Dプラス一日目即ち敵のクェゼリン島上陸敢行の日である。敵は同島西方洋上五、〇〇〇ヤード附近に攻撃出発線を定め、未明小型上陸用舟艇に移乗して発進準備を整

総指揮官 第六根拠地隊司令官 海軍少将 秋山門造	北地区指揮官 第六十一警備隊司令海軍大佐 山形政二	第六十一警備隊（一部ルオット）	約一、五〇〇名
		第六通信隊	〃 四〇〇〃
		第六潜水艦基地隊	〃 三〇〇〃
		其の他	〃 三三〇〃
		第六根拠地隊司令部附属陸戦隊・第一、第二防空砲台員	約二、三三〇名
	南地区指揮官 海上機動第一旅団機動歩兵第二大隊長陸軍大佐 阿蘇太郎吉	海上機動第一旅団機動歩兵第二大隊及び工兵隊	〃 三〇〇〃
		南洋第一支隊の一部兵力	〃 一、二〇〇〃
		海軍兵力	約二、七〇〇名
		陸軍兵力	約一、二〇〇名
			約一、五〇〇名

えた。

やがて太陽が昇り、〇七四五に及ぶや、米軍は上陸海岸に対する戦艦群の露払い射撃を皮切りとし、エニブージ島よりする野砲兵大隊の掩護射撃、艦載機による銃爆撃等全火力を以てする徹底的な攻撃を展開した後、頃はよしと〇九〇〇上陸発動を下令した。而して米舟艇の先陣第一波が上陸海岸に乗し上げたのは正に〇九三〇のことであった。ここに於て彼我の間には数日に亘る悽愴を極めた陣地攻防の白兵戦が開始された。

これより先、秋山総指揮官は、

味方ハ一兵トナルマデ陣地ヲ固守シ増援部隊ノ来着マデ、本島ヲ死守スベシ

と全軍に命令し、自ら音羽参謀等幕僚を従えて陣頭指揮をしたが、同夜二〇〇〇頃前線視察に赴くべく出壕した際飛来し来った敵弾を受けて戦死するに至った。

同夜陸軍を主力とする南地区守備隊の全兵力は、夜襲を決行して一旦敵を水際附近に押し戻したが、艦砲による掩護射撃及びエニブージ島よりする砲兵の集中射撃に遭遇し、大損害を被って攻撃は挫折、再び陣地に復した。

二月二日・三日・四日は引き続き北方へと圧迫されつつも、全軍敢闘、熾烈なる陣地攻防戦を展開したが、陸軍大佐阿蘇太郎吉は、四日一〇〇〇首脳部自刃の後、自ら守兵をひっさげて正面の敵中に躍り込み、美事な最期を遂げた。かくて翌々六日には全島完全に敵の占領する所となった。従ってその後、海軍当局に於ては玉砕諸勇士の戦死確定の日を二月六日と定めた。

なお、クェゼリン本島北方六浬にエビゼ島あり、ここには第九五二海軍航空隊及び第四施設部クェゼリン支部の一部人員計八百名程が駐屯配備されていたが、三日〇九三〇敵上陸軍を迎え善戦するも及ばず全員玉砕した。

以上がクェゼリン島を中心とする戦闘の実況であるが、わが将兵が如何に善戦敢闘したか明らかである。

最近のクェゼリン島

長谷川　敏

旧内南洋諸島の現状

一、太平洋信託統治地域

日本の委任統治領であった旧内南洋諸島は、戦後、米海軍の軍政を経て、昭和二十二年四月、戦略信託統治地域として、米国を施政者とする信託統治協定が国連安保理事会で承認され、同七月発効した。そして、太平洋信託統治地域と呼ばれ、米国が行政、立法、司法の全権を持っており、この地域への入域許可の審査はきびしい。ところで、この広い、しかし、殆んどが海の地域に人口は七万程度といわれているが、目下、この島の人達は文明的な国づくり人づくりに懸命である。

島の人達の仕事は、椰子の実から石鹸の原料となるコプラを採ることである。一ポンド四セント（約十四円）位だそうである。三十歳以上の中年層の人達は、未だに日本語を覚えていて、上手に話しかけてくる。片仮名や漢字を書ける人も少くはない。日本のことを〃内地〃と呼び、日本製の品物、特にタバコ、ポマードなどは米国製のものよりも非常に好評である。中には「ホマレかキンシはあるか？」と聞きに来る人もいる。大きな島には店があるが、そこには日本製の衣類や缶詰などが棚に並んでいる。

又、どんな小さな島でも、小学校と教会があり、先生も牧師も島の人である。中学校、高等学校は、南洋支庁のある島に設けられており、更に成績優秀な者には奨学制度があって、グアム島やハワイの大学に派遣される。

次にこれからの各群島の最近の模様を少しく記してみよう。

二、マリアナ群島

ここは火山によって出来た群島で、山あり谷ありの景色のよいところである。島の人達も文化的だ。太平洋信託統治政府（南洋庁）が昭和三十七年七月、グアム島より、ここのサイパン島に一時、移って来ている。マリアナ支庁もサイパンにあるが、ロタ準支庁の次長にはマングロナ氏という島の人がなっている。

三、マーシャル群島

ここはサンゴ礁で出来た島々からなっている、従って椰子やマングローブの木でこんもり茂っていても、島自体は海抜僅か数米という低く平坦で細長いものである。大きな暴風雨に会うと島の殆んどが水をかぶってしまうことがある。こういうことは百年に二、三回位あるという。日本時代南洋支庁のあったヤルートも数年前、暴風雨に見舞われ数人の死者が出たという。

戦後、南洋支庁はマジュロ島に移った。ここには中学校、放送局、映画館玉突場などがある。毎年夏頃に、マーシャルの全環礁中から、二、三名ずつの代表がこの島に集まり、マーシャルの繁栄のために諸問題を協議し合う。マーシャルの新しい指導者、ドワイト・ハイネ氏は、ミクロネシヤ議会議長の要職にあり、又、マジュロ中学校の校長先生でもある。彼は島の人で人々からツー・アイという愛称で呼ばれ、マーシャル中の信望を集めている。米国の原水爆実験がビキニとエニウエトック環礁で行われた時には、米国に渡り、マーシャルの大酋長、アマタ・カプア氏等と共に厳重に、抗議と補償を

申し入れたという。

四、カロリン群島

東カロリンは大体マーシャル同様、サンゴ環礁で出来ているが、西カロリンは大体マリアナと同じ、火山によって出来ている。支庁は日本時代と同じで、ポナペ、トラック、ヤップ、パラオに各々ある。パラオは日本時代に南洋庁があったためかとても、親日的であり、パラオ支庁の次長には、今、日系の矢野竹雄氏がなっている。夜、沖縄の日本語放送がよく入るので、ここの人は新しい日本の流行歌など、かなり知っている。又、パラオ放送局でも日本の戦前、戦後の流行歌のレコードを屢々流している（トラック島にも放送局がある）。ここにはハワイ銀行の出張所も出来た。

ヤップ地区は、保守的で、ヤップ、ウルシー、ヌグール等々の島々は、未だにフンドシ、腰ミノ姿である。しかし若い人達には着衣している人もかなりおり、この習慣が消えるのは時間の問題であろう。フンドシ或は腰ミノでオートバイ（日本製のが多い）にまたがって飛行場の滑走路を走り廻ったり或は日本の雑誌を読んで笑ったりしている風景はちょっと面白い。

最近のクェゼリン環礁

一、米軍の基地

クェゼリン環礁はマーシャルの全環礁中、最大のものである。そこの本島、クェゼリン島は、御承知のように今は米軍の基地となっている。まず、船からでも飛行機からでも、この島に近づいて、真先に眼に入るものは、島の中程にある円形に組まれた巨大な金属製の囲いと、その隣りにある、これ又大きな白い半球状の建造物であろう。そして、島の西端にはナイキ・ジュースの発射場がある。ところで、これらのことについては、朝日新聞ですでに掲載しているので、その一部を記してみよう。

ナイキ・ジュースとは飛んで来る大陸間弾道弾を打ち落とす〃対ミサイル用ミサイル〃の一つで、一番開発が進んでいる。そして前述の金属製の囲いの中央部には、レーダー送信所があり、その屋上にある大きな三角形のアンテナは野球場の内野ほどもあるという。これが一分間に十回、ゆっくり回って、降下してくるミサイルの弾頭をスクリーンに捕える訳である。又、送信所を囲んでいる金属製の塀の高さは二十米以上もあるという。これは強力な送信機が発生する電磁波から、人や施設を保護するためだそうだ。白くて半球形のものもやはりレーダーであろう。時折り、カリフォルニヤのバンデンバーグ基地から、アトラス弾道弾を発射、ここのナイキジュースで捕捉、撃墜の練習をしているという。

さて、クェゼリン島には、これらを中心とし、これに附随する物が設置されている。しかし、ここに働く米国人達は家族を伴って来ているので、殺ばつとした雰囲気は感じられない。アワー・グラスという日刊新聞を発刊し、日中はプールで泳ぎ、夕方涼しくなる頃には女子チームがソフト・ボールに興じ、そして暗くなるとあちこちで映画会が始まる。こういう時には、この島が基地であるという実感から一層離れてしまう。

この本島には島民は住んでいず、同じ環礁中の近くの幾つかの島に、まとまり住んでいる。そして、身分証明書を示して本島に毎日仕事しに通う。男は労務に、女は家政婦として、この労務者達は英語より日本語がうまいから、彼等の監督には、同じ米国人でも日系の二世達が担当している。こういう基地で日本語が仕事に使われているというのは、ちょっと奇異の感がするが、彼等は前述のように日本語が大変上手であってみれば、不思議とするに当らない。二世よりも上手にしゃべり、且つ字を書く人も少くないらしい。

日本語といえば、〃イハイルペカ・ラス〃と書かれた札が、ミサイルの発射場附近一帯を囲んだ金網の各所につけられている。勿論〃ハイルペカラズ〃の意で、基地の管理者が多分、島の人の誰かに下書きさせたのを、そのまま写し方々に掲示したのであろう。それにしても、この札には、英語とマーシャル語でも立入禁止と書かれているので、日本語の方は一体誰に読ませるのかなと思わせる。

二、戦火の跡

クェゼリン本島はすっかり整理されてしまって、ふた昔前の激戦を思い出させる物は殆んど残されていないといってよかろう。

まず、飛行場の待合室の片隅には、マーシャル全環礁の地図と、各環礁で行われた戦いの日付とが出ている。そして、側には、復写したらしく少々ぼけた十枚位の戦争の写真も貼りつけてある。これによるとクェゼリン環礁は一九四四年一月二十九日、マーシャル群島中で最初に戦闘が行われ、五、六日間で終っている。

この待合室から舗装され、今はすっかりきれいになっている通りに出ると直ぐに〃一九四四年二月一日、クェゼリン上陸、……〃と英文で刻まれた碑が建っている。また、待合室から海岸近くの小高くなった芝生の上には十字架と真白く塗られた大きないかりが置かれている。ここが米国将兵の墓地であろう。

ここからずっと西の方、ミサイルの発射場の方に日本人墓地がある。

⚓　⚓　⚓

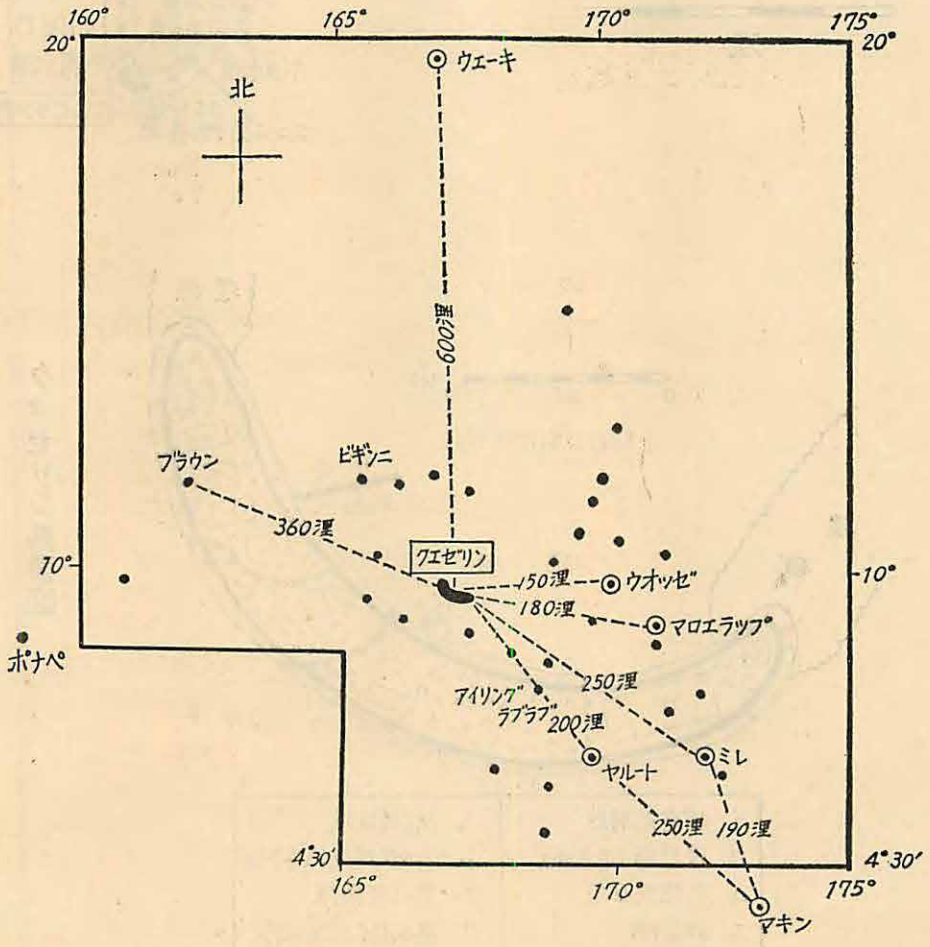
最近のクェゼリン環礁

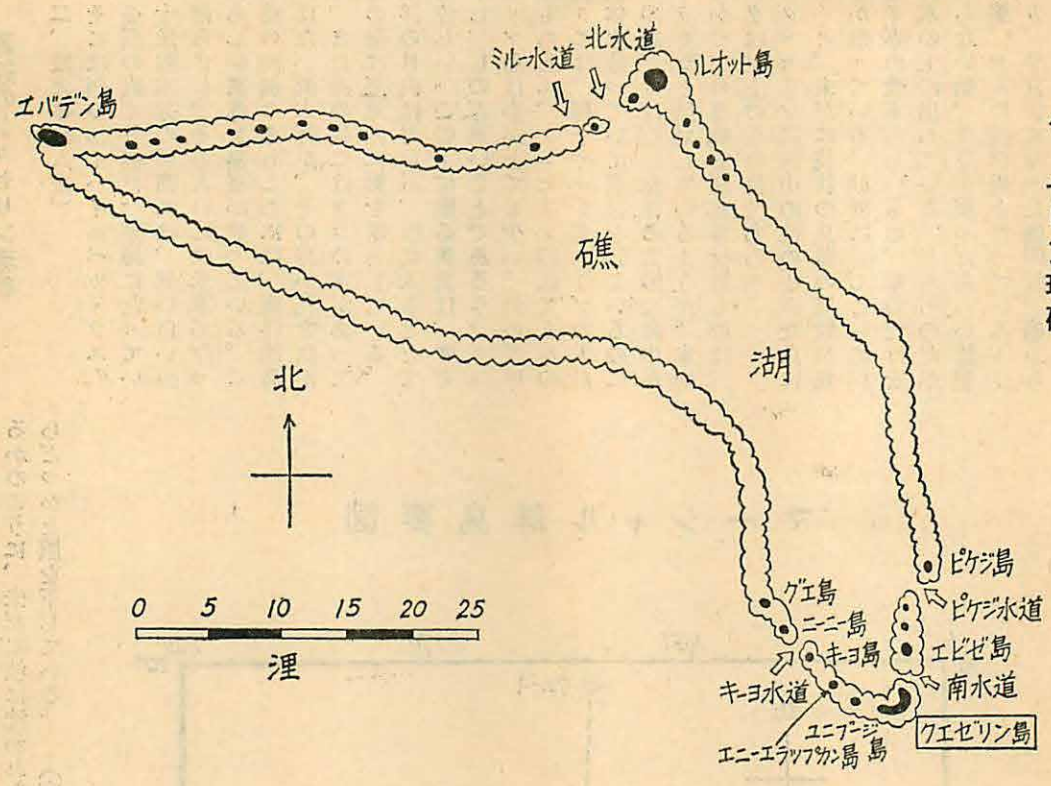
二、戦火の跡（続）

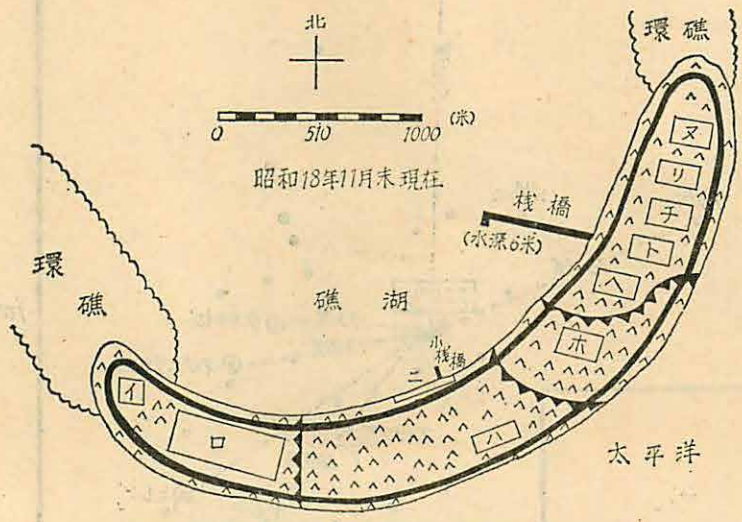
そこは例の〝イハイルペカ・ラス〟の金網の直ぐ外側だ。墓地になっている十米弱四方の周囲には、低い白い柵が廻らされ、その入口には米軍が作ったらしい真赤な鳥居が建っている。この柵の内側のあちこちには、南洋諸島にはない浜木綿が、その白い花を咲かせ、また柵の横にはタコの木があってその葉は墓地内に影を落としている。南洋の日向は暑いが、陰に入るととても涼しい。この下に眠る英霊は、さぞかし、しのぎ易いことであろう。クェゼリン島は影がとても少い。他の環礁はもちろん、クェゼリン環礁でも他の島々には、椰子やマングローブの木が全体を蔽っていて濃緑をしているのにこの島だけは強い南洋の太陽で島中がキラキラと反射しているようだ。本島でかつての激戦を想起させるものは、いまは以上のもの位であろう。

クェゼリン環礁中の他の小さな島に行くと、未だに彼我の兵器の残骸が幾らか残っている。砂浜にえんこしている米軍の戦車らしいもの、船首だけを海水の上に出している、どちらのだか判らない船、米軍が使ったらしい鉄製の橋、カニの遊び場となっているトーチカ、半分砂に埋った機関銃、船からはずされたスクリューなどが、或は錆びてくさり、或はひん曲って、今まで行われたであろう一応の整理に反抗するかのように、未だに波に洗われながらどっかと腰を下している。（完）

マーシャル群島要図







イ 捕虜処刑地	ヘ 第6通信隊
ロ 飛行場(滑走路)	ト 第6根據地隊司令部
ハ 原住民住宅	チ 第61警備隊
ニ 施設隊	リ 第6潜水艦基地隊
ホ クエゼリン神社	ヌ 陸軍部隊

^^ --- やしの密林を示す　}--- 防衛線を示す
▬ --- 一間道路を示す

大東亜戦争中　内南洋諸島方面の作戦経過

会長　浮田信家　編

第一章　ギルバート諸島方面の作戦

第一節　開戦当初におけるギルバート諸島方面の作戦

第一項　ギルバート諸島戦略的地位

ギルバート諸島は、日本の南洋委任統治領の最南端であるマーシャル諸島の南約180浬より南東に凡そ360浬に亘って横たわる10数個の環礁群に依って構成され、同諸島の東約500浬には米領ホーランド（開戦前既に陸上飛行場完成す）及びベーカーの2島があり又西400浬圏内には航空基地建設可能と認められる英領ナウル、オーシャンの両島が存在していた。更に又ギルバート諸島と米領サモア諸島及び仏領フィジー諸島との略々中間附近には英領エリス諸島が介在して居り之等一連の敵性諸島は、日本のマーシャル諸島に対する側方脅威を形成するものであった。

従来久しきに亘って日本海軍は主として兵力量の関係から戦時マーシャル諸島を防衛保持することは困難であるとの思想が強く、随って太平洋正面の防禦前線はカロリン諸島、マリアナ諸島に置くのを有利と考えられていた。然るに開戦前10年来の航空機特に陸上攻撃機の性能向上は日本海軍の兵術思想に幾多の大きな影響を及ぼしたが、開戦前数年前マーシャル諸島に対する用兵的価値が重視せられる様になり、対米邀撃作戦上マーシャル諸島は、日本の前哨基地群として、其の防備を強化し確保することが有利とする意見が有力となった。

この様な状況の下に昭和14年の夏日本海軍は、相当規模の調査団をマーシャル諸島に派遣し詳細な主要調査を実施し、翌15年中期から右調査団の結果に基いて、同方面に水陸軍事施設（主として航空基地）の建設を開始するに至った。随って之と併行してギルバート諸島方面の戦略的地位も重視せられ、その主要資料の蒐集も本格的に実施せられたのであって開戦時迄に同諸島方面の情報は概ね判明していた。

第二項　開戦前の形勢

一、マーシャル諸島方面への兵力配備

昭和15年中頃から開始されたマーシャル諸島方面の水陸防備諸施設は順調に進捗し海軍兵力が逐次展開された。即ち昭和16年1月15日第6根拠地隊及び第24航空戦隊が編成され同年3月中旬以降逐次進出し同方面の兵力展開が完了した。そして開戦時にはマーシャル諸島方面の我が兵力配備は次のとおりであった。

部隊	兵力	配備位置
第6根拠地隊	根拠地隊司令部	クェゼリン
	第8砲艦隊（八海山丸・光島丸・豊津丸）	〃
	第16掃海隊（第3玉丸・第5玉丸・第7昭和丸・第8昭和丸）	〃
	第62駆潜隊（第6拓南丸・第7拓南丸・桂丸）	〃
	第63駆潜隊（第3昭南丸・第3文丸・第3寿丸）	ヤルート
	第64駆潜隊（第10昭南丸・鹿島丸・第11昭南丸）	マロエラップ
	第65駆潜隊（第6京丸・第7京丸・宇治丸）	ポナペ（後ウオッゼ）
	第6防備隊	クェゼリン
	第51警備隊	ヤルート
	第52警備隊	マロエラップ
	第53警備隊	ウオッゼ
	第19航空隊	クェゼリン
	特設望楼	ピカール、ポカアック、エポン、ロンゴラップ
第24航空戦隊	航空戦隊司令部	ルオット
	千歳海軍航空隊	ルオット、ウオッゼ、マロエラップ
	横浜海軍航空隊	ヤルート
	神威	ルオット
	五州丸	ルオット

二、ギルバート諸島方面に関する情報

マーシャル諸島方面に我が兵力が配備されるに至って、その隣接地域であるギルバート諸島方面に対する情報の蒐集が逐次行われ開戦時迄に我軍の知得した同方面の情況は次の様なものであった。

○ホーランド方面

一、少数の航空兵力は駐屯していても軍事施設として見るべきものなし。

二、逐次航空兵力及び防備施設等が増強される徴候がある。

○ギルバート諸島方面

一、タラワ・マキンには無線電信局があり白人若干居住するが兵力は駐屯していない。

二、タラワ・アパママは陸上攻撃機使用可能の飛行場を建設できる。且つ地勢土質等はマーシャル諸島の夫れと略々同様であって、工事の施行は極めて容易である。

三、水上機基地の適地は多数選定できるが就中（なかんずく）マキン及びアパママは最適地と認められる。

○ナウル・オーシャン方面

一、兵力の駐屯はなく又軍事施設も見るべきものはない。

二、ナウルは陸上攻撃機用飛行場の建設が可能であり且つ地形上防備施設の構築は容易である。

○記事　昭和16年11月16日（開戦前）マーシャル諸島所在の我が陸攻一機はギルバート諸島方面の隠密偵察を実施したが前記知得情報と変りのないことを確認した。

第三項　開戦初期のギルバート諸島方面の作戦

山本聯合艦隊司令長官が機密聯合艦隊命令第一号をもって、南方部隊は開戦初期グァム、ウェーキ両島を攻略すると共にギルバート諸島を掃蕩し且つホーランド島における敵航空兵力を撃破しその活動を封殺すべき任務を与えた南洋部隊指揮官（第四艦隊司令長官

海軍中将井上成美）は右聯合艦隊命令に基いてホーランド、ギルバート諸島に対する作戦行動を開始した。その概要は次のとおりであった。

一、作戦方針

イ、劈頭主として航空機及び潜水艦を以てホーランド方面敵航空兵力を奇襲攻撃し、これを撃滅すると共に爾後敵の該基地利用を阻止する為軍事施設の破壊を行う。

ロ、他の兵力を以てギルバート諸島諸要地の掃蕩を実施すると共に一部要地を占領し之に航空基地を設営し我が航空威力圏の拡大を図る。

二、兵力部署

本作戦実施のため南洋部隊指揮官は昭和16年11月21日左の兵力部署を発動した。

部隊	指揮官	兵力	主要任務	作戦要領
潜水部隊	第七潜水戦隊司令官	旗艦迅鯨33潜水隊（ロ64・ロ65・ロ68）26潜水隊（ロ62・ロ61・ロ60）	マーシャル方面防備部隊の作戦に協力ホーランド島の監視	マーシャル諸島方面を基地として作成す
ホーランド方面攻撃支援隊	第十九戦隊司令官	一九戦隊 沖島天洋丸 二九駆 夕凪朝凪 五一警	ホーランド方面攻撃支援	一、ギルバート諸島要地の掃蕩並に攻略 二、ギルバート諸島方面に航空基地を設営し航空部隊と協力してホーランド島方面の航空攻撃を支援す
航空部隊	二十四航空戦隊司令官	二四航戦 千歳空、横浜空神威 五州丸 六根所属特設砲艦二（長田丸）	一、敵航空兵力の撃滅 二、攻略作戦協力 三、所在防備部隊の作戦協力	一、ウエーキ島攻略作戦に協力すると共に情況許すに至れば飛行艇若干をウエーキ島に進出哨戒を行う 二、一部兵力を以てホーランド方面支援部隊と協力しホーランド島の偵察攻撃を行う 三、マーシャル方面防備部隊作戦に協力 四、適時ラボール方面の偵察攻撃を行う
マーシャル方面防備部隊		八砲艦隊（長田丸欠）六三駆潜隊、カロリン丸、第二太陽丸、第二高千穂丸、神風丸	マーシャル諸島の防備	三、潜水部隊のホーランド改撃を支援す

三、作戦経過の大要

開戦前即ち昭和16年11月16日南洋部隊指揮官は第24航空戦隊所属陸攻一機を以てギルバート諸島方面の隠密偵察を行い、その後異状がないことを確認し11月21日には前記南洋部隊兵力部署を発動し作戦行動待機となった。

12月4日午後2時ホーランド方面監視攻撃の任務を持った潜水部隊はクェゼリンを出撃した。

12月8日（開戦当日）〇六三〇以降航空部隊は攻撃行動を開始すると共に爾余の部隊は所定の戦闘行動を開始した。その状況は概ね次の通りである。

(イ) ホーランド方面攻撃支援隊

12月8日一三三〇第19戦隊（沖島・天洋丸）、第29駆逐隊第2小隊（朝凪・夕凪）、第8砲艦隊の一艦（長田丸）はギルバート諸島攻略のためヤルート島を出撃し、10日午前〇時朝凪夕凪はタラワ環礁に到着、直ちに聯合陸戦隊を無抵抗裡に揚陸、〇六〇〇迄に全島の掃蕩を完了し、爾後マキン泊地に急行し同地に於ける航空基地設営作業に協力し、13日同地発14日ルオット泊地に帰投した。

沖島及び天洋丸（第51警備隊派遣陸戦隊搭載）は10日未明マキン島に達し、〇二一九第51警備隊派遣陸戦隊及び沖島陸戦隊を揚陸、〇八〇〇迄に同島の掃蕩を完了し、長田丸搭載の航空基地物件を急速揚陸、爾後マキン航空基地の設営作業を実施し、11日一三〇〇迄に大艇（大型飛行艇）用応急基地の設営を一応完了した。

第51警備隊派遣陸戦隊はその後も引続きマキン航空基地警備の為同島に残留したが、沖島は11日ピカト島、リットルマキン島に、24日アパイアン島に夫々陸戦隊を揚陸し同地の掃蕩を終えた後陸戦隊を収容してルオット島に帰投した。

朝凪・夕凪・天洋丸は13日ルオットに回航した。又津軽・朧は同日附ホーランド方面攻撃支援隊に編入

備考　津軽・朧は12月13日ホーランド方面攻撃支援隊に編入

ランド方面支援隊に編入せられ22日マキンに到着した。

（註）第51警備隊は昭和17年4月10日、第62警備隊に改編された。

(ロ) 潜水部隊

12月4日一四〇〇呂64潜、呂68潜、8日〇三三〇呂63潜は夫々ホーランド島に向けクェゼリンを出撃し11日未明に呂64潜はホーランド島を、呂68潜はベーカー島を夫々砲撃陸上施設を破壊し呂63潜は14日ホーランド島に近接して偵察を実施した結果同島には敵機を認めず且つ陸上施設の大部は破壊されたことを確認した。

各潜水艦は15日一五〇〇より19日の一六二〇迄の間に全部クェゼリン泊地に帰投した。

(ハ) 航空部隊

12月8日〇六三〇横須賀海軍航空隊の大艇15機はホーランド島攻撃のためマジュロを発進し、途中天候不明の為攻撃を中止したが、翌9日再び発進、ホーランド島攻撃を行った結果同島には敵機を認めず且つ航空基地は最近使用の形跡がないことを確認し全機無事帰投した。又同日大艇3機はナウル・オーシャン両島を攻撃し、同島に異状がないことを確認全機帰投した。

爾後航空部隊は大艇を以て概ね一週間一回程度ホーランド、ベーカー両島に対し監視を兼ねて航空攻撃を実施。

四、爾後の状況

ギルバート諸島掃蕩後はマキンを除き爾余の諸島に兵力を常駐せしめず、マキンには第51警備隊派遣隊及び横浜海軍航空隊派遣基地員を配備して航空基地の警備に従事せしめ横浜海軍航空隊の大艇数機が同基地に進出、同方面の哨戒に従事した。

斯くの如き状況は昭和17年8月17日米海兵隊の小兵力がマキンに奇襲上陸を行う迄継続せられた。

第二節　米海兵隊のマキン奇襲上陸

第一項　敵来攻前の状況

昭和17年7月初旬以降ギルバート諸島、マーシャル諸島方面には敵潜の出没が頻繁となり、一時第6根拠地隊司令官は同方面に対する一般艦船の出入港を禁止し所在部隊の全力を挙げて、敵潜掃蕩を実施した程であった。

又7月24日早朝敵大型機3機はマキン上空に飛来し執拗に旋回して写真撮影を実施した。更に8月3日我が哨戒機はオーシャン島に繋泊中の敵飛行艇2機を発見しこれに銃撃を加えた。

以上の外は同方面に於ける敵の作戦行動は一般に閑散であって敵の来襲が切迫している徴候は特に認められなかった。然るに8月7日米機動部隊は、大挙してツラギに空襲に加え、艦砲射撃掩護の下に同島に海兵隊を揚陸し、同島を占領、次いでガダルカナル島に上陸を開始するに至った。斯くの如く我が軍の視聴がガダルカナル島方面に指向されて居る情況下に突如米海兵隊の一部隊がマキン島に上陸を開始した随って敵のマキン上陸は我が軍にとっては全くの奇襲であった。

第二項　米海兵隊のマキン来攻時の状況

一、マキンの陸上戦闘状況

8月17日未明米海兵隊約220名（註、ヘインズ海軍中佐の指揮する第二海兵奇襲大隊）は潜水艦2隻（註、ノーチラス、アルゴノートの2隻）に分乗、マキン島に近接〇三〇〇上陸用浮舟に依って環礁の外側海岸から上陸を開始した。当時同島の守備兵力は第62警備隊マキン派遣隊及び第14航空隊（大型飛行艇隊）基地員等73名であったが、島民の急報によって直ちにトラック及び機銃車に搭乗して出撃、敵と遭遇戦を実施した。この戦闘では我が方は準備の不足と兵力寡少のため〇五三〇頃に至って全く敵の包囲に陥り本部との連絡杜絶し弾薬もまた欠乏し、危険の状態に陥ったので派遣隊指揮官海軍兵曹長金光九三郎は部下11名に陣地線の死守を命じ自ら爾余の兵力を率いて〇九〇〇最後の突撃を敢行全員戦死するに至ったが陣地守備の11名は飽く迄抗戦を続けて陣地を死守した。

敵は同夜々陰に乗じて包囲を解き潜水艦に乗艦退却した。（註、敵の大部は17日夜一部は18日19日夜マキン島を撤退したことが後日判明した）

本戦闘において我が軍の損害は戦死43名行方不明3名計46名であって生存者は警備隊員18名、航空基地員3名その他6名計27名であった。

二、南洋部隊の作戦指導の概要

マキン所在通信隊は米海兵隊の同島上陸並に我が部隊の苦戦の状況を報告したが同日〇九〇五以後同島との通信連絡は杜絶した。

南洋部隊指揮官は17日午前先ず第19航空隊の全力（水偵12機）を以てマキン来襲の敵艦艇及び上陸兵力の攻撃を命ずると共に第24航空戦隊兵力をマーシャル方面に集結せしめ、又第6根拠地隊指揮官をして艦艇及び陸戦兵力を、マキンへ増援するよう命令した。

以上の命令に基いて航空部隊は全力（陸攻23機、戦闘機40機、水偵10機）を以て17日及び18日マキン附近海面を捜索、敵艦船の攻撃を企図したが、潜水艦以外敵を発見できずマキン陸上の銃撃を実施した所地上との連絡に成功、同島には尚味方部隊の生存者があることを確認し同島に対する空襲を中止した。

又第6根拠地隊司令官はマキン救援の為次の要領に依り艦艇並びに陸戦隊の派遣を準備した。

(イ) 第1次増援計画

マーシャル方面所在部隊より銃隊2ケ小隊、機銃隊2ケ小隊、速射砲2門を抽出し、第65警備隊其の他護衛の下に20日一三〇〇マキン環礁内に進入せしめて強行上陸を行う。

(ロ) 第2次増援計画

概ね第1次増援部隊と同程度の兵力

をマーシャル方面所在部隊より抽出し常磐艦長指揮の下に21日一三〇〇マキン島環礁外（状況に依り環礁内に進入）より常磐陸戦隊と共に上陸せしめる。

(ハ) 第3次増援計画

トラック方面所在兵力より陸戦隊若干を抽出し第27駆逐隊及び第36哨戒艇を以て急速現地に進出せしめる。

以上の計画に基いて、第一次増援部隊は計画の予定日より一日後の8月21日一一〇〇マキン島に達し、上陸を行ったが敵は既に同島より撤退した後であった。戦況斯の如き状況であったので第2次以下の派遣は中止した。

第三節　ギルバート諸島方面の防備強化

前節のマキン敵来襲は敵がソロモン群島方面に於て、新作戦を開始するに当り我が兵力を中部太平洋方面に索制する目的で行われたものと認められたが我が軍にとってはギルバート諸島方面の防備上の欠陥を認識し得た結果となり、これに基き爾後同方面の防備は著しく強化されることとなった。

第一項　ナウル及びオーシャンの占領

ナウル、オーシャン両島の攻略に関しては、昭和17年5月南洋部隊指揮官指揮の下にMO作戦（ツラギ、ポードモレスビー、ナウル、オーシャン攻略作戦）の一環として実施される予定であったがMO作戦はツラギ攻略に成功した外は敵機動部隊の出現によって、その他の作戦は中止するのやむなきに至った。

即ちMO作戦に於てはナウル、オーシャン攻略部隊は海軍少将志摩清英直接指揮の下に、第19戦隊（沖島）第23駆逐隊（菊月・夕月）、金竜丸、高瑞丸、第六根拠地隊陸戦隊、鹿島陸戦隊、竜田、津軽の兵力を以て5月15日ナウル、オーシャンを同時に攻略する予定であった。

攻略部隊は5月10日ラボールを出撃したが、翌11日未明指揮官乗艦の沖島はクインカロラ沖合で、敵潜の雷撃を受け沈没したため、攻略期日を17日に延期した。然るに15日に至って、味方飛行機から、有力な敵機動部隊がツラギ東方海面に出現したことを報告するに及んでナウル、オーシャン攻略部隊はトラックに避退し、この二島の攻略は中止されるに至った。

米海兵隊のマキン来襲の結果ナウル、オーシャンの処理が再び問題化するに至った。即ち8月20日山本聯合艦隊司令長官は第三、第四艦隊司令長官に対し飛行機及び駆逐艦をもって速かにナウル、オーシャン両島を攻撃し同島所在の航空及び通信施設を破壊し、敵飛行艇等の利用を阻止するよう命令した。次いで8月24日更に山本長官は、第四艦隊司令長官に対し29日以後成るべく速かにアパママ、ナウル、オーシャン各島を占領するよう命令した。

以上の命令に基いて南洋部隊指揮官（第四艦隊司令長官）は8月22日は第24航空戦隊飛行機（各陸攻9機、飛行艇1機宛）を以てナウル、オーシャン両島の爆撃を実施すると共に第27駆逐隊の有明・夕暮の二艦を以て同日夜間両島の砲撃を実施し、その軍事施設に相当大なる損害を与えた。

次いで8月25日午後、有明はナウルに対し、翌26日一五〇〇夕暮はオーシャンに対し夫々陸戦隊を揚陸し、何れも無抵抗裡に（両島共敵の兵力なし）これを占領し掃蕩を完了した。

マリアナ諸島方面所在の第五根拠地戦隊は8月31日ナウルに到着、有明陸戦隊と交代してナウルの占領を継承した。又マーシャル諸島方面所在の第63警備隊より派出された一部兵力は9月1日オーシャンに到着、夕暮に代って同島の占領を継承した。

第二項　タラワ、アパママの占領

タラワ、アパママ両島はギルバート諸島中最良の航空基地の適地であったが、タラワに対しては昭和16年12月10日朝凪、夕凪の陸戦隊が上陸して掃蕩を実施した後兵を撤し、爾後両島共、全く無防禦の状態で放置されていた。

南洋部隊指揮官は前記聯合艦隊司令長官の命令に基づいてマーシャル方面部隊より陸戦兵力を抽出し、9月2日アパママに対し、翌3日タラワに対し陸戦隊を揚陸之を占領した。

第三項　その後に於ける海軍兵力の増強

大本営は米海兵隊のマキン空襲以来ギルバート諸島の防備を更に一段と強化する方針に決定したが昭和17年8月5日横須賀で編制された横須賀第六特別陸戦隊をギルバート方面に増強することに決し、同隊は8月24日横須賀発（日立丸、神威丸に分乗）、9月5日イミエジ（ヤルート環礁）に到着、9月15日ギルバート諸島に進出した。

同隊は爾後9月26日迄の間にベル島、マイアナ島等敵の潜伏通信基地の疑ある諸島嶼を全部掃蕩した後次の様な配備についた。

本部	約一〇〇〇名	ベチオ島
分遣隊	約　五〇〇名	マキン島
見張所	七五名	アパママ

右横須賀第六特別陸戦隊のギルバート諸島進出に伴い従来同方面に駐屯していた第62警備隊及び第63護備隊の各派遣隊は、一部横須賀第六特別陸戦隊に編入されたが爾余の兵力は原隊に復帰した。

昭和18年2月15日新に第三特別陸戦隊が編成せられギルバート諸島及びナウル、オーシャン両島を含む一帯の地域の防備を担当することとなった。これに伴って横須賀第六陸戦隊は解隊されて、第三特別根拠地隊に吸収され、従来のナウル、オーシャン両島防備諸部隊を以て第67警備隊が新設せられた。

又佐世保第七特別陸戦隊も新に第三特別根拠地隊に編入せられ、3月17日タラワに進出した。

即ち昭和18年4月1日現在第三特別根拠地隊の兵力並びに配備は左の通りであった。

三特根司令部
三特根本隊（旧横六特陸）
佐七特陸
朝凪、第六拓南丸
一二三号魚雷艇
第一一一設、四建派遣隊　タラワ
三特根派遣隊
生田丸、九五二空派遣隊　マキン
三特根派遣見張所　マキン
六十七警　第五特根派遣隊　アパママ
四三警派遣隊　ナウル及びオーシャン
六三警派遣隊

尚更に6月10日新編成の横須賀第二特別陸戦隊が第三特別陸戦隊に編入せられ、6月25日ナウルに進出、所在第67警備隊と共にナウル防備に従事した

第四項　陸軍部隊の増援問題

ギルバート諸島に対しては取り敢えず海軍兵力を増強する方針の下に、第三特別根拠地隊の同方面進出を以って一応其の防備態勢を整えたが、其後ソロモン、ニューギニヤ方面の作戦状況にも鑑み、敵が新たに中部太平洋方面に進攻を開始する可能性も増大するに至ったので大本営は更に陸軍兵力を中部太平洋方面に増派することに決定し、左記陸軍兵力を要地に派遣し所在海軍部隊指揮官の指揮下に入れ、防備の強化を図ることとなった。

部隊	配備地区	摘要
南海第一守備隊ギルバート諸島	四月中	各守備隊は、歩兵一ヶ大隊、砲兵一ヶ中隊を基幹とす。
南海第二守備隊	南鳥島	然るに南海第一守備隊は海上輸送の途中海難により進出不能となり、更に南海第四守備隊を編制派遣のこととなったが、同隊はギルバート諸島進出の途中ソロモン方面の戦況悪化のため、大本営は同隊を第八方面軍（第17軍）の指揮下に入れボーゲンビル島方面に進出せしめた。
南海第三守備隊	ウェーキ島	爾後ギルバート諸島方面へは主として輸送等の関係上陸軍部隊の派遣は行われず専ら海軍兵力のみを以て防備に任ずることとなった。
南海第四守備隊ギルバート諸島	六月中旬発令	

第五項　防備施設の状況

ギルバート諸島・ナウル・オーシャン方面は、昭和17年秋頃迄は防備施設に関する限り、殆んど見るべきものがなかったが、昭和18年2月15日第三特別根拠地隊が同方面に進出して以来、地上防備施設、航空施設等の建設増強が急速度に実施された。即ち昭和18年11月敵が同方面に対し本格的な攻略を開始する迄に実施された防備施設の概要は次の通りである。

地区	航空基地施設	地上防備施設	備考
マキン	○水上基地 18・7・4水戦用滑走台（巾20米、長75米）完成（其の後本構築巾30米、長75米水戦及飛行艇兼用滑走台を整備す）	○防備兵力 海軍約七〇〇名（工員を含む） ○防禦兵器 八糎砲　三 八糎高角砲　三 一三粍機銃　一二	1 16・12・10占領翌日大艇応急基地設営、爾後大艇数機進出駐屯す 2 18・7以後水戦・水偵の基地として使用可能となる
アパママ	水陸航空基地の好適地であったが配備すべき防備兵力不足の為基地建設は行われなかった	○海軍見張所を設置 駐屯兵力約75名	一見張所兵力進駐時機不明 二 18・6同島の航空基地建設計画を樹て調査行う
アパイアン		○海軍見張所を設置 駐屯兵力約一五名	兵力進駐時機不明
ベシオ（タラワ）	○陸上基地 滑走路 巾60米長一四〇〇米 宿舎其他 11棟 通信施設 18・2・18完成 防空壕及飛行機掩体 18・4・11完成 其他 弾薬庫　二棟完 魚雷格納庫一棟	○防備兵力　ギルバート方面防衛中枢基地として、三特根司令部及所属陸戦兵力航空基地員設営隊工員合計約四七〇〇名（18・11・14現在）駐屯す ○防禦兵器 20糎砲　2　14糎砲　4 8糎砲　6　7糎高角　4 12・7糎高角砲　4 12粍機銃20　13粍機銃12 150糎探照灯　1	1 16・12・10占領掃蕩の後兵力を撤収す 2 17・9・17再占領 3 17・7・10頃陸上飛行場建設開始 4 18・1・28陸上試着陸 5 18・3・末航空兵力進註 6 18・7・末砲台及野戦築城（一部永久築城）完成

地区	航空基地施設	地上防備施設	備考
ナウル	○陸上基地 一17・12着工18・1末第一期工事終了（滑走路巾60米、長一二〇〇米） 18・3末第二期工事概成（滑走路巾80米長一三〇〇米に延長） 二第二期工事完了時飛行機置場五万平米、宿舎施設一五〇〇名分 三第二期工事完了後更に第三期工事を実施（滑走路巾800米新設）	○防備兵力 海軍　約一三六七名 ○防備兵器 14糎砲　4 8糎砲　4 12・7糎高角砲　4 25粍機銃　12 13粍機銃　10 150糎探照灯　1	一17・8・25占領 二17・11・末陸上飛行場建設開始 三18・1・26陸攻試着陸完了
オーシャン		○防備兵力　海軍約七六〇名 ○防禦兵器 14糎砲　4 8糎砲　4 8糎高角砲　5 15粍機銃　8 150糎探照灯　1	17・8・26占領
記事	防備部隊の重点はタラワに置かれた。即ち昭和18・11・19日敵が同島来攻直前には、同島の築城は予定の75%完成の状況であった。		

第四節　米軍のギルバート諸島来攻前の諸情勢

第一項　我軍作戦指導方針の大要

一、大本営の作戦指導方針

大本営は昭和18年3月25日附大東亜戦争第三段作戦帝国海軍作戦方針並に聯合艦隊司令長官の準拠すべき作戦方針を発布した。その要旨とする所は、航空戦において、必勝の大勢を確立し敵艦隊の奇襲漸減に努め、速かに作戦主動権を奪回せんとするものであって主作戦の指向方面は南太平洋方面であった。従って中部太平洋方面は爾余の作戦正面と共に極力兵力の節約を図り防衛を厳にする方針が採られた。

二、聯合艦隊の作戦指導方針

(イ)　聯合艦隊司令長官の更迭と当面の作戦指導方針

山本聯合艦隊司令長官は南東方面の作戦指導のため4月3日将旗をラボール陸上に移したが、4月18日ブイン附近上空で敵機の奇襲を受け戦死し、聯合艦隊の指揮は一時第二艦隊司令長官近藤中将が継承したが、古賀大将が新に聯合艦隊司令長官に補せられて4月25日トラックに到着した。

米軍は5月12日アッツ島に上陸を強行し、同島所在の我軍は敵と激闘を交えたが、之を撃退することが出来ず全員玉砕の止むなき状況となった。

古賀司令長官は中部及南部太平洋に対しても敵の此種新作戦が近く開始される公算あるものと認め、5月16日取敢えず之に対する邀撃作戦要領を発令した。

その要旨とする所はソロモン、ニューギニア方面に敵が来攻する場合には前進部隊指揮官は、所要の兵力を南東方面艦隊に増勢し又先遣部隊指揮官は、南東方面艦隊の作戦に協力することが定められた。敵がマーシャル群島、ギルバート諸島、ナウル、オーシャン諸島方面に来攻する場合には、前進部隊指揮官は、内南洋所在部隊（先遣部隊を含む）を統一指揮し、南東方面部隊指揮官は、所要の兵力を前進部隊に増勢することに定められた。

(ロ)　聯合艦隊の第三段作戦指導方針

古賀聯合艦隊司令長官は昭和18年8月15日以降の作戦を第三段作戦と定め同日附大本営よりの指示に基きさきに発布された第三段作戦実施に必要な諸命令を発布した。

これら諸命令には大要左の事項が包含されていた。

(一)　当分の間主作戦方面を南東方面とし海軍は航空作戦を主とし陸軍と協力し戦略要域を確保し、我戦力の充実を俟って攻勢に転じ東部ニューギニア及びソロモン方面の要地を逐次奪回する。

(二)　爾途の地域では、速かに戦力を充実し、敵来攻に際し、陸軍と協力、敵を反撃し戦略要域を確保する。

(三)　聯合艦隊水上部隊の大部は南洋地域に集中し、南東方面及内南洋方面の作戦を支援すると共に敵艦隊の来攻に備え敵来攻の場合は全力を以て之に反撃撃滅する。

(四)　内南洋方面では各島嶼基地の防禦を厳にし敵の来攻に際しては我が増援軍来着迄各独立して持久し得る如く努める。

(五)　敵艦隊又は攻略部隊が太平洋正

面に来攻する場合の作戦をZ作戦と呼称し、印度洋方面に大挙来攻する場合の作戦をY作戦と呼称する。

(六) 大東亜圏を囲む戦略要地に邀撃帯を設け、之が防備を完璧にし敵の進攻を阻止撃砕する。

以上諸命令は第三段作戦の作戦指導の大要を示したものであるが、特にギルバート諸島方面に敵が来攻した場合の作戦指導に関しては5月16日発令の作戦命令を一層具体的に示す目的を以て9月初旬頃麾下各部隊に聯合艦隊作戦指導の腹案が明示せられた。その要旨は次の如きものであった。

(一) ラボール方面所在大型潜水艦（為し得れば小型潜水艦も）をギルバート諸島附近に進出作戦せしめる。

(二) 前進部隊はナウル西方乃至北方海面に進出敵艦隊を誘致し、ラボールより南東部隊所属の陸攻36機がこの敵を攻撃した後ミレ方面に進出引続き作戦を実施する。

(三) 要すれば南東部隊所属水雷戦隊も進出前進部隊の作戦に協力する。

(四) 機動部隊飛行機隊も本作戦に参加する。

以上諸部隊は前進部隊指揮官の統一指揮下に作戦し同作戦部隊を東方部隊と呼称する。

第二項　第三段作戦初期の戦況とギルバート諸島方面作戦との関聯

一、昭和18年中期以降中部太平洋方面の戦局推移の状況

昭和18年2月初旬我が軍がガダルカナル撤退以来ニューギニア方面、ソロモン方面共に敵の攻勢威力は、益々増大するに反し、我方は海上補給の不円滑と航空兵力劣勢のため、敵の進攻に対しては各所に於て、歩々後退の已むなき状況となるか又は随所に孤立部隊を生じ作戦場裡より脱落するかの極めて憂慮すべき状態に陥りつつあった。即ちソロモン方面では6月末敵はレンドバア島に上陸以来ニュージョジヤ群島方面に於て彼我激烈な戦闘を交えつつあったが、我軍は後方輸送補給の不円滑の為敵に圧倒せられ10月には同方面より撤収作戦を行う結果となった

又ニューギニア方面では、敵は6月末ナツソウ湾に上陸、サラモア方面の我軍を攻撃すると共に、9月下旬更にフィンシュハーフェン北方のアント岬に上陸を行い、同方面所在の我軍を無力化して、我が軍が飽く迄確保を期したビチアズ海峡の管制を無力化するに至った。

此の間米軍は8月に入るや我がギルバート諸島南東方に連接するエリス諸島の占領を行い、次いで9月にはベーカー島を占領し、之等占領地域に航空基地を急速整備し、概ね10月迄にヌーメア、クナフチ、ホーランド、ベーカー等の諸基地に陸上航空兵力を配備して、10月に入るや、マキン、タラワ、ナウル、オーシャン等の我が航空基地に対し空襲を開始するに至った。

又米機動部隊は9月1日南鳥島に来襲、更に19日にはギルバート諸島及びナウル島方面に来攻し、中部太平洋方面に於ても敵の積極的意図があることは略判断されるに至った。

聯合艦隊は予ねての作戦計画に基いて、中部太平洋方面に来攻する敵艦隊に対し時機之を捕捉撃滅する様努力した。即ち聯合艦隊は9月中旬敵機動部隊がギルバート、マーシャル方面に来襲する公算が多いと判断して我が機動部隊をマーシャル諸島方面に進出待機せしめると共に9月18日邀撃警戒部署を発令第22航空戦隊所属航空兵力の移動集中を行った。

翌19日敵機動部隊は基地大型機と協同マキン、アパママ、タラワ、ナウル各基地を空襲したが、彼我海上兵力は交戦するに至らずして敵機動部隊は退去した。

次いで10月6日敵機動部隊は、再びウェーキ島に来攻し、空襲並びに艦砲射撃を実施した。

聯合艦隊司令長官は、翌7日朝丙作戦第一法警戒（×日を11日とす）を発令すると共に左の邀撃配備を下令した。

(イ) 南東方面部隊の陸攻一隊（18機）を内南洋部隊の指揮下に入れると共に北東方面部隊移動可能の陸攻全部を南鳥島に進出せしめる。

(ロ) 南東方面部隊の指揮下に編入中の内南洋部隊所属第7戦隊及第10、第17両駆逐隊を原隊に復帰せしめる。

(ハ) 先遣部隊所属潜水艦5隻を所定の邀撃配備に就かしめる。

(二) 第14戦隊（五十鈴、那珂）、栗田丸、朝凪及在ポナペ甲支隊（約二、三〇〇名）を以て海上機動兵団を編成し、逆上陸を企図する。

斯くてウェーキ所在部隊は敵上陸に対する邀撃準備を実施待機したが、敵機動部隊は避退したので10月8日午後聯合艦隊司令長官はウェーキ方面邀撃作戦を解除した。

無線諜報は10月中旬頃より再び敵機動部隊が、ウェーキ方面に来襲の気配が濃厚となって来たので14日内南洋部隊指揮官は第一警戒配備を発令したが、聯合艦隊司令長官も16日午後丙作戦第五法（ウェーキ及マーシャル方面邀撃作戦配備）警戒を発令した。

翌17日聯合艦隊司令長官はトラック所在部隊を率いトラック発、機動部隊はウェーキ方面まで進出、敵機動部隊捕捉撃滅に努めたが、敵情を得ず、聯合艦隊は10月24日トラックに帰投し、26日ウェーキ方面の邀撃作戦警戒配備を解除した。

斯くて中部太平洋の状況一段落となるや、聯合艦隊司令部の関心は、再び

戦況が切逼しつつある南東方面に転じ10月28日には機動部隊、飛行機隊をラボール方面に転進せしむる様発令した。

これがため機動部隊は、其の航空兵力を除かれ、我海上兵力の機動能力は一時的に喪失し、中部太平洋方面防備に一大欠陥を招来する事態となりつつあった。

二、南東方面作戦の遂行がギルバート諸島方面作戦に及ぼした影響

敵は昭和17年8月初旬ソロモン諸島方面に来攻を開始して以来ソロモン、ニューギニア両方面共優勢な兵力を投入して我が軍を圧迫すると共に、昭和18年中期に至って更に中部太平洋方面に新に作戦を開始する気配が濃厚となった。之に対し我が軍の現有勢力並に後方補給力の実状を以てしては、中部太平洋方面に対しても充分な兵力を展開することは不可能であって聯合艦隊海上兵力を以てその欠陥を補強する態勢を保持するに過ぎなかったが、前述の如く、中部太平洋方面が、一時小康状態に復するや、再び機動部隊の搭載飛行機をも挙げて南東方面に投入して、先ず同方面の戦局転換を図るの已むなき状態となった。

斯くして開戦より昭和18年12月末迄にソロモン群島及び東部ニューギニア方面に於て、我軍の消耗した艦艇は68隻、二十一万一千噸、船舶は115隻、三十七万四千八百噸に達し、又海軍所属飛行機の消耗は一五三〇機に及んだ。

就中此の消耗に依って、爾後我が聯合艦隊の機動力に最も重大な影響を与えたものは、母艦搭載機を、陸上基地に移動して作戦し、南太平洋海戦以来、鋭意再建に努力した母艦航空機の殆んど大部、特に練達有能な母艦搭乗員の多数を喪失したことであって、これがため其の後長期に亘って聯合艦隊の機動力を封止する重大な結果となった。

即ち南東方面に於て、母艦飛行機隊を、陸上基地で使用した状況は左表の通りである。

回次	指揮官	令日 発年月	令部 発司令	発日 出期	着点 到地	進出飛行機	出員 進人	退日 撤期	記事
1	大尉 新郷英城（翔鶴戦闘機隊長）	17. 8.下	3F	17. 8.28	ブカ	fc×15 fo×2	23	17. 9. 4	
2	少佐 三重野武（飛竜飛行長）	17.10.21	GF	17.10.23	ラボール	fe×16 fb×17	75	17.12.14	一17・1・11・4以後ラボール着後カ（イン進出）より任務を解かれ12・14人員のみ帰還
3	少佐 橋口喬（隼鷹飛行長）	18. 1.10	8F	18. 1.17	ウェワク	fc×23 fo×6	120	18. 1.24	
4	大佐 野元為輝（瑞鶴艦長）	18. 1.下	3F	18. 1.29	ラボール	fc×26 fb×17 fo×21	350	18. 2.11	(一)ビエンチアン移動(二)18田中少佐（指揮官）正臣2・11fc隊ブイン進出18・1・2fc隊カビエン16経由トラックよりラボール着後カビエンよりトラック転進
5	少佐 松田秀雄（瑞鳳飛行長）	18. 2.中	3F	18. 2.18（カビエン）	19. 2.19 ウェワク	fc×20 fo×8	45	18. 3.13	(一)18・2・28ウェワクよりカビエン転進(二)18・3・1foラバウルよりトラック転進(三)18・3・13fc隊カビエン転進

回次	指揮官	令日 発年月	令部 発司令	発日 出期	着点 到地	進出飛行機	出員 進人	退日 撤期	記事
6	中将 小沢治三郎（三艦隊長官）	18. 4.初	GF	18. 4. 2	ラボール	瑞鶴 fc×27 fb×18 fo×18 瑞鳳 fc×18 fb×18 隼鷹 fc×27 fb×18 飛鷹 fc×26 fb×18 fo×9	582	18. 4.17	fo隊はカビエン進出
7	少将 酒巻宗孝（二航戦司令官）	18. 7.初	3F	18. 7. 2	ラボール	隼鷹 fc×24 fb×18 fo×9 飛鷹 fc×24 fb×24 fo×12 竜鳳 fc×21 fb×13	約1,100	18. 9. 1	18・7・20ラボールよりブイン進出
8	中将 小沢治三郎（三艦隊長官）	18.10.末	FG	18.11. 1	ラボール	瑞鶴 fc×33 fb×22 fo×16 fr×3 翔鶴 fc×36 fb×23 fo×16 fr×3 瑞鳳 fc×18 fb×8	728	18.11.13	

回次	指揮官	発令日	発令部	出発日	到着点	進出飛行機	出員	退撤日	記事
9	少佐 遠藤 三郎（龍鳳飛行長）	18.12.23	GF	18.12.27	カビエン	龍鳳 fc×24 fo×12 隼鷹 fc×24	70	19. 1. 9	
10	少将 城島 高次（二航戦司令官）	19. 1.下	GF	19. 1.24	ラバウル	龍鳳 fc×24 fb×12 fo×12 飛鷹 fc×24 fb×24 fo×12 隼鷹 fc×24 fb×24 fo×12	1,280	19. 2.27	

米軍のギルバート諸島来攻直前即ち昭和18年11月上旬南太平洋方面の作戦に於て母艦航空部隊の受けた損害は左の通りであって、戦斗機を除く爾余の部隊は殆ど全部消耗するに至った。

機種	進出機数	消耗機数	消耗率	進出組数	消耗組数	消耗率
戦斗機fc	八七	四三	五〇%	八〇	二四	三〇%
爆撃機fb	四五	三八	八五%	四七	三五	七五%
攻撃機fo	四〇	三四	九〇%	五九	二四	四〇%
偵察機fr	六	六	一〇〇%	六	三	五〇%
計	一七八	一二一	六八%	一九二	八六	四五%

又前進部隊も、南東方面において、我が航空部隊の挙げた戦果に策応して敵艦隊に打撃を与える目的を以て11月3日トラック発、5日ラバウルに進出したが、其の進出直後敵機動部隊の攻撃を受け愛宕、高雄、摩耶、筑摩、最上、阿賀野、能代及び藤波は夫々直撃弾又は至近弾に依り、相当の損害を被り、即時ラバウルを出港、トラックに帰投したが、これらの損害の為海上部隊自体も当分戦斗行動不可能の状態に陥った。

斯くの如く南東方面に対する我全力を挙げての努力にも拘らず敵のブーゲンビル島侵攻を阻止し得ず、敵が新たにギルバート方面に作戦を開始するに至っても我機動部隊を含む大規模な海上部隊の作戦は殆んど実施不可能な状態となり、又南東方面部隊も差迫った自軍の作戦実施のため、中部太平洋方面へ予ねての計画に基いて増援部隊を派遣することは困難な状況であった。

第五節　米攻略軍のギルバート諸島来攻に伴う作戦状況

第一項　敵来攻直前の状況

一、南東方面の状況

南東方面に於ては昭和18年11月1日未明、敵は新にブーゲンビル島タロキナ岬附近に上陸を開始し、これを契機として附近海面に出現した敵機動部隊及び輸送船隊等に対し、爾後数回に亘って、我が空中攻撃が反覆された。聯合艦隊司令長官は先づ当面の作戦指導の方針をタロキナ岬上陸部隊の撃滅とこれを支援する敵海上兵力の撃破に置きトラック方面より、第3艦隊飛行機隊をラバウル方面に進出せしめる一方邀撃部隊の巡洋艦戦隊をも同方面に増勢し目的の貫徹に努めたが、其の目的を達成することが出来ず、却って我が戦力は大なる消耗を被るに至った。これが為其後引続いて敵がギルバート諸島方面に来攻するに及んでも、予ての聯合艦隊作戦計画に基く、南東方面部隊よりの兵力増援はもとより機動部隊、邀撃部隊等の水上兵力の支援も困難となる事態となった。

二、内南洋方面の状況

内南洋部隊指揮官は、予て聯合艦隊第三段作戦計画に基きギルバート、マーシャル、ナウル、オーシャン方面防衛に関する諸命令を発布し、其防衛対策を強化しつつあった。

就中航空作戦に関しては敵機動部隊が、9月19日ギルバート諸島へ来襲した際我基地航空部隊の活動が円滑を欠き、予期した戦果を収め得なかった経験に鑑み、新に航空戦策を策定しこれに基く訓練を励行し概ね自信を持って敵の来襲を迎え得る態勢にあった。右航空戦策の要点は次の如きものであった。

(イ) 作戦海面の哨戒は専ら麾下第22航空戦隊兵力を以て之を担当し、敵来攻部隊の攻撃は南東部隊派遣陸攻隊36機と第22航空戦隊の陸攻及び戦斗機を以て実施する。

(ロ) 敵の来攻迄は第22航空戦隊の兵力は可及的分散配置に置き、且前線航空基地の配備兵力は所要の哨戒兵力を限度とする。

(ハ) 敵の来攻判明後航空兵力の移動集中を行い攻撃威力の最大発揮を図る

(ニ) 敵の来攻までは飛行哨戒を厳にし爾余の兵力は極力訓練を実施し練度の向上に努める。

右戦策に基き戦斗訓練実施の傍11月11日及び13日ナヌメア、フナフチ攻撃を実施したところ敵は直ちに反撃に出て爾後タラワ、ナウル、ミレ等の我航空基地は連続敵陸上大型機の攻撃を受けるに至った。これに依ってエリス諸島に於ける敵航空基地の整備状況と敵のギルバート諸島及びマーシャル諸島

方面に対する積極的意図を略推定することが出来た。此間ニミッツ米太平洋艦隊司令長官は米軍が近くギルバート、マーシャル方面の攻略を開始する旨を放送し我軍も之に対し充分警戒を厳にし待機の姿勢に在ったが、11月19日早朝敵機動部隊飛行機の来襲を以てギルバート諸島方面の攻略が開始されるに至った。

第二項　我軍兵力配備の状況

一、海軍兵力配備状況

米軍ギルバート諸島来攻直前即ち18年11月初旬に於ける東経150度以東の中部太平洋方面に配備された我海軍の兵力は左の通であった。

艦隊名（司令部所在地）	戦隊名（司令部所在地）	所轄名（本部所在地）
聯合艦隊	第一戦隊（トラック）	大和・武蔵（以上各トラック）
第一艦隊（トラック）	第二戦隊（〃）	長門・扶桑（以上各トラック）（伊勢・山城は内地）
第二艦隊（トラック）	第四戦隊（〃）	愛宕・高雄・摩耶・鳥海（以上各トラック）
	第二水雷戦隊（〃）	能代・第24・27・31・32駆・島風（以上各トラック）
第三艦隊（ラバウル）	第一航空戦隊（ラバウル）	瑞鶴・翔鶴・瑞鷹（以上各トラック）
	第二航空戦隊（〃）	隼鷹（トラック北方海面）（飛鷹・龍鳳は他地域）
	第三戦隊（トラック）	金剛・比叡（以上各トラック）
	第七戦隊（〃）	鈴谷・最上（以上トラック）（熊野は内地）
	第八戦隊（〃）	利根（トラック北方海面）筑摩（トラック）
第四艦隊（トラック）	第十四戦隊（トラック）	鹿島（クェゼリン）長良（トラック）五十鈴（トラック）（那珂は他地域）
	第三特別根拠地隊（タラワ）	生田丸（タラワ）佐七特（タラワ）六七警（ナウル）横二特（ナウル）
	第四根拠地隊（トラック）	四一警（トラック）四二警（ポナペ）四三警（パラオ）九〇二空（トラック）
	第五特別根拠地隊（サイパン）	五四警（サイパン）
第六根拠地隊		六一警（クェゼリン）六二警（ヤルート）六三警（マロエラップ）六四警（ウオッゼ）六五警（ウェーキ）六六警（ミレ）九五三空（エビゼ）
第二海上護衛隊（トラック）		駆三、海防艦八（以上各護衛任務に従事中

二、陸軍兵力配備状況

昭和18年11月初旬に於ける中部太平洋方面陸軍兵力の状況は左の通りであった。

配備地点	部隊	兵力	配備時機	記事
一、主力クェゼリン 二、一部ウオッゼ、マロエラップ、ヤルート	南洋第一支隊	歩兵二ケ大隊 戦車一ケ中隊	18・9	
クサイ	南洋第二支隊	歩兵三ケ大隊 戦車一ケ中隊 工兵一ケ中隊	18・11	
ポナペ	海上機動旅団	歩兵三ケ大隊 戦車一ケ中隊 高射一ケ大隊 工兵一ケ中隊	18・9	右部隊の隷属部隊は東部軍であって第四艦隊司令長官の指揮を受く
	第二十二航空戦隊（ルオット）	七五五空（マロエラップ）八〇二空（ヤルート）二五二空（ルオット）五五二空（ミレ）		
	第六艦隊（トラック）	香取（トラック）所属潜水艦一八隻中約九隻はトラック他は各方面に出動中		
	第一潜水戦隊（トラック）	(一)第二艦隊所属第五戦隊（妙高・羽黒）はラバウル方面に出動中 (二)第三艦隊司令部及第二・第三航空戦隊司令部及所属飛行機隊はラバウル方面に出動中		

聯合艦隊司令長官は、取敢ず北東方面部隊所属航空兵力中転進可能兵力及び南西方面部隊所属の陸攻隊を急遽トラック方面に転進を命ずると共に潜水部隊を所定邀撃配備に就かしめ、同日夜、麾下全軍に対し丙作戦第三法用意を下令した。

翌20日には敵艦上機は、タラワ、マキンに対し、反覆空襲を実施すると共にミレ、ヤルートに対しても空襲を実施したが此敵に対し我航空部隊の攻撃効果は未だ見るべきものがなかった。

21日未明敵攻略部隊は、タラワ附近に出現、猛烈な艦砲射撃についで午前3時頃、タラワ環礁ベチオ島に上陸を開始した。又マキン島に対しても略々同時に上陸を開始し、午前4時30分以後マキンとの通信連絡は杜絶した。聯合艦隊司令長官は午前4時丙作戦第三法発動を下令すると共に、聯合艦隊の今後採らんとする作戦方針を麾下一般に伝達した。其の要旨は概ね次の如きものであった。

(一)　先づトラックに進出した北東方面部隊所属陸攻隊を以て敵情を明かにすると共にマーシャル諸島方面所在航空兵力及潜水艦部隊を以て敵艦隊

第三項　我作戦指導の概要

11月19日以降敵機動部隊がタラワ、ナウルの空襲を開始するや内南洋部隊指揮官は、航空部隊に対し、敵機動部隊の捕捉攻撃を命ずると共に同日午後麾下部隊宛丙作戦第三法警戒を下令し、各隊の出動準備を開始した。

を攻撃し敵勢力の減殺を図る。

㈡ 機動部隊所属飛行機隊をマーシャル方面に進出せしめ右攻撃に策応せしめる。

㈢ 主隊及び邀撃部隊は23日トラック発好機敵艦隊と決戦を行う。

㈣ 一部兵力を以て在ポナペ陸軍甲支隊をマーシャル諸島方面に輸送し好機ギルバート諸島方面敵上陸地点に逆上陸を決行敵上陸部隊を撃滅する。

右聯合艦隊の作戦方針に基いて、各部隊は夫々行動を準備し、五十鈴、長良、那珂及び駆逐艦2隻は在ポナペ陸軍甲支隊の一部の約一五〇〇名を25日クェゼリンに輸送し逆上陸に待機した。

然し乍らタラワ、マキン両島の我守備部隊は、敵の上陸以来勇戦奮闘し特にタラワにおいては一時敵を上陸地点に圧迫大いに戦果を収めたが衆寡敵せず22日午後1時30分以後タラワとの無線連絡は杜絶するに至った。又我航空部隊及潜水部隊の敵艦隊攻撃も予期の成果を挙げ得なかった。敵側の諸情報等を綜合するにマキン守備隊は23日、タラワ守備隊は25日夫々玉砕したものと認めらるるに到った。斯くして遂に聯合艦隊決戦の好機が到来せず26日聯合艦隊司令長官は在ポナペ陸軍部隊一ケ大隊を、クサイ島に進出せしめ同島の警備に充て、クェゼリンに進出した陸軍甲支隊の待機を解除し、同隊今後の使用を内南洋部隊指揮官の所信に一任した。斯くして戦機に投じ、空海陸相呼応してギルバート諸島方面来攻の敵を撃滅せんとした当初の計画は、挫折するに至った。

爾後に於ける聯合艦隊の作戦はトラック方面に転進した北東方面部隊及び南西方面部隊所属飛行機隊をマーシャル諸島方面に集中し、概ね航空兵力を以て敵艦隊の捕捉撃破を図るに至った

第四項　陸上戦斗の状況

一、タラワに於ける戦斗

昭和18年春以来ギルバート諸島防備強化の為逐次兵力資材の輸送補給が実施されたが、敵潜水艦の跳梁、我が船腹の不足等の為予想された陸軍部隊のギルバート諸島への輸送は中止となり、又防備、築城用の資材、兵器等も予定輸送量に達せず、糧食の補給さえも充分な状況ではなかった。斯くの如き状況の下に、昭和18年7月柴崎恵次海軍少将が第三特別根拠地隊司令官としてタラワに着任し、ギルバート諸島方面の指揮を執ることとなった。

柴崎司令官は着任するや直ちに軍紀の振粛と訓練の励行に着手した。即ちタラワにおいては払暁訓練、白昼訓練、夜間訓練を連日連夜反覆した。斯くて司令官の着任から敵の来攻迄の四ケ月の訓練で守備部隊は著しく精強の度を加え、自信に満ち満ちていた。

敵の同島来攻時の我が守備部隊兵力は次の通りであった。（戦史叢書）

第三特別根拠地隊の大部　九〇二名
佐世保第七特別陸戦隊　一六六九名
第七五五海軍航空隊派遣基地員　約三〇名
第一一一海軍設営隊の大部　約二〇〇〇名
合　計　四六〇一名

我が航空部隊は昭和18年11月11日及び13日エリス諸島所在敵航空基地フナフチ、ナヌメアの空襲を行うや敵は直ちに反撃に出でタラワは14日以降18日迄連日敵基地大型機の空襲を受けた。之に次いで翌19日には早朝から四次に亘って敵機動部隊の戦爆連合機延約910機が猛烈な銃爆撃を行った。更に20日には母艦搭載機延170機、基地大型機30機の空襲の外に戦艦、巡洋艦、駆逐艦を含む艦艇数隻によって猛烈な艦砲射撃が反覆せられた。以上の攻撃によってベチオ島の飛行場滑走路は使用不能となり人員の死傷、防備施設、兵器弾薬等の破壊炎上、糧食の損失等守備部隊の戦斗力に重大な損害を受けたが守備部隊の士気は益々旺盛となった。

（註）米側の公式報告に依れば敵の上陸前の砲爆撃に依って陸上重砲火を沈黙させ殆ど総ての陸上建設物を破壊し且つ所在兵力の約半数を倒したがなお塹壕特火点対爆撃掩体の一部は破壊されずに残存し之に依って日本軍は頑強な抵抗を行い、米軍の死傷は甚大であったと述べている。

11月21日午前0時10分タラワの320度約一八〇〇〇米に戦艦1隻、巡洋艦3隻及駆逐艦6隻に護衛された10数隻の敵輸送船団が出現した。

午前2時以降敵艦艇は艦砲射撃を開始し我が砲台は之に応戦した。

午前2時27分敵輸送船団はベチオ島西方海岸に近接2時59分最初の上陸を実施した。

此の時に於ける我が陸上防備兵力の配備は概ね附図（環礁14号3頁参照）の通りであった。

第一回の上陸はベチオ島北岸大桟橋の両側附近及び島の北西端附近に対し水陸両用戦車、上陸用舟艇合計約200隻を以て行われ、その⅔は撃破したが、其の他は上陸するに至った。我が守備部隊は此の敵を南東西の三方面より包囲桟橋附近に圧迫対峙激戦を展開した。敵は上陸部隊の窮状打開のため午後1時10分より艦上機を以て、午前4時25分からは艦砲を以て砲爆撃を反覆し、午前6時30分より掩護砲撃下に更に水陸両用戦車約一〇〇、舟艇約二〇〇を以て北岸一帯に接岸上陸を実施し、守備部隊と対峙激戦を展開した。

正午頃敵艦砲が司令部防空壕に命中し、柴崎司令官以下幕僚の殆ど全員が戦死するに至った。

斯の如く我が統帥中枢が破壊せられ指揮連絡不如意の状況下に於ても我が軍の士気は毫も衰えず、予ねて定められた部署に従って各隊は所定の攻撃行動を遂行して終日敵を圧迫し午後10時

以後は夜襲を決行し、敵に出血を強要した。

翌22日未明敵は更に予備兵力を上陸せしめ又襲に北西端に上陸した部隊が西岸一帯を占領するに至った。なお環礁内に駆逐艦4隻、輸送船5隻、礁外に戦艦1隻、巡洋艦1隻が出現し、敵は小舟艇を以て資材、人員を揚陸した。午後1時30分以降タラワとの無線連絡は杜絶したが、同日以降敵の戦車に依って、我陣地は逐次蹂躙せられ翌日23日中には島の東部の一部を除き敵に蹂躙せられ24日には遂に全島が敵の占領下に帰するに至った。

タラワ環礁内の東島及北島には見張員各約15名宛が配備されて居ったが21日敵の上陸に依り全員戦死した。尚タラワ全環礁所在の我が兵力四千六百名中殆ど全部戦死又は自決し敵の捕虜となったものは146名であったが其の大部分は設営隊所属の半島出身工員であった。

（註）タラワ上陸米部隊はジュリアン、スミス海軍少将指揮の第二海兵師団であって、その被害は戦死九九三名、戦傷二、二九六名であった。

二、マキン及びアパママに於ける戦闘

11月20日早朝からマキンには数次に亘って敵艦上機延約260機以上アパママも又多数の艦上機の銃爆撃を受け地上施設及び人員に相当の損害を受けた。

翌21日は払暁からマキンは猛烈な艦砲射撃を受けた後駆逐艦一隻、輸送船三隻は環礁内に侵入午前3時北岸桟橋附近に上陸を開始した。当時所在の我が守備部隊兵力は概ね次の通りであった。（戦史叢書）

第三特別根拠地隊マキン派遣隊　約二四三名
第九五二海軍航空隊派遣基地員　約六〇名
第八〇二海軍航空隊派遣基地員　約五〇名
第一一一海軍設営隊の一部　約三四〇名
合計　約六九三名

我が守備部隊は優勢な敵上陸軍に対して頑強な抵抗を試みたが午前4時30分以後外部との無線連絡が杜絶するに至り翌22日本島全部は敵の占領する所となった。

又離島には若干名の見張員が配置されて居ったが、之等も26日迄には敵の攻撃を受け全員戦死するに至った。本戦斗に於て日本軍の守備兵力約700名中捕虜となったものは104名であって其の他のものは壮烈な戦死又は自刃を遂げたのであった。

捕虜の大部分は設営隊所属の半島出身工員であった。

アパママには我見張所があり所在兵力は約30名であって、防備施設は殆ど皆無であったが、敵は21日夜潜水艦より78名の兵力を揚陸、之を占領した。

（註）マキン上陸兵力は米陸軍第27師団の六五〇〇名であって、その死傷者数は186名であった。

第五項　航空部隊の戦斗状況

一、敵のギルバート諸島来攻直前の航空兵力配備

内南洋部隊航空戦戦策に基いて陸攻を主体とする攻撃兵力をルオット、ブラウン方面に集中、爾余の偵察、哨戒兵力を各前哨基地に分散配備して警戒を厳にし乍ら専ら戦斗諸訓練を実施しつつあった。

即ち敵のギルバート諸島来攻直前の昭和18年11月19日の航空兵力の配備は概ね次の通りであった。

所属	航空隊名	定数	実動機数	配備基地	主任務
四艦隊					
二十二航戦	七五五空	陸攻60	陸攻15	ブラウン	哨戒
			〃 9	ルオット	攻撃
			〃 8	マロエラップ（タロア）	
			〃 8	ナウル	哨戒
	三五二空	戦60	戦16	ルオット	哨戒
			〃 18	マロエラップ（タロア）	攻撃
			〃 12	ナウル	哨戒
	八〇二空	艇水戦16	艇5	ヤルート	哨戒
	五五二空	爆36	爆3	ミレ	整備
六根	九五二空	〃11	〃11	ヤルート	
四根	九〇二空	水偵40	水偵40	トラック	

㈠五五二空の定数中には補用機を含む

㈡五五二空はラバウルに進出を命ぜられ11月14日ミレ発整備のため軽爆三機のみ残留

㈢八〇二空の飛行艇及水戦の大部は他方面に転用中

機種別合計数

機種名	定数	実動機数
戦斗機	六〇	四六
水戦	一二	
陸攻	六〇	四〇
軽爆	三六	三
飛行艇	一六	五
水偵	五一	五一
総合計	二三五	一四五

二、航空戦実施の概要

11月19日早朝敵機動部隊飛行機が、ナウル、タラワに来襲したので第22航空戦隊司令官は直ちにこの敵の捜索を開始すると共に、ブラウン陸攻隊に対しルオットに集結を下令した。索敵機はタラワ南方海面に敵機動部隊2群が行動中であることを発見之に対し攻撃を企図したが、陸攻隊のルオット集中が遅れ、攻撃時機が夜暗となった為敵の発見困難となり陸攻3機のみが攻撃を実施したが、大なる戦果を挙げ得なかった。

翌20日は早朝より索敵を実施し午前6時30分迄にタラワの南方及南西方各100浬に敵機動部隊二群を発見、午前11時頃陸攻19機を発進、攻撃を実施したが、攻撃隊の大半は未帰還となり、戦果は不明であった。

聯合艦隊司令長官は機動部隊飛行機隊に対し、22日マーシャル諸島に進出

を命ずると共に敵機動部隊に対しては、同日以後22航戦飛行機隊と相協同して攻撃することとし、それ迄は22航戦飛行機隊は専ら敵輸送船を攻撃する様指令した。21日敵はタラワ、マキンに上陸を開始した。航空部隊指揮官は陸攻16機を以て、タラワ附近敵輸送船の攻撃を実施したが攻撃隊の集合並びに索敵隊と攻撃隊との連繋円滑を欠き、各隊分離のまま進出し、何れもタラワに到着以前に敵機動部隊を発見、之を攻撃し敵輸送船攻撃の目的は達成出来なかった。本攻撃に於ても陸攻9機未帰還となった。

以上3日間の攻撃に依って第22航空戦隊の陸攻隊の主力を消耗するに至り、再び大規模な攻撃実施は不可能となった。

斯くして22日、23日、24日は小数機でタラワ、マキンの敵上陸部隊に対して夜間攻撃を実施するに止った。

25日には北東方面部隊より陸攻24機、第三艦隊戦闘機隊32機がルオットに進出し、マーシャル方面の航空兵力が補強され、同日再び敵機動部隊の攻撃を企図したが、敵を発見することが出来なかった。

翌26日攻撃を再興し、26日には陸攻17機を、27日には陸攻20機を以て夫々敵機動部隊を攻撃し相当の戦果を挙げたものと認められた。

28日には陸攻10機を以てマキン碇泊艦を攻撃、29日には陸攻16機を以て敵機動部隊を攻撃し、何れも相当の戦果を挙げたものと認められた。

12月5日には更に南西方面部隊より陸攻16機、北東方面部隊より天山12機、戦斗機37機が、マーシャル方面に進出し、陸攻16機、艦攻6機計22機を以て敵機動部隊を攻撃、相当の戦果を挙げ得たものと認められた。

然し乍ら航空兵力の集中が戦機に遅れ、ギルバート作戦に寄与することが出来なかった。爾後航空部隊作戦は敵機動部隊の撤退に伴い大規模の攻撃は行わず、連日タラワ、マキンに対し小規模の夜間爆撃を実施するに止まった。

敵のギルバート諸島来攻以後同年12月末までのギルバート作戦で使用した我が航空兵力は延機数764機（内陸攻373機）であって我が飛行機の損害は85機（内陸攻55機）であった。

第六項　艦船部隊の戦斗状況

一、水上部隊の行動

11月初旬邀撃部隊がラバウルに進出した際敵機動部隊の空襲を受けて、直ちにトラックに避退したがその結果愛宕、高雄、摩耶、妙高、羽黒、最上、利根は修理の為内地に帰還し又鈴谷、阿賀野、大淀はトラックで修理を行うこととなった。随って邀撃部隊として行動し得るものは巡洋艦に於ては鳥海、能代、熊野、筑摩の四艦と駆逐艦約十隻に過ぎない状況となった。

21日敵がギルバート諸島方面に上陸を開始するや、聯合艦隊司令長官は、ポナペ所在陸軍甲支隊をギルバート諸島方面に増援するに決し、内南洋部隊所属の那珂、五十鈴、長良及び駆逐艦2隻を以て、陸軍甲支隊を取り敢えずクェゼリンに輸送し、邀撃部隊は之を護衛する様命令した。輸送部隊は第14戦隊司令官指揮の下に21日トラックを出発、22日ポナペに到着、翌23日ポナペ発、25日クェゼリンに到着した。

鳥海、熊野、能代、筑摩及び駆逐艦約6隻を以て編成された邀撃部隊は第二艦隊司令長官指揮の下に24日トラック発（筑摩及び駆逐艦1隻は22日ブラウン発、クェゼリンに先行、邀撃部隊に合同す）陸軍輸送部隊の護衛を行い26日クェゼリンに到着した。

当時ギルバート諸島の戦況は既に絶望的となり、陸兵の増援は不可能となったので、輸送部隊は11月30日クェゼリン発ミレに甲支隊を輸送の上12月2日クェゼリンに到着したが、12月5日敵機動部隊の空襲を受け、五十鈴、長良は相当の被害を受け、12月9日クェゼリン発、12日トラックに帰投した。

邀撃部隊は11月27日クェゼリン発、ブラウンより航空部隊基地員、基地物件等を搭載し再び11月30日クェゼリンに帰投、12月3日迄マーシャル諸島方面の警戒に任じ、同日クェゼリンを出発、5日トラックに帰投した。

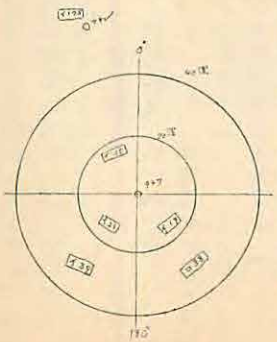
此間我が水上部隊は、終始圧倒的に優勢な敵艦隊の圧迫を受け自ら求めて、敵と戦斗を実施するの好機会を発見することが出来なかった。

二、潜水部隊の戦斗

昭和18年10月中旬米機動部隊がウェーキ島又はマーシャル諸島方面に新作戦を実施する気配が予想されたので、聯合艦隊司令長官は丙作戦第五法警戒を発令し、之に基き先遣部隊指揮官は伊19、伊35、伊169、伊175、呂37の各潜水艦を以て、甲潜水部隊を編成し、ウェーキ方面に進出せしめたが、敵機動部隊の来襲が無かったので呂37潜を除く甲潜水部隊をハワイ方面の監視に従事せしめた。11月13日に至って聯合艦隊司令長官は潜水艦の使用方針を変更し、甲潜水部隊の編制を解き、伊19潜をハワイ監視に充て、伊35潜にはカントン、フナフチを経てエスピリットサントの監視を命じ、イ169、イ175潜に対してはトラックに帰還を命じた。

11月19日敵機動部隊がギルバート諸島に来襲するに及んで先遣部隊指揮官は作戦可能の全潜水艦を同方面に集中することに決し、再び伊19、伊169、伊175、伊135、伊21、呂38各潜水艦をもっ

甲潜水部隊監視配備図



て甲潜水部隊を編制し、伊19潜乗艦中の第二潜水隊司令を、同隊指揮官に指定した。

甲潜水部隊は急速戦場に急行附図の如き配備に就く様指令された。

翌20日先遣部隊指揮官は伊39、伊40、伊174の三隻を更に甲潜水部隊に加え、各潜水艦は何れも21日以後トラックを出撃して戦場に急行した。

11月21日タラワ及びマキンに敵が上陸するに及んで、先遣部隊指揮官は伊35、伊21、伊19をタラワに、伊175をマキンに急行する様発令した。

22日に至って敵の主攻撃地点がタラワであることが判明したので、先遣部隊指揮官は伊175をマキンに配備し、伊169を除く爾余の全潜水艦をタラワに配備する様指令した。尚伊169は補給のためクェゼリンに帰投せしめた。

斯くて11月24日中に略左記の配備が完成したものと認められた。

艦名	配備位置	艦名	配備位置
伊35	タラワの20浬圏内担当海面	伊175	マキン附近
〃21		〃169	クェゼリン
〃19		〃40	11月21日以後トラック発タラワに急行中
〃39	タラワの20浬乃至40浬圏内担当海面	〃174	
呂38		〃17	ハワイ方面よりタラワに急行中

本戦斗中伊175潜は11月25日午前1時35分マキン附近で北上中の敵特空母1隻及護衛駆逐艦2隻を発見2時10分特空母を攻撃。魚雷3本を命中せしめて之を撃沈した。その後駆逐艦2隻の爆雷攻撃を受け軽微な損害を蒙ったが戦場を離脱し12月1日トラックに帰投した。

伊169、伊174は敵の爆雷攻撃を受け多少の損傷を蒙ったが何れも12月上旬トラックに帰投した。

爾余の潜水艦は爾後基地に帰投せず11月下旬乃至12月上旬にいずれも沈没したものと認定された。

第二章　マーシャル諸島方面の作戦

第一節　開戦前に於けるマーシャル諸島の状況

第一項　マーシャル諸島の戦略的地位

マーシャル諸島は、内南洋方面に於ける日本海軍の最重要戦略要点である。トラック諸島の東方概ね九〇〇浬乃至一一〇〇浬附近に於て幅約200浬、南北に亘る全長500浬の地域に、南北に亘って点在する約20数個の環礁群によって形成せられた群島である。

（環礁4号第一頁参照）

南鳥島、ウェーキ島と相俟って、我が小笠原群島、マリアナ諸島、カロリン諸島（主要島トラック）を通ずる日本の中部太平洋防禦線に対し掩護的地位にある重要な戦略的地位にあった。

然し乍ら従来日本海軍は、其の兵力量特に、其の補給能力に鑑み、戦時同諸島を確保し、利用することは困難と考えた。斯かる見地に立つ限り、同諸島の存在は日本海軍にとっては却って厄介な存在であって、当時の計画では戦時急速にミレ、ヤルート、ウオッゼ、クェゼリン、マロエラップその他敵が利用し得る港湾は、各種の機雷を敷設し、敵の利用を封止するに止め、我より積極的にこれを利用する等の意図はなかった。

然るに開戦前十数年来の艦船兵器の進歩、特に陸上大型攻撃航空機の出現は、従来の日本海軍の戦略思想に一大変化を与えた。

即ち日本海軍の九六式陸上攻撃機が実用化せられ、且つ昭和12年8月以降支那事変に於て、実績を挙げるに至った状況に鑑み、万一敵がマーシャル諸島を占領し、ここに有力な基地大型航空兵力を展開するに至れば、我がマリアナ、東カロリンを拠点とする防衛線は著しく弱化せられ、日本艦隊は渺かすらず不利な対勢下で邀撃作戦を実施しなければならないことが予想せられるに至った。

爰に於て日本海軍は、マーシャル諸島は戦時之を確保し積極的に利用する必要を認めたが、国際条約の制約等により防備施設等の建設が意の如く進渉せず、準備不充分のうちに太平洋戦争に突入するに至った。

即ち昭和15年中頃迄は同方面には、何等の軍事施設もなく、又一兵の武装兵も配備せられなかった。又ヤルートには相当数の在留日本人があり、南洋庁支庁が置かれていたが、駐在武官も配属されていなかった。

従って同方面に対しては、兵要調査すらも同時機までは、殆ど見るべきものがなかったが、国際情勢が益々緊迫を告げるに至ったので、取り敢えず同方面の兵要調査を実施することとなり、昭和14年7月日本海軍の調査団をマーシャル諸島に派遣し、短期間に広汎に亘り相当精細な調査を実施した。爾後右調査報告に基き同方面の防備が計画せられたのである。

第二項　マーシャル諸島の防備開始並びに兵力の展開

マーシャル諸島の諸島嶼は何れも同性質の環礁から成り、土地は平低で起伏渺なく、土質は珊瑚砂であって岩石、岩盤等がないので、陸上飛行場の建設は極めて容易であるが、地下水浅く（概む一米半）土中工事等が困難であることは島嶼の地積狭隘であることと相俟って防禦施設構築には著しく不利があることが特徴であった。

又魚類を除く生糧品の自給は殆んど不可能に近く、その補給上の困難が著しいものと予想された。

即ちマーシャル諸島の特徴は航空基地の建設は容易であって、攻者がこれを積極的に利用するに於ては著しく有利であるが、反面防禦上の欠陥著しく、一度守勢的地位に立つ場合には、同諸島の確保には困難性が予想された。

而してマーシャル諸島において、中型攻撃機以上の陸上飛行場建設可能の島嶼はウートロック、アイルック、ウオッゼ、マロエラップ、マジュロ、ミレ、クェゼリン、ルオット、ウオット、ブラウン等であり、水上機基地は殆ど到る所の環礁において其の適地が見られた。然し乍ら艦船入泊の便否等を考慮すれば、ウオッゼ、マロエラップ、マジュロ、ミレ、クェゼリン、ブラウン等が航空基地として最適であった。

日本海軍はラタック列島に数個の航空基地を建設し、ラリック列島に同方面防備上の中枢となるべき根拠地一個を選定する計画に基き、先づ前者の為にはウオッゼ、マロエラップ、ヤルートを、後者の為にはクェゼリンが選定され、昭和15年4月頃より各島殆んど一斉に基礎工事が開始せられ、昭和16年4月乃至12月末迄に一応概成した。

斯くして昭和16年1月15日附マーシャル諸島方面の防備兵力たる第六根拠地隊及び第24航空戦隊が編成せられ、同年3月中旬以降逐次同諸島に進出し兵力展開を完了した。

（開戦時同方面に於ける我が兵力配備の状況に関しては本シリーズ15頁参照）

第二節　開戦後に於けるマーシャル諸島方面兵力並びに防備増強の状況

第一項　基地の使用状況

太平洋戦争が開始されるや、マーシャル諸島は初期進攻作戦に於ける中部太平洋方面の前進根拠地として、ウェーキ攻略作戦、ギルバート諸島、ホーランド島、ベーカー島掃蕩作戦等参加部隊の基地として使用されたが、其の後も長期間に亘って、中部太平洋方面に行動する潜水部隊の基地となり、又ハワイ、ミッドウェイ偵察奇襲兵力の基地であった。

なお又ウェーキ島、ギルバート諸島方面に対する中継補給基地としても重要な役割を果した。

第二項　海軍兵力の増強状況

一、根拠地部隊の状況

第六根拠地隊は、マーシャル諸島進出以来昭和17年中頃迄は兵力に大なる変化はなかったが、同年8月米海兵隊のマキン奇襲上陸以来、陸上防備力に対しては兵器、人員の増加が逐次行われると共に、昭和18年6月15日ミレに第66警備隊を新たに設置し、又ギルバート諸島失陥以来第68警備隊を編成し、昭和19年1月末エニウェタック（ブラウン）に進出せしめられた。

然し乍らこの間同隊附属の防備艦艇は敵機動部隊等のマーシャル諸島来襲に依り損害を蒙ったものが尠くなく、その補塡が行われず、却って兵力が減少した実状であった。

即ち同隊附属の第64駆潜隊は昭和17年2月15日附、第8砲艦隊は同年7月10日附、第62駆潜隊は昭和18年2月15日附夫々解隊せられた。（次表備考欄参照）

昭和19年1月30日米軍がマーシャル諸島来攻時に於ける第六根拠地隊の状況は次の通りであった。

編成・兵力	配備	マーシャル諸島進出以後の経過
六根司令部	クェゼリン	
第16掃海隊		
第三玉丸	クェゼリン	昭和19・1・30沈没
第五玉丸	クェゼリン	
第七昭和丸	クェゼリン	
第八昭和丸	クェゼリン	
第63駆潜隊		
第三昭南丸	ヤルート	
第三文丸	ヤルート	
第三寿丸	ヤルート	昭和19・1・30沈没
第56駆潜隊		
第七京丸	ウォッゼ	
宇治丸	ウォッゼ	
警備隊		
第61警備隊	クェゼリン（一部ルオット）	一、昭和17・4・10第六防備隊を改編第61警備隊を編制す 二、新編制時の定員547名その後の増員により一九〇〇名となる
第62警備隊	ヤルート（イミエジ）	一、昭和17・4・10第51警備隊を改編し、第62警を編制す 二、編制時の定員547名
第63警備隊	マロエラップ（タロア）	一、昭和17・4・10第52警を改編し第63警を編制す 二、編制時の定員547名
第64警備隊	ウォッゼ	一、昭和17・4・10第54警と改編し第64警を編制す 二、編制時の定員547名
第65警備隊	ウェーキ	一、昭和16・12・31第四艦隊附属特別陸戦隊内田部隊を改編し第65警を編制す 二、編制時定員一二〇二名
第66警備隊	ミレ	一、昭和17・8横三特主力進駐、同年11月62警ミレ分遣隊（約500名）進駐、横三特と交代 二、昭和18・6・15第62警分遣隊及内地編制部隊を以て第66警を新編す 三、編制時定員一四一七名

編成・兵力	配備	マーシャル諸島進出以後の経過
第68警備隊	エニウェタック（ブラウン）	一、昭和18・12・23編制（横須賀）19・1・31エニウェタック（ブラウン）進出 二、編制時定員482名
第九五二航空隊	エビビゼ（クェゼリン）	一、編制時兵力水偵 二、編制時定員
第六潜水基地隊	クェゼリン	一、昭和17・2・1編制 二、編制時定員145其の後約200名に増員
第六通信隊	クェゼリン	一、昭和16・1・15編制 二、編制時定員　名其後約400名に増員

備考

一、第65駆潜隊第6京丸昭和18・11・27ナモ島に坐礁

二、第8砲艦隊は昭和17・7・10解隊せられ所属各艦は第6根拠地隊直属となる。（八海山丸昭和17・10・22沈没、光島丸昭和18・10・15第六根拠地部隊より除かる。豊津丸昭和17・2・1ウォッゼにおいて大破使用不能）

三、第62駆潜隊は昭和18・2・15解隊せられ、第六拓南丸は第三特別根拠地隊へ、第七拓南丸及び桂丸は第63警附属となる。

四、第64駆潜隊、第10昭南丸及び鹿島丸は昭和17・2・1ウォッゼに於て沈没、同隊は同年2月15日解隊せられ第11昭南丸は、第6防備隊に編入せらる。

二、航空部隊の状況

開戦前より一時第四艦隊に編入せられ中部太平洋方面の作戦の従事した24航空戦隊は、第11航空艦隊司令部のラバウル方面進出に関連して、再びその編制下に入り、第四艦隊司令長官の作戦指揮を受けることとなった。

右の編制替は航空兵力の移動性を極力発揚せしめる為であって、ソロモン海域及び中部太平洋方面を包含した中南部太平洋正面に必要に応じて航空兵力を随時移動集中せんとするものであった。

因に第24航空戦隊は戦況に応じ屢々南東方面に移動し同方面の作戦に従事した。

昭和17・12第24航空戦隊は日本本土、次いで北東方面へ移動し、その交代として第22航空戦隊がマーシャル諸島に進出し同方面の作戦に従事した。

昭和18・11・19米軍がギルバート諸島に来攻した当時マーシャル諸島方面所在航空兵力は各種機合計約105機であった。

ギルバート作戦開始以来マーシャル諸島作戦生起迄他方面より、同諸島に増強せられた航空兵力は、戦斗機、陸攻、艦攻合計一五一機に達したが、一方この間に於ける損耗も甚大であって空戦並びに地上に於ける損害の合計は一八三機に達した。又本土よりの新機材の補給は南東方面の戦況の逼迫等の関係上大なるものがなく、昭和19年1月末米軍のマーシャル諸島来攻時同方面所在航空兵力は約100機程度であって哨戒兵力にも不充分な程度であった。

以上の兵力状況概ね左の通りである。

	航空兵力	昭和18・11・19現在の機数	昭和18・11・19以降の増援兵力(+)	昭和18・11・19以降の補充機材(+)	マーシャル諸島より他方面への転進兵力(−)	自昭18・11・19至19・1・29の間の損耗兵力(−)	昭和19・1・29現在残存兵力
	艦戦fc	46	71	20	16	80	41
	陸攻flo	40	60	20	10	68	42
	艦攻fo 艦爆fb	3	20	10	0	14	19
	飛行艇fo	5	0	0	4	1	0
	水偵fsr	11	0	9	0	20	0
	計	105	151	59	30	183	103

備考

(イ)増援兵力は24航戦（戦39、陸攻44、艦攻20）、一航戦戦斗機32機、七五三空陸攻16機合計151機）

(ロ)マーシャル諸島より他方面への転出兵力は一航戦戦斗機16機及び七五二空陸攻10機（部隊再建のためテニアンに後退）八〇二空飛行艇四機（サイパンに後退）計30機）

三、其の他

昭和16・3第六根拠地隊がマーシャル諸島に進出以来、同方面の水陸施設も整備拡充せられ、中部太平洋方面の前進基地としての機能を整備するに従って、基地運用に必要な部隊が補充せられた。

その状況概ね左の通りである。

名称（隊名）	所在地	開設時期	解隊時期	記事
第六潜水艦基地隊	クェゼリン	17・2・1	19・3・4	第6根拠地隊に編入
第四経理部クェゼリン支部	〃	17・7・15		
第四軍需部クェゼリン支部	〃	17・3・10		
第四工作部クェゼリン支部	〃	17・2・10		
第百四航空廠ウォッゼ支部	ウォッゼ	19・12・1		南東方面航空廠解隊に伴い設置
第百四航空廠タロア分工場	マロエラップ（タロア）	〃		〃
第百六航空廠	ルオット	17・4・15	18・5・1	南東方面航空廠編成に付解隊
第百六航空廠ウォッゼ分工場	ウォッゼ	〃	〃	〃
第百六航空廠タロア分工場	マロエラップ（タロア）	〃	〃	〃
南東方面航空廠第二支廠	ルオット	18・5・1	18・12・1	
〃　ウォッゼ分工場	〃	〃	〃	
〃　タロア分工場	〃	〃	〃	
〃　イミエジ派遣所	ヤルート（イミエジ）	〃	〃	
トラック運輸部クェゼリン支部	クェゼリン	18・6・25		
第六通信隊	〃	16・1・15	19・3・5	第6根拠地隊に編入
第六回航班	ルオット	17・1・15	19・2・15	
第一四魚雷調整班	〃	18・2・15	19・8・15	
第四測量隊	トラック→クェゼリン	17・1・20	19・3・10	18・6クェゼリンに転出

第三項　陸軍兵力の配備状況

中部太平洋方面諸島嶼の防衛分担は海軍の所掌で、陸軍の守備部隊は駐屯しないことを建前としたが、昭和18年に入るや中部太平洋方面の離島に敵反攻の公算が生ずるに至ったので、大本営は必要に応じ、中部太平洋方面島嶼の守備の為陸軍兵力を派遣するの方針を決定し、同年四月乃至六月の頃差し当って左の部隊派遣を決定した。

部隊名	派遣先	発令時機	兵力内容
南海第一守備隊	ギルバート諸島	四月中旬	各守備隊は歩兵一ケ大隊、砲兵一ケ中隊を基幹とす
南海第二守備隊	南鳥島		
南海第三守備隊	ウェーキ	六月中旬	
南海第四守備隊	ギルバート諸島		

記事

一、南海第一守備隊は進出の途中乗船の遭難により進出不能となる。

二、南海第四守備隊は南海第一守備隊遭難の為更にギルバート諸島派遣を命ぜられたるものであるが、進出途中南東方面戦況の変化に依り、配属を第八方面軍に変更せられブーゲンビル島に転用された。

三、南鳥島進出部隊は横須賀鎮守府司令長官、爾余の部隊は、第四艦隊司令長官の指揮下に入る。

昭和18年8月末大本営は将来に於ける南東方面並に中部太平洋方面戦局の推移に鑑み速かに太平洋方面諸島嶼の陸上防衛力の強化を図ることに決定し更に陸軍兵力を増派することとなった。即ち昭和18年9月に於ける中部太平洋方面陸軍兵力の推進要領は概ね次の如きものであった。

部隊	派遣先	兵力内容 歩兵	機甲	砲兵	工兵	高射砲	進出予定時期
南海第二守備隊	南鳥島	一大		一中			既進出
南海第三守備隊	ウェーキ	一大		一中			既進出
海上機動旅団（甲）	クェゼリン又はヤルート	三大	一中		一大	一中	19・1
南洋第一支隊	マロエラップ、ミレ	二大	一中			一中	18・9
南洋第二支隊	クサイ	三大	一中		一中		18・11
南洋第三支隊	ポナペ	三大	一中	一中	一中		18・12
海上機動旅団		三大	一中	一大	一中		18・9
第五十二師団主力	トラック	六大	一中	二大	二中		19・1
海上機動旅団（乙）	トラック	三大	一中	一大	一中		19・2
南洋第四支隊	モートロック	一大	一中				18・12
第十三師団主力	サイパン	六大	一中		二中		19・1
海上機動旅団（乙）	テニアン	三大	一中		一中		19・7
南洋第五支隊	グアム	二大	一中				19・1
南洋第六支隊	メレヨン、パラオ	二大	一中				19・8

備考

一、右部隊の配属は東部軍であって第四艦隊司令長官の作戦指揮を受くるものとする。

二、昭和18年10月第52師団の一部をトラックに第13師団の一部をマリアナ諸島に夫々主力の展開に先だって先遣し、作戦資料の蒐集並びに部隊の展開準備をなさしむ。該部隊主力は夫々内地及び中支那に於て海洋作戦準備訓練及び所要の編制改正訓練を行う。尚第13師団は爾後支那一号作戦実施の為派遣を中止せられ、これに代って2月満州より第29師団が派遣せられた。

中部太平洋方面に対する陸軍兵力の展開は、右計画に依り準備中の処、昭和18年9月1日敵機動部隊は南鳥島に来襲するなど敵の中部太平洋方面に対する企図が活発化するの兆候があったので、大本営は取敢えず比島所在の歩兵第122聯隊をマーシャル諸島に、又9月内地で動員した第52師団より甲支隊（歩兵三ケ大隊、砲兵一ケ大隊、工兵一ケ中隊）を編成し、ポナペに派遣し第四艦隊司令長官の指揮下に入れ夫々敵の反攻企図に備えた。

昭和18年11月19日米軍ギルバート諸島に来攻するや、南洋第一支隊（9月上旬マーシャル諸島に進出主力はクェゼリン、一部をウォッゼ、マロエラップ、ヤルートに配備）はギルバート諸島奪回の為進出準備を行ったが輸送困難のため中止となり、支隊長は支隊主力（本部及び一ケ大隊）及び甲支隊兵力中、歩兵第百七聯隊の一ケ大隊、山砲第16聯隊の一ケ大隊（一ケ中隊欠）、工兵第52聯隊の一ケ中隊（一ケ小隊欠）を併せ指揮しミレに進出、爾後該島の守備に任ずることとなった。

又甲支隊全兵力は昭和18年10月ポナペに進出したが、同11月下旬支隊長の指揮する歩兵一ケ大隊、砲兵二ケ中隊、工兵一ケ中隊はクェゼリンに進出ギルバート方面作戦参加を準備中であったが同様進出中止となり、指揮下の歩兵一ケ大隊、砲兵二ケ中隊、工兵一ケ中隊を、南洋第一支隊長の指揮下に入れミレに進出せしめ、聯隊長の指揮する歩兵一ケ大隊、砲兵一ケ中隊をクサイに、爾余の部隊をポナペに配置し、夫々各島嶼の防衛に任ずることとなった。

昭和19年1月30日米軍のクェゼリン来攻時におけるマーシャル諸島、東カロリン諸島方面所在陸軍兵力の状況は次の如きものであった。

地名	配備兵力	摘要
クェゼリン	海上機動第一旅団第二大隊（4、6中隊欠）工兵南洋第一支隊の一部	一、南洋第一支隊は18年11月配備終了
ウォッゼ	海上機動第一旅団二大隊四中隊南洋第一支隊の機関銃中隊	二、海上機動第一旅団所属部隊は一月下旬到着
マロエラップ	海上機動第一旅団の二大隊6中隊南洋第一支隊の一部	

ミレ	南洋第一支隊（二大隊欠）山砲、工兵		
ヤルート	南洋第一支隊第二大隊〃　機関銃中隊		
ブラウン	海上機動第一旅団（第二大隊、工兵欠）	19年1月進出	
クサイ	南洋第二支隊（鉄嶺に編成）歩兵一〇七聯隊	19年1月3日上陸	
ポナペ	南洋第三支隊（鉄嶺に編成）歩兵一〇七聯隊	19年1月9日上陸	
モートロック	南洋第四支隊（松江に編成の歩兵第百四十二聯隊の補充隊）	19年1月13日上陸	
トラック	第五二師団司令部夏島歩兵一〇五聯隊春島歩兵六九聯隊水曜島	19年1月4日上陸	

第四項　防備施設の状況

前述の如く、マーシャル諸島各島嶼は、地積狭隘且つ平低で、地下水浅く防備施設の構築は、極めて困難な状況であって、之等諸条件は同諸島防備上の致命的欠陥を構成するものであった。従ってマーシャル諸島に対する兵術的価値に関しては従来幾多の異論も生じたが、同諸島に優勢なる航空兵力を集中し、日本艦隊が同方面に進出して積極的に作戦する場合に於ては、同諸島の地形上からする防備上の欠陥は必ずしも致命的ではないとの判断に基き、同諸島に多数の航空基地を建設する方針となった次第であるが、防禦施設に関しては大なる努力が払われず殆んど凡てが地上に暴露された儘構築された。然るに米軍のソロモン群島方面に於ける反撃並びにマキン、タラワの攻略等に徴し、島嶼の強度は案外に貧弱なることが判明し、極力マーシャル諸島方面の地上防備の強化に努力したがギルバート群島喪失以後に於ては船腹の不足、米潜水艦並びに航空機の跳梁等の為（当時の艦艇船舶の被害、「参照資料第七」参照）鋼材、セメント等の資材の輸送が困難となり昭和19年2月初頭米軍来攻時迄には、飛行場以外は殆んど見るべき防備施設を構築し得ず、地方防備兵力の拠点も塹壕程度のものであって、敵の熾烈な砲爆撃に依って甚大な損害を蒙るに至った。

マーシャル諸島に於ける航空基地の状況は次の通りであった。

第三節　ギルバート群島失陥以後に於ける中部太平洋方面の諸情勢

第一項　敵の企図に対する判断

米軍のギルバート群島攻略完了後に於ける情勢に於て、今後米軍は如何なる進攻方向をとるであろうか、又その進攻時機如何は、我が軍にとって重大な問題であった。

敵のギルバート群島占領に依り、米軍従来の進攻路線であるソロモン群島、ニューギニアを西進して比島に到達せんとするもの、外にギルバート、マーシャル、マリアナ、カロリン諸島を経て比島に到達せんとする新たな進攻路線が今や現実の問題となって現わ

名称	位置	飛行場の規模	その他	基地完成時期
エンチャビ（エニウエタック）	陸上基地 一、飛行機隊の移動中継基地として整備す 二、主滑走路 六〇米×一二〇〇米 三、副滑走路 九〇米×八〇〇米 四、宿舎三棟 五、簡単なる通信施設等			一、一八―三―三〇陸攻試着陸完了 二、一八―四―二一〇〇名宿泊可能
メリレン（エニウエタック）	応急水上機達着場			
ルオット（クェゼリン）	陸上基地 一、マーシャル方面陸上機の中枢基地として整備 二、滑走路 七〇〇米×一、一〇〇米 七〇〇米×一、一〇〇米 三、航空通信施設完備一 四、陸攻七二機、戦闘機一〇〇機展開に必要なる人員の収容補給諸施設完備	一、南東方面空廠第二支廠あり マーシャル、ギルバート方面の器材修理補給に任ず 二、防禦兵器 一四糎×四 一二七粍AA×MG×不詳	一、飛行場の建設は一五年中期より開始一六年四月末飛行機の発着可能となる 二、基地としての諸施設完備せるは一八年夏頃 三、宿舎、修理補給諸施設はニムル島に設置せらる	
クェゼリン（クェゼリン）	陸上基地 一、連絡中継基地として整備 二、滑走路 八〇米×一、二〇〇米 三、宿舎一棟	（マーシャル方面海軍上並に陸上防備の中枢基地として整備せられ根拠地隊司令部通信隊、施設部、潜水艦基地隊、軍需部運輸部等の支部施設あり）		一、一七―一二滑走路のみ完成
エビゼ（クェゼリン）	一、水上基地 二、駐屯施設を整備 三、飛行機滑走台巾一〇米 四、宿舎五棟 通信施設			一、一五年末工事に着手一六年中に完成 二、一六年一二月一七日航空隊開設
イミエジ（ヤルート）	一、水上基地 二、大艇二隊、水戦一隊分の常駐施設を整備 三、一九四一年四月末航空基地概成 滑走台一（幅四〇米長さ一一〇米） 爆弾庫、燃料庫各一送受信所各一	防禦兵器 方位測定所一 その他不詳		一、一六年四月末航空基地概成 二、一六年三月末航空隊進出常駐

れるに至った。而して右進攻路線のいづれも終局に於ては、比島を占領し、我が南方への輸送動脈を遮断せんとする致命的なものであるが、特に後者に於ては中部太平洋に於ける日本海軍の根拠地を掃蕩し、且つ日本本土を直接空襲し得る大型機に対する航空基地を敵が獲得し得る点に於て更に一層致命的な重大さを有するものであった。

当時日米の兵力比から観察するならば、米軍は以上の二方面進攻作戦を同時に遂行し得る余裕があるに反し、我が軍は南東方面作戦に於ける所要兵力の充当にも困難を感ずる状況であって、今後敵が二方面の内いづれに重点を置くか、或は二方面を同時に又は交互に進攻するかの判断並びにこれ等に対応する我兵力配備の決定等は極めて重要であったがこれに対する具体的対策を如何にすべきやは我が方に取って複雑困難な問題であった。

即ち当時に於ける南東方面作戦の状況は昭和18年10月27日敵はモノ島に上陸し、次いで11月1日タロキナに大規模の上陸作戦を開始し、同方面に鞏固な航空基地を建設し、更に北上して12月15日ニューブリテン島マーカス岬に、次いで26日ツルブに上陸し、又昭和19年1月2日にはニューギニアのガリ附近にも上陸して完全にダンビール海峡を管制すると共にラボール包囲の態勢を完成するに至った。

右の如き状況に於て、敵が差しあたり作戦指導の重点を南東方面に置くか、中部太平洋方面に置くかの判定は困難であったが、敵の航空兵力使用量の比重を比較検討することは、右判断の一資料と考えられた。即ちギルバート作戦終了後よりマーシャル作戦開始迄の間に於ける右両方面に対する敵航空兵力の使用状況を比較すれば次の通りである。

期間	機種	ラボール、カビエン方面敵機来襲状況 来襲機数	敵の喪失機数	マーシャル諸島方面敵機来襲状況 来襲機数	敵の喪失機数	備考
自18.11.25 至18.12.5	大型	一三四	一	一三六	三	マーシャル諸島方面来襲機を含む
	小型	一一〇	一六	*一五〇	一四	
	不明		七二	—	—	
	合計	二四四	八八	二八六	一七	
自18.12.6 至18.12.31	大型	一二三	一〇	三四九	二四	中には来襲機を含む
	小型	一二九	一四〇	五五一	八	ナウル、オーシャン来襲機を含む
	不明	六〇	一八	—	—	
	合計	三二三	一六八	九〇〇	三	
自19.1.1 至19.1.29	大型	七八三	一〇三	五七六	一六	
	小型	一、二四三	三六七	九〇	六	
	不明	九八三	二三〇	一七九	—	
	合計	三、一〇八	六九九	八四五	三	
総合計		三、六六四	九五五	三、〇三一	七二	

即ちラボール、カビエン地区のみに対する敵機の来襲機数は、ナウル、オーシャンを含むマーシャル諸島全地域に対する来襲機数に比して、昭和18年度末までは尠かったが、昭和19年1月以降前者は急激に増大した。又ラボール、カビエン方面に於ける敵機の喪失機数が、マーシャル諸島方面に於ける敵機の喪失機数に比して圧倒的に大なることは、我が軍が同方面の防禦に大なる努力を払った証左であると共に、敵の南東方面航空作戦が根強かったことを示すものである。

以上の諸情勢に鑑み、ギルバート作戦終了後に於ける敵の次期進攻方面に関する我が情況判断は、依然ニューブリテン島方面にあるものとし、これが防衛に全力を傾注した結果、マーシャル諸島方面防備兵力の増勢は已むを得ず、抑制せざるを得ない状況であった。

一月中旬米機動部隊司令部が次期の攻略目標はラボール、カビエンに在る旨発表したことは我が軍の判断を裏書するものと思われるに至った。

事記			
ミレ	一、陸上基地 一、滑走路 二、四〇〇米 二、宿舎八棟、 三、魚雷格納庫四棟 送信所及受信所	防禦兵器 一一四糧×八 一二、七糧×八 電探×一 一一五〇糧探照燈×	一、一八—一一二 完成、一八—一— 一二〇航空隊進出 一八—一〇—中旬 迄に追加工事附属 施設完了
タロア（マロエラップ）	陸上基地 一、滑走路 七〇米×一、五〇〇米 七〇米×一、三〇〇米 二、送信所各一 三、格納庫一棟、宿舎その他一五棟	防禦兵器 一一五糧×六 一二、七糧× 電探×二 一〇、AA× 探照燈×四	一、一五年中に起工 一、六年六月末完成
ウオッゼ	一、陸上基地 一、滑走路 八〇〇米×一、五〇〇米 八〇〇米×一、〇五〇米 二、水上基地 三、その他機滑走台 送受信所一、爆弾庫、燃料庫各一、格納庫二棟、宿舎一五棟、倉庫一棟	防禦兵器 一一五糧砲×六 一二、七糧AA× 電探×二 一二、探照燈×一	一、陸上基地 一一五年起工 一六—五—末概成 二、水上基地 一五年起工 一六—四—末概成

マーシャル群島とカロリン、マリアナ群島とを連繋する中継基地としてクサイ、ポナペは重要視すべきであるがこれ等基地の整備は実際上遅延し、マーシャル群島の防備上の一大欠陥となった。

一、クサイ航空基地建設に着手

昭和一七、一二、三

昭和一九、二、一〇　一五%工事進行せるも以後工事を中止す

二、(イ)ポナペ第二航空基地急速設営に着手

(ロ)昭和一九、三、一〇飛行場概成（第一航空基地は小型機の不時着基地程度

第二項　我が作戦指導方針

一、大本営の作戦指導方針

昭和18年9月大海指第280号を以て示された大本営作戦指導の根本方針、即ち南東方面の要域に於て来攻する敵を撃破して極力持久を策し、この間速かに濠北方面より中部太平洋方面要域に亘り反撃作戦の支撐を完成し、且つ反撃戦力を整備し、来攻する敵に対し徹底的反撃を加え、努めて事前にこれを覆滅し、その戦意を挫折せしめんとする方針はギルバート諸島失陥後に於ても変更せられなかった。

然し乍らギルバート群島の失陥は、直ちにマーシャル諸島に対する脅威であり、又マーシャル諸島を敵が攻略するに至った場合は、ラボール方面の攻略と同様カロリン諸島、マリアナ諸島に対する敵の有力な進攻拠点となることが確実であって、南東方面の防衛兵力に対するマーシャル方面防衛兵力の比重を如何にすべきやは、作戦指導上最も考慮を要する問題であった。

ギルバート群島失陥直後大本営は聯合艦隊司令長官に対し、今後の作戦指導方針に関し左の要旨の指示を行った。

「昭和18年11月26日
　　発大海一部長
宛聯合艦隊司令長官
　ギルバート方面に集中せる敵機動部隊は尠くとも同方面敵の拠点概成する迄はこれに釘付けさるる算大にして、これを捕捉撃滅し得れば爾後敵の新企図は相当長期に亘り大なる制肘を受くべく、この間我は航空母艦並びに基地航空兵力を整備し得て、必勝の態勢を確立し得る次第なるを以て、この際為し得る限りの航空兵力を集中してこれが撃滅を図ること喫緊と認むるに付、航空兵力の一部転用を考慮あり度、尚右の場合南西方面情勢の急変に備うるためには第二航空戦隊の転進を暫く見合わせ、又カルカッタ攻撃は極力陸軍機の活用に依るを可と認む」

斯くして大本営の作戦指導方針は、兵力整備に重点を置き、好機敵海上進攻兵力の漸減を図り、その進攻時機を遅延せしむるにあって、マーシャル諸島方面の防衛に関し積極的作戦を実施する意図のないことを明示したものであった。

二、聯合艦隊の作戦指導方針

当時聯合艦隊は、大本営の意図に従って航空兵力をマーシャル諸島方面に集中することに決し、取り敢えずギルバート作戦のため北東方面艦隊より増援せられた第24航空戦隊兵力をその儘マーシャル諸島に止めて作戦を続行せしめると共に、南西方面艦隊より第七五三航空隊の陸攻15機をマーシャル方面に増援せしめた。

当時南東方面の戦況も日に活発を加え、同方面より兵力抽出は困難であり、北東方面も第二十四航空戦隊の転進以後同方面は極度に航空兵力が手薄となり、更に増援兵力を抽出することは不可能であった。又内地方面には第一航空艦隊が整備されつつあったが、未だ戦場に進出し得る状況ではなかった。斯くてマーシャル諸島方面に可及的航空兵力を集中してギルバート群島方面を行動する敵海上兵力を攻撃滅殺せんとする大本営の方針は、実際問題として、マーシャル方面現存兵力を以て実施する程度のものとならざるを得なかった。

爰に於て聯合艦隊司令長官は12月3日遂撃部隊に対する内南洋部隊指揮官の指揮を解き、翌四日当面に於ける内南洋方面の作戦実施に関する次の如き命令を下達した。

「聯合艦隊電令作第780号
　　12月4日一一二四
㈠丙作戦第三法終結、Z作戦部隊の支作戦を解く
㈡内南洋方面部隊は現作戦を続行すべし
㈢先遣部隊は適宜兵力を以てギルバート方面に対する敵の増援補給を遮断すべし」

斯くしてマーシャル方面の防衛並びにギルバート群島方面敵兵力の減殺は内南洋方面部隊所属兵力を以て実施することとなったが、爾後南東方面に於ける戦況の急迫は漸次大本営並びに聯合艦隊司令部の作戦指導の重点を南東方面に移す結果となり内南洋方面所在航空兵力を逐次南東方面に注入する結果となった。

即ち昭和19年1月14日大海一部長及び聯合艦隊首席参謀はラボールに到着し、南東方面艦隊司令部に対し今後に於ける聯合艦隊司令部のとらんとする作戦指導方針の腹案を明かにしたが、該腹案は「敵の反攻方面を南東方面と判断し、当面凡ゆる努力を払って南東方面の兵力増強に努める」ことを骨子としたものであって当時の中央並びに聯合艦隊司令部の意図を推定し得る重要な資料を認められ、その要旨は次の如きものであった。

昭和19年1月中旬に於ける聯合艦隊の作戦指導腹案

一、情況判断

敵の主反攻方面は南東方面と判断する。南西方面の情勢は左程逼迫しあるものと認められず。

二、兵力使用要領

当面凡ゆる努力を払って南東方面の兵力増強に努める。これが為

㈠第一航空戦隊戦闘機隊を差し当り南東方面に増援する。

㈡第二航空戦隊航空兵力を内南洋方面の情況許す限り南東方面に注入を考慮する。

（備考）右兵力は1月20日以降使用し得る練度に到達する兵力、戦闘65機機、艦爆36機、艦攻27機。

㈢南西方面より艦攻20機、陸攻27機をトラック方面に移動集中し予備兵力として控置する。

（備考）右兵力はトラック進出後相当の訓練を要する。

㈣トラック残留水上兵力を戦艦1隻、巡洋艦5隻、駆逐艦12隻と予定する。

㈤2月中下旬第22航空戦隊、第24航空戦隊の交代期に航空作戦を活潑化する。

㈥第1航空艦隊兵力を当分作戦に使用しない。

三、其の他

㈠第1航空戦隊は新機材を補充し、2月上旬頃昭南に進出せしめ訓練を行はしめる。

㈡第3航空戦隊は3月頃編成の予定。

第三項　作戦経過の概要

ギルバート群島方面作戦生起に伴い、マーシャル諸島方面に増援集中せられた航空兵力は昭和18年11月24日以降12月6日迄に全部現地に進出し第24航空戦隊司令部は11月28日ルオットに進出し内南洋部隊指揮官の指揮下に入った。

爰に於て内南洋部隊指揮官は第22航空戦隊兵力の整備再建を行う要あることを痛感し12月2日左記命令を出した。

「内南洋部隊電令作第85号〇二一五

二五

一、第22航空戦隊司令官は第24航空戦隊進出後成るべく速に第22航空戦隊司令部（第24航空戦隊の作戦実施に必要なる人員を除く）及び第755航空隊を率いテニアンに転進、同隊の再建並びに訓練に従事すべし。

二、第24航空戦隊司令官は第22航空戦隊マーシャル諸島残留兵力を併せ現作戦を続行すべし。」

右の命令に基き12月2日以後第22航空戦隊司令官と第24航空戦隊司令官は指揮の交代を準備中、又12月4日聯合艦隊司令長官はギルバート方面作戦（丙作戦第三法）の終結を令する等我が軍の兵力配備転換中に、不幸にも翌12月5日敵機動部隊は大挙してマーシャル諸島に来襲し、ルォット、クェゼリン、タロア等は敵艦上機の空襲を受け、我が航空兵力は各種機合計65機の損害をうけ、マーシャル諸島所在航空兵力は一挙にして甚大な損害を蒙るに至った。

なお同日の艦船の被害も亦甚大であった（「参照資料第五」参照）

而してギルバート作戦開始より12月5日米機動部隊のマーシャル諸島空襲後の同諸島所在航空兵力の消長は次の通りであった。

11月19日マーシャル諸島所在兵力

一〇五機

11月19日以後12月6日迄の間他方面よりマーシャル諸島方面に増援せられた兵力

一五一機

11月19日より12月6日迄のマーシャル諸島所在航空兵力の損耗状況

一五二機

即ちマーシャル諸島所在航空兵力は、ギルバート作戦生起以来殆んど同方面に増援された兵力と略々均しい兵力を喪失するに至った。

爰に於て内南洋部隊指揮官は予ねての計画通り第22航空戦隊兵力の再建整備を企図し、マーシャル方面所在航空部隊を第24航空戦隊司令官に指揮せしめ、第22航空戦隊司令部並びに第755航空隊を12月7日テニアンに後退せしめた。

然るに米軍はギルバート群島方面に於ける航空基地の整備に伴いマーシャン諸島に対する航空攻撃を激化するに至った。特に12月19日以降は小型機がギルバート方面基地よりミレ方面に飛来するに至って、我が航空作戦の実施が愈々困難となり、我が航空作戦は主として小数兵力を以て敵航空基地に対し、夜間空襲を加える程度であった。

我が航空部隊の戦闘状況は附録「参照資料第六」の通りである。

又12月6日以降翌年1月29日迄のマーシャル諸島及び附近諸島嶼に対する敵の空襲状況は次の通りであった。

	ミレ	ヤルート	タロア	ウォッゼ	クェゼリン	クサイ	ポナペ	ブラウン	ウエーキ	ナウル	オーシャン	計
小型機	一三五	九〇	一二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三三七
大型機	二〇一	七八	三五二	一六一	一三八	一七	〇	一	〇	一二	二	九六三
機型不明	二七〇	八	一〇	二三	〇	〇	〇	〇	〇	二五〇	〇	五六二
合計	六〇六	一七六	三七四	一八四	一三八	一七	〇	一	〇	二六二	二	一、七六〇

即ち敵機の空襲指向の重点はミレ、タロア、ナウル、ヤルート、ウォッゼ次いでクェゼリン及びルオットであった。

以上の如き現実的な問題も加わって、米軍がマーシャル諸島に侵攻する場合にはラタック列島、就中ミレ、タロア、ウォッゼ等に上陸を企図する公算が多いと推定せられた。

南東方面の戦況は12月初旬以降活況を呈し、特に12月中旬ニューブリテン島に敵が上陸するに及んで、聯合艦隊はトラック方面に控置してあった予備航空兵力を逐次ラバウル方面に投入するに至ったが、1月25日第二航空戦隊の母艦搭載機の残り全部をラバウルに進出せしめるに及んでマーシャル方面防衛の為に使用し得る航空兵力は愈々手薄となるに至った。

又一月中下旬マーシャル諸島方面へ

は海上機動第一旅団兵力が進出し各島嶼に分散展開中であって、之に伴う地上防備も相当混乱しつつある状況であった。

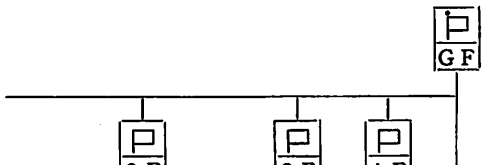
右の如き状況のもとに、1月30日米機動部隊がマーシャル諸島方面に来襲、ギルバート方面基地航空機と相呼応してルオット、クェゼリン、ウォッゼ、マロエラップ、ミレ、ヤルート環礁等を空襲し、マーシャル諸島攻略を開始するに至った。

第四節　敵のマーシャル諸島攻略に伴う諸戦闘

第一項　敵来攻時に於ける我が兵力配備

一、指揮系統

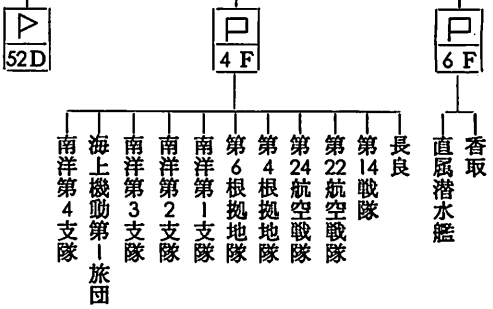
昭和19年1月29日に於ける東経150度以東の中部太平洋方面所在の日本軍の指揮系統は次の通りであった。



二、兵力配備

(イ)水上部隊

昭和19年1月29日に於ける東経150度以東の中部太平洋方面所在の艦艇勢力は次の通りであった。



区分		艦船(所在地)	記事
第1艦隊	第1戦隊	武蔵(トラック)	
	第2戦隊	長門(トラック)、扶桑(トラック)	大和は呉に在り、伊勢、日向山城は内地
	第11水雷戦隊		全部内地
第2艦隊	第4戦隊	愛宕(トラック)、鳥海(トラック)	高雄摩耶内地
	第5戦隊	妙高(トラック)、羽黒(トラック)	
	第2水雷戦隊	不明	能代内地その他駆逐艦の所在不明
第3艦隊	第1航空戦隊		瑞鶴、翔鶴、瑞鳳内地
	第2航空戦隊		隼鷹、飛鷹、龍鳳内地
	第3戦隊		金剛、榛名内地

(ロ)航空兵力

昭和19年1月29日に於ける東経150度以東の中部太平洋方面所在の航空兵力の状況は次の通りであった。

方面			所属	隊名	機種機数	配備基地	兵力綜合
第3艦隊	第7戦隊		熊野、鈴谷、利根(トラック)				
	第10戦隊		阿賀野(トラック)				
	附属		大淀(トラック)				
第4艦隊	第14戦隊		那珂(ボナペ方面)				
	第4根拠地隊		附属艦艇の状況詳細不明				
	第5特根地隊						
	第6特根地隊		第三玉丸、第三文丸、第三寿丸(以上マリアナ方面)、第11シャル方面				
			香取、平安丸(トラック)				
第6艦隊			第2潜水隊(16、19、21、39、40)、第11潜水隊(32、35、36、38)、第15潜水隊				
マリヤナ方面	第22航空戦隊	第22航空戦隊	第五玉丸、第七昭和丸、第八昭和丸、第三昭南丸、第七京丸の所在は不確実	筑摩内地			
			矢矧内地その他駆逐艦の所在不明				
			千歳昭南附近、最上内地				
			長良内地				
	第4根拠地隊		第一航空隊	七五五空	陸攻 一〇	テニアン	戦 二〇
			第二航空隊	八〇二航	大艇 六		陸攻 一〇
			第三航空隊	九〇二空	水偵 六	サイパン	水偵 六
	第26航空戦隊		第四航空隊	二〇一空	戦 二〇		大艇 六
			第五航空隊	二〇四空	戦 一五		合計 四二
東カロリン方面	第22航空戦隊	第22航空戦隊	第一航空隊	七五五空	陸攻 六	トラック	戦 一五
			第二航空隊	九〇二空	水偵 一二		陸攻 六
			第三航空隊		戦 三		水偵 二五
	第4根拠地隊		第四航空隊	二〇四空	戦 一五		合計 四六
	第26航空戦隊		南東方面艦隊		観測 一〇		

(ハ)陸上部隊

昭和19年1月29日に於ける東経150度以東の陸上防備兵力の状況は次の通りであった。

所属	部隊	兵力	配備地点
海軍			
第四艦隊（トラック）			
第4根拠地隊（トラック）	41警	トラック	
	42警	ポナペ	
第6根拠地隊（クェゼリン）	61警	約一九〇〇名	クェゼリン ルオット
	62警	ヤルート	
	63警	ウォッゼ	
	64警	マロエラップ	
	65警	ウェーキ	
	66警	ミレ	
	68警	クサイ	
第4南洋支隊	第三南洋支隊、機関砲第二大隊、戦車隊、衛生隊	ポナペ	
	第4南洋支隊	モートロック	
	1052師団司令部、歩69（Ⅲ大隊）（Ⅲ大隊次）	トラック	

マーシャル方面

面	隊	部隊	兵力	配備地点
南西方面艦隊	第23航空戦隊	第22航空戦隊	二五二空	七五三空
第四艦隊	第6根拠地隊	第24航空戦隊	戦三〇	陸攻一〇
			二八一空	七五二空
			戦二五	陸攻二〇
			五三一空	九五二空
			艦攻一〇	水偵四
			ウォッゼ	エビゼ
			ルオット タロア	ルオット

合計　戦五五　艦攻一〇　陸攻三〇　水偵四　九九

陸軍

隊	兵力	配備地点
第四艦隊		
第二南洋支隊、歩兵107聯隊（二大隊）、三大隊、戦車隊、衛生隊、機関砲隊、衛生隊（欠）	クサイ	
海上機動第一旅団（4、6中隊欠）南洋第一支隊	クェゼリン	
海上機動第一旅団（第四中隊）南洋第一支隊（第五中隊）	ウォッゼ	
海上機動第一旅団六中隊、南洋第一支隊七中隊	マロエラップ	
南洋第一支隊主力、歩兵一〇七聯隊、工兵主力	ミレ	
南洋第一支隊第二大隊（五、七、機関銃中隊、歩兵砲中隊の主力欠）	ヤルート	
海上機動第一旅団主力	ブラウン	

第二項　全般戦闘状況

マーシャル諸島方面の状況は12月7日第24航空戦隊司令官が第22航空戦隊司令官より、同方面航空作戦の指揮を継承して日尚浅く、又陸上防衛の主体となるべき陸軍海上機動旅団のマーシャル諸島への進出も一月中下旬であって、各島に展開途中の混乱した状況下に1月30日早朝敵機動部隊はマーシャル諸島に来襲、空母搭載機によってクェゼリン、ルオット、ウオッゼ、タロアの空襲をうけ、之に呼応したギルバート諸島の敵基地航空部隊によって、ミレ、ヤルート等の攻撃をうけ又タロア、ウオッゼは敵の巡洋艦及び駆逐艦に依り艦砲射撃を受けた。翌31日はエニウェタクも敵空母搭載機の空襲を受けたが、これら空襲並びに艦砲射撃は敵がルオット、クェゼリンに上陸するまで執拗に継続せられた。

1月30日より2月1日迄の三日間におけるマーシャル諸島方面の空襲状況は次の通りであった。

自19・1・31至19・2・1の3日間左記箇所に対する敵機来襲状況

	母艦機	基地航空機	合計
ルオット	145	0	145
クェゼリン	103	0	103
ウォッゼ	225	0	225
ミレ	0	30	30
タロア	130	0	130
ヤルート	0	34	34
エニウェタク	120	0	120
計	723	64	787

又右の時期別詳細及びマーシャル諸島方面各島嶼に対する敵の艦砲射撃の状況は附録資料第七の通りである。

聯合艦隊司令長官は1月30日〇五二五丙作戦第二法（マーシャル諸島作戦用意）を発令し警戒を厳にすると共に、第14戦隊（那珂）をポナペに進出せしめ、陸軍旧甲支隊のポナペ所在部隊をマーシャル諸島（マロエラップ、ウオッゼの予定）に増援せんと企図したが、翌31日の八三〇に至って右企図を放棄し、第14戦隊をトラックに帰還を命じた。

マーシャル諸島所在の我が航空部隊は敵機動部隊の奇襲を受けた結果、敵機動部隊の情況等も30日〇八三〇に至って始めてマロエラップ西方80浬附近にその一部を発見し得た状況であって、随って敵に対して統制ある航空攻撃が実施出来ず、30日及び31日の敵の空襲に依って我が航空兵力は陸攻の一部（約9機）がトラック方面に避退した外は全んど全部地上に於て損耗するに至った。

第三項　クェゼリン環礁の戦闘

一、ルオットの戦闘

ルオット島は隣接のニムル島と共にマーシャル諸島方面に於ける航空の中心基地として最重要な島嶼であったが、其の位置がラリック列島中の一諸島であった為、対岸のクェゼリン本島と共に敵の攻略に対しては比較的安全度が大なるものと考えられていた。従ってルオット、ニムル両島には防衛兵力としては陸軍部隊は存在せず、クェゼリン本島に本部を有する海軍第61警備隊のルオット分遣隊約400名が駐屯して居るに過ぎず、その他は航空隊員、設営隊関係員等であって地上戦闘の戦力としては極めて貧弱な状況であった。

米軍来攻当時のルオット、ニムル両島及び附近の離島所在の我が部隊

は次の通りであった。

第61警備隊ルオット分遣隊　約　四〇〇名
山田部隊（航空隊関係員）　約一、五〇〇名
萩原部隊友村班（設営関係員）　約　八〇〇名
只木部隊（航空廠関係）　約　二〇〇名
軍需部関係その他　約　二〇名
計　約二、九二〇名

以上の中海軍軍人が約　約一、九〇〇名
軍属が約一、一〇〇名であって軍属中には一五〇乃至二〇〇名の半島人が含まれて居った。其の兵力の総指揮官は第24航空戦隊司令官海軍少将山田道行であった。

ルオット、ニムル両島は30日以来連続猛烈な航空攻撃及び艦砲射撃を受け、31日には島内貯蔵の魚雷、爆弾、燃料及び弾丸等殆んど全部が焼失し31日〇六三〇以降ルオット島との通信連絡は杜絶した。

翌2月1日の敵砲爆撃に依って島はその形を変え、防禦陣地の不完全と相俟って所在の我が兵力の戦死傷極めて多く、敵の上陸迄に殆んど大部分が死傷するに至った。

2月2日午後艦砲射撃の掩護の下に敵は先づ離島に上陸、次いで海岸を徒渉して本島に上陸を開始したが、我が軍の抵抗が微弱であった為二日中には総ての組織的抗戦は終息するに至った。

この戦闘に於て我が軍は殆んど戦死し敵の捕虜となったものは軍人3名（下士官二名、兵一名）軍属8名であった。又米軍の損害は戦死約100名、負傷約400名と推定された。

二、クェゼリン本島の戦闘

米軍来攻時のクェゼリン本島に於ける守備兵力は左の通りであった。

(イ)海軍部隊
六根司令部　約　三〇名
警備隊派遣陸戦隊　約　五〇名
第61警備隊　約一、五〇〇名
第6通信隊　約　四〇〇名
第6潜水艦基地隊約　二〇〇名
其他（施設、軍需、運輸、経理関係員）　約　五二〇名
計　約二、七〇〇名

(ロ)陸軍部隊
第1海上機動旅団の一部及び第1南洋支隊の一部　約一、二〇〇名

以上陸海軍合計総兵力は約三、九〇〇名であって、其の総指揮官は第6根拠地隊司令官海軍少将秋山門造であった。これ等兵力はギルバート作戦の戦訓に鑑み、敵が環礁内よりの上陸に備え、環礁内側海岸に戦車壕、トーチカ、機銃陣地等を急速に構築し、概ね本島を南北の二防備地区に区分し次の如く兵力配備を行った。

南地区
指揮官　阿蘇陸軍大佐（聯隊長）
兵力　陸軍部隊、六根司令部附属陸戦隊、海軍気象隊、軍需部、運輸部関係員

北地区
指揮官　第61警備隊司令
兵力　南地区配備以外の全海軍部隊

クェゼリン本島に於ては31日も前日に引続き敵の空襲を受けると共に、〇七〇〇頃より戦艦3隻、駆逐艦5隻に依る艦砲射撃を受け暗号書は一部を除き全部焼却した。

一三三〇頃総指揮官秋山海軍少将は敵は「今夕より明未明に亘り、礁内に侵入、上陸を企図すべきを以て海上部隊は全力之を襲撃せよ」との命令を発した。

エニブージ島の第6通信隊送信所は同日の砲爆撃によって破壊せられ、辛うじてTM電信機を以て連絡を確保した。

翌2月1日〇四三〇敵は戦艦以下17隻の艦艇及び四五隻の輸送船によって環礁に近接し、〇七三〇南砲台附近に上陸を試みたが我軍は之を撃退した。なお同日の敵の砲爆撃に依って全砲台は破壊せられ人員の損害は所在員数の約五分の一を出したが士気は極めて旺盛であった。

又同日敵の砲爆撃の被害に鑑み、艦船部隊の全部を陸上に揚げ北地区守備隊に編入陸戦に従事せしめたが、一八二二における敵艦船の状況は礁外視界内に戦艦5隻、巡洋艦5隻、駆逐艦10隻、輸送船14隻があった。

翌2日〇〇四五敵戦艦4隻、巡洋艦2隻、駆逐艦4隻、輸送船約20隻礁外視界内に在って砲撃を行い輸送船約17隻が環礁内に侵入し、上陸を決行するに至った（時刻不詳）秋山司令官は「味方は一兵となる迄陣地を固守し増援部隊の来着迄本島を死守すべし」と全軍に命令したが二〇〇〇頃同司令官は前線視察のため出壕の際敵弾を受け戦死するに至った。

夜間南地区守備部隊の全兵力は夜襲を決行し、一旦敵を水際附近迄撃退したが敵艦船並びにエニブージ島よりの集中射撃を受け大なる損害を受け攻撃が挫折するに至った。2月3日、4日は彼我の間に熾烈な陣地戦が行われたが、我が軍は逐次圧迫せられ4日一〇〇〇我が軍首脳部は自決し又阿蘇聯隊長は守兵を指揮して正面の敵に突入戦死するに至った。斯くて翌5日全島は完全に敵の占領するところとなったのである。

本戦闘に於て第6根拠地隊参謀

海軍大尉音羽正彦侯爵も戦死された。

尚クェゼリン本島北端から北方約四粁にあるエビジェ島は長さ約六〇〇米幅約七〇米の小島で、わが第九五二海軍航空隊（水上機基地）が所在し、同航空隊員約四〇〇名及び第四施設部クェゼリン支部エビジェ派遣員約四〇〇名計約八〇〇名が守備していた。

1月31日から2月4日まで、戦艦5隻、巡洋艦3隻及び駆逐艦6隻による艦砲射撃及び同時に艦上機により爆撃が行なわれた。

上陸部隊は、予定のとおり2月4日、支援射撃であらかじめ無力化されていた島の南部に上陸した。上陸後間もなく、わが守備隊は、防空壕や塹壕から、頑強に抵抗した。また同夜、わが軍は、夜暗に乗じて間歇的に反撃し、明けて5日〇一〇〇頃組織的逆襲をして、一時米軍の占領したところを奪回した。しかし衆寡敵せず、〇八三〇完全に組織的抵抗ができなくなり、一〇〇〇ころエビジェ島は攻略されてしまった。

第四項　マジュロ環礁の被占領

わが海軍は、開戦後水上機基地としてマジュロに建設を開始し、十七年中に概成して、当初ヤルート環礁のイミエジ島から基地員が飛行艇の哨戒基地として機能発揮のできる程度派遣されていたがミレ環礁の基地整備が成る（17年7月ごろ）に及びマジュロからミレに、基地を移動した。

米軍のマジュロ攻略部隊は2月1日から同環礁の攻略を開始し、その偵察隊の事前上陸偵察により日本軍のいないことを確かめて、上陸支援射撃をやめ、ここに無血上陸に成功した。

第五項　ブラウン環礁の失陥

2月17日18日の両日に行なわれたトラック環礁の大空襲、ポナペ島、クサイ島に対する攻撃は、米軍のブラウン（別名エニウェトク）環礁進攻の準備行動であった。

米軍上陸前の我方兵力配備

17年11月、内南洋部隊は第四建築部三〇〇名をエンチャビ島に送り、飛行場の建設に着手した。翌12月には五〇〇名の労務者が増員された。滑走路は18年3月ころ概成し、3月30日陸攻の試着陸を実施した。

同島の警備は、18年1月、第61警備隊から派遣された小数の監視哨によって始められ、10月頃同警備隊の分遣隊がこの環礁の防衛のために上陸した。この分遣隊は隊長以下61名で、そのうち10名は監視艇（第三号龍神丸）に乗り組み、5名がエニウェトク島の監視哨に就き、残りはエンチャビ島とその飛行場を守備した。

18年初期の飛行場の完成により、設営に当ったものの大部分はクェゼリンに移動した。この航空基地は、その後常駐兵力はなく、単に、マーシャルと西方の各基地とを結ぶ中継基地として使用され、航空隊要員300名分の宿泊設備があったが、18年末には兵曹長を長とする整備員等50名以下が居ただけであった。

その後、同環礁警備のため18年12月20日付新たに編制された第68警備隊（12月20日に横須賀で編制、1月24日出港したが1月31日被雷沈没）が到着すれば、この分遣隊は、その警備を交替して引揚げることになっていた。

19年1月31日、山九運輸会社（荷役会社で軍との間に沖仲仕を供給する契約を結んでいた）の約二〇〇名の労務者が浅香丸にて到着したが、これは初めはクェゼリンに向う予定のものであった。

海上機動第一旅団の到着

19年1月4日海上機動第一旅団が満州からこの環礁に進駐して来た。

同旅団の第二大隊と第七中隊を基幹とする部隊は、さらにクェゼリン、ウオッゼ、マロエラップ方面に派遣され、旅団主力は1月上旬末までに、エニウェトク、エンチャビ、メリレン（パーリー）の三島に配備された。

旅団長西田祥実少将は旅団司令部をメリレン島に置き、第61警備隊分遣隊を指揮下に入れた。

2月19日現在の兵力配備

即ち米軍来攻時同環礁にあったわが軍の配備兵力は次のとおりであった。

区分	メリレン	エンチャビ	エニウエトク	計
海上機動第一旅団	一、二九一	七一六	八〇三	二、八一〇
第61警備隊分遣隊		四四	五	四九
第952航空隊	八〇	七〇		一五〇
測量隊	五〇			五〇
建設要員	二〇	二八一		三〇一
山九運輸会社	三五	一六五		二〇〇
	一、四七六	一、二七六	八〇八	三、五六〇

海上機動第一旅団の作戦準備

旅団長は、トラック島でマーシャル諸島方面の防衛に関する第四艦隊長官の命令を受領し、これに基づいて1月28日旅団の守備要領を策定し各部に示達した。

その要点は概要次のとおりであった。

一、旅団は各守備島を絶対に確保し、泊地および海軍諸施設を掩護する。

旅団直轄部隊は状況によりブラウン環礁だけでなくマーシャル方面の他の島に対する出動を準備する。

二、各守備隊は概ね一ヶ月で野戦陣地

を完成し、その後工事の増強、一部永久施設の増設に努める。

三、陣地編制および構築に当たっては、四囲に対して防禦できるよう堅固に陣地を構築するが、配備の重点は外海に指向する。

四、敵の砲爆撃に対して損害を減少するため、努めて掩蓋式、洞窟式待避壕を作り、重火器の陣地は同一任務のため四個以上、個人の掩体は七米以上離すこと。

五、防禦方針は、敵を水際に撃滅してその上陸企図を破砕するにある。また敵を側背から攻撃できるよう準備する。

六、昼間は陣地を利用してなるべく損害の減少に努め、夜間攻撃により敵を圧倒する。

旅団長はブラウン島に上陸するや、同島は殆んど無防禦であることを見て、直ちに島内を偵察し、各島に守備兵を派遣するとともに、1月8日メリレン島守備部隊に対し展開命令を発会した。

この命令中、旅団長は、米軍の主攻撃が礁湖内から指向されるものと判断し、拠点を主として礁湖面に準備するよう陣地編制をした。

1月22日旅団長は、さきに教育総監部から発布された「珊瑚島嶼ノ防衛」に基いて、離島防衛の一般的準拠事項について、「離島防禦ニ関スル観察」という参考資料を配布した。その中で米軍の来攻について、「敵の上陸兵力は、最少限度歩兵三ヶ師団と戦車一ヶ師団からなり、これに6隻の空母、4隻の戦艦、4隻の重巡、40隻の駆逐艦および五〇〇〇頓級の輸送船60隻」と、すでに兵力的にもわが方に比べて圧倒的な進攻兵力を予想していた。

したがって、クェゼリンの失陥がほぼ、確定的となった2月5日に発行した「防禦戦闘要領」では、「対上陸戦闘の段階において旅団の運命は決する。この際祖国に殉ずる決意を固め、犠牲的精神を発揮することが必要である……最後の段階においては、皇軍の伝統と旅団の名誉のため捕虜となることを禁ずる。戦闘に堪えない傷病者は自決する」と示した。

旅団はブラウン環礁に到着してから約10日後、持久戦に必要な作戦資材、糧食の補給、自給態勢の準備、人事等の連絡のため副官牧野蕉大尉を内地に派遣したが、同大尉が内地で連絡を終り、トラックに帰着したとき、すでにクェゼリンは玉砕し、ブラウンにも米軍が上陸していた。

またエンチャビ島には多数のセメント、トタン、木材があり、旅団の到着後にも3隻の船が、築城材料をエンチャビ島に揚陸し、各島に分配する予定であったが、その前に米軍の上陸を受けたのであった。

守備部隊は築城に多大の努力を払ったが、食糧の欠乏と気候の不順、時間の不足のため完成に至らなかった。しかし地下に掩体を構築し、防空壕からは坑道で各個掩体に連絡し、各個掩体相互もトンネルで連結されていた。

エニウェトク島は砂地のため、壕は皿のようにしか掘れず、しかも材料も不十分であった。

米軍の上陸準備砲爆撃

ブラウン環礁に対する米軍艦載機による初空襲は、1月31日に行われた。当時同環礁には、前日テニアン島から到着した第七五三航空隊の陸攻9機を合わせて十数機の陸攻があり、30日朝から始まった米機動部隊のマーシャル方面空襲に対し索敵攻撃に当るとともに、ブラウン来襲に備えていた。

米軍艦載機は、〇四〇〇ごろから戦爆連合をもって来襲し、空中退避中のわが陸攻4機は行方不明となり、他は索敵機3機を含め全機地上で大破炎上した。米機動部隊は断続的な攻撃を続け、2月中旬ころには、ブラウン環礁各島の防禦施設はコンクリート地下壕、戦闘指揮所等を除き、地上にあるものは殆んど破壊された。

2月18日からは艦上機による猛烈な準備攻撃が始まり又艦砲も少なくとも二、八〇〇トンの弾丸をエンチャビ島に打ちこんだ。

米軍攻略部隊は2月16日午後、クェゼリンを出撃した。このブラウン上陸部隊はトーマス・ワトソン准将の指揮する約八、〇〇〇名の海兵隊と陸軍であった。輸送船9隻に分乗し、支援の砲撃隊は戦艦3隻、重巡3隻、駆逐艦25隻であった。

エンチャビ島の戦闘

連日の空襲にもかかわらず、これまでの人員の損害は、約40～50名に止まっていた。それも直撃や砲弾の破片によるものは少なく、立木や構築物の倒壊による間接的な原因によるものが多かった。地上に山積していた兵器、弾薬は、殆んど空襲でやられ、地上には目標になるものはなかった。

米軍は2月18日〇四〇〇から、南水道と東水道の掃海を行ない〇六一五頃南水道から礁湖の中に進入した。米軍が機雷に遭遇したのはミクロネシアでは初めてのものであった。

輸送船群は〇九三〇頃指定錨地に到着し、偵察隊をルヂョール島（挿図参照）およびカメリア島、エイリ島に上陸させ、日没前に、ルヂョール島とカメリア島に、山砲と十榴それぞれ12門ずつを揚陸した。

米軍は日本軍の退路を断つため、エンチャビ島の西側のボコン島も占領し、エンチャビ島上陸海岸の偵察や浮標の設置を行なった。

18日夜は一晩中、艦砲、飛行機、砲兵隊からの砲火がエンチャビ島を吹き荒れた。しかし米軍の艦砲は弾道が低伸しているため、平らな島を通り越して、水面に水しぶきをあげることが多かった。日本軍守備部隊はこの砲撃の

合間をぬって、夜間外海側に配備していた山砲等を内海側に移動させ、陣地の補修、増強を実施した。

18日夜、守備部隊は計画に従い、暗夜を利用して防禦配備についた。この日の砲爆撃により、人員に三分の一以上の損害があったようであるが全員の士気は盛んであった。

2月19日は強い俄雨で夜が明けたが間もなく雨は止んだ。〇三〇〇に米軍の一斉砲撃が始まり、最後の20分間は航空攻撃に変わった。米軍上陸用舟艇はこの間に海岸に到着した。時に〇五四四であった。

日本軍守備部隊の火砲の大部は、上陸前の砲爆撃で破壊され、わずかに残った砲と擲弾筒で激しく対舟艇射撃を実施した。間もなく、米海兵第22連隊の総勢三、五〇〇名が上陸を終わった。

日本軍は島の西半部の滑走路付近で、頑強に抵抗したが、米軍が上陸してから約一時間後、突撃ラッパとともに全員突撃を敢行した。

〇七三〇ごろ米軍戦車数台が全島を蹂躙し、守備部隊は、もはや組織的戦闘力を失った。その後は、米軍戦線に潜入したり、隠蔽された横穴や銃眼のある壕から、個々の抵抗を続けるだけであった。

2月19日一三四〇、ワトソン准将はエンチャビ島占領を宣言した。

注　日本軍の戦死者は約一、〇〇〇名、海兵隊は戦死八五名、負傷一六六名であった。

エニウェトク島の戦闘

エンチャビ島は短時間に壊滅したが、メリレン島とエニウエトク両島の守備部隊は頑強な戦闘を実施した。

米軍は最初メリレン島とエニウエトク島には日本軍守備隊がいないか、またはごく少数の兵力が配備されていると判断したようである。

米軍情報将校がエンチャビ島で発見した書類により、初めて両島がそれぞれ一、三四七名と八〇八名の守備隊により防備されていることを知り、急いで両島同時上陸の計画を改め、利用できる全兵力で逐次攻略することに計画を変更した。

エニウエトク島は長さ四、二〇〇米、幅が西端で二二〇米あり北に行くに従って細くなっている全島珊瑚砂の島であった。また同島は、外海に珊瑚礁がある上に磯波が荒いので、上陸には適しなかった。

航空攻撃や艦砲射撃は、米軍が日本守備隊の配備を察知してから激しくなった。守備隊は最初重機銃や軽機銃で応戦していたが、効果がないばかりでなく、かえって所在位置を暴露することになるので守備隊長の命令で対空射撃を中止した。

集積した弾薬は米軍の爆撃で、その附近を歩けないほど誘発し、食糧や兵器も大半は爆破され、また人員の損害も約二〇〇名に達した。

米軍上陸部隊（第27歩兵師団第106歩兵連隊）の第一波は支援砲爆撃の後、2月20日〇六一八に海岸に到着し、後続部隊も続いて上陸した。

日本軍は海岸でわずかな抵抗をしただけであったが、米軍上陸部隊の行動は緩慢で海岸は非常に混乱した。

上陸軍は〇九三〇頃ようやく島を縦断する道路の線を突破して、南方に進出したが、日本軍はいたるところに拠点を占領し、迫撃砲や小火器で米軍の進撃を悩ました。

米軍はさらに予備隊を上陸させ、南に向って攻撃中の第106歩兵連隊第一大隊の東側（外海側）に投入したので、一二五〇頃、ついに、日本軍の陣地は突破された。彼我の夜間戦闘は続行された。

2月21日早朝、わが守備隊40名は海兵大隊の指揮所に突撃を敢行したが、撃退された。米海兵隊は大隊作戦係将校ほか一〇名が戦死した。

衆寡敵せず、南部地区の日本軍陣地が全滅したのは、2月22日であった。

一方この間、北地区に向かった第106歩兵連隊の第3大隊は次第に日本軍を島の北端に圧迫した。

2月21日午後、わが軍守備隊50名は、米軍に対して最後の突撃を敢行した。米軍はこの攻撃を撃退したもののその行動は緩慢で、22日にようやく北部地区の掃討を完了したのであった。

22日一三三〇ハリー、ヒル指揮官はエニウエトク島の占領を宣言した。

メリレン島の戦闘

米軍は既述のとおりエンチャビ島でメリレン島の関係書類を入手した。

米軍の支援砲爆撃がわが守備隊を制圧した後、米上陸軍は、2月21日、東水道の北側のジャプタン島に砲兵を陸揚げし、一八〇〇頃からメリレン島を砲撃した。その後3日間、昼夜連続、空水地から砲爆撃を実施したが、近距離とわが軍の地下施設の利用により、十分な効果を収めることができなかった。米軍は23日〇六〇八上陸を開始した。日本軍は地下に構築した蜘蛛の巣状の堅固な陣地によって勇敢に戦った。

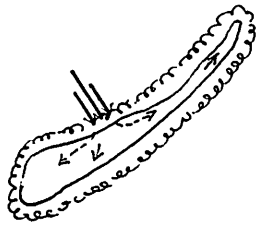
米軍の攻略部隊（第22海兵連隊）は、戦車を第一線とし、その直後に爆破隊と火陥放射機隊を続行させて日本軍陣地を焼き払い、または爆破した。日本軍は速射砲と地雷をもって対抗したが、米軍戦車と徒歩部隊は一〇三〇メリレン島の北端に達し、島の南部も一六三〇までに占領された。

2月23日ワトソン将軍はメリレン島の占領を宣言したが、その後地下壕の日本軍を掃討するために、米軍はエニウェトクの占領で払った損害の約二倍の死傷者を出した。

ブラウン環礁

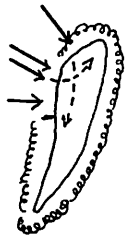
ブラウン礁湖

エンチャビ島
ビーアイツ島(カメリア島)
エベリル島
アネモン島(ファネモン島)
ビイジリ島
ロージオア島
アアランビル島
ビアラアイ島
ルーニット島
ケニエロ島
アニヤアニー島
チニミ島
ジャプタ島(Muti エ.)
東水道
メリレン島(パリー島)
ホコラ・ソプ島
ポコニリュジエン島
ポーコンリータック島
ブラウン島
(エニウェタック島)
南水道
ビキイアン島
ギリーエモン島
リバイオン島
ボコン島
イグレ島
ムイ島
ポーコオルオ島
ポコンポコ島
ポウイリック島
ポコンポ島
ムジカータック島
キリニアレ島
エイリ島
ビコール島
47
57
45
0 5キロ 10キロ



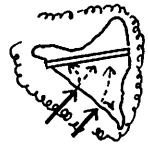
Ⅲ図

ブラウン島
(エニウェタック島)



Ⅱ図

メリレン島



Ⅰ図

エンチャビ島

マーシャル諸島方面作戦日歴

年月日	時刻	記事
18・11・23		内南洋部隊電令作（六九号二三〇〇〇五） 一、邀撃部隊は連合艦隊電令に依る甲支隊の大部を速にPQに輸送すべし 二、24航空戦隊を内南洋部隊航空部隊に編入し、22航空戦隊司令官の指揮下に入る 三、甲支隊を内南洋部隊に編入す 四、22航空戦隊及24航空戦隊を夫々第四二空襲部隊第四四空襲部隊と称し両者を合し内南洋方面部隊航空部隊とす 五、44空襲部隊は準備出来次第逐次ルオットに進出すべし
11・24		連合艦隊電令作第八三〇号 281空を第二艦隊警戒部隊より除き内南洋部隊に編入す
11・24		24航空戦隊の兵力移動計画 一、兵力　531空艦攻約20機、281空艦戦約39機、752空陸攻約44機 二、陸攻隊の行動12月25日千歳発木更津、テニアン、ブラウン経由ルオットに進出の予定
11・26		大本営海軍部一部長→連合艦隊司令長官 ギルバート方面に集中せる敵機動部隊は少くとも同方面敵の拠点概成する迄は之に釘付けさるる算大にして之を捕捉撃滅し得れば爾後敵の新企図は相当長期に亘り大なる制肘を受くべく此の間我は母艦並に基地航空兵力を整備し得て必勝の態勢を確立し得る次第なるを以て此の際為し得る限りの航空兵力を集中して、之が撃滅を図ること喫緊と認むるにつき航空兵力の一部転用を考慮あり度 尚、右の場合南西方面情勢の急変に備うるためには第二航空戦隊の転進を暫く見合わせ、又カルカッタ攻撃は極力陸軍機の活用に依るを可と認む
11・28		連合艦隊電令作第八三六号 南西方面部隊指揮官は23航空戦隊の陸攻約15機をマーシャル方面に派遣し、内南洋部隊指揮官の指揮を受け、作戦に従事せしむべし
12・1	○八三〇 ○九五五	タラワの東南東100浬に航空母艦1、戦艦3、巡洋艦1を発見 マキンの東220浬に運送船6発見。陸攻7を以て攻撃を企図したるも天候不良の為捕捉し得ず
12・2	一〇〇〇 ○八三五 ○九一五 ○九五五	マロエラップにB24、11機来襲我が戦闘機22機を以て邀撃一機撃墜二機撃破す ミレにPBY9機来襲、艦上戦闘機11機を以て邀撃、撃墜二機、撃破一機 タラワの東南東80浬に航空母艦3、戦艦2、巡洋艦3発見、味方使用可能機艦戦52機、陸攻29 オーシャンにB24二機来襲
12・2		内南洋方面部隊電令作八五号 一、22航空戦隊司令官は24航空戦隊進出後成る可く速に22航空戦隊司令部（24航空戦隊の作戦実施に必要なる人員を除く）及755空を率いテニヤンに転進同隊の再建並に訓練に従事すべし 二、24航空戦隊司令官は42空襲部隊マーシャル残留兵力を併せ指揮し、現作戦を続行すべし 三、5特別根拠地司令官は42空襲部隊テニヤン転進部隊の補給休養に関し、22航空戦隊司令官に協力すべし
12・3	一八一〇 一八四〇	モノ島の西30浬に空母4、戦艦2、巡洋艦7、駆逐艦17の敵を発見。陸攻4艦戦11（雷装）艦爆15（爆）艦爆2（照明）陸攻1（触接）艦戦1（電探・偽瞞）を以て攻撃、戦果撃沈空母3、戦艦又は巡洋艦1、撃破戦艦1、巡洋艦1、駆逐艦1、被害未帰還陸攻2、艦戦6、艦爆2 連合艦隊司令長官は邀撃部隊に対する内南洋部隊指揮官の指揮を解き、邀撃部隊にトラック帰投を命すると共に12月5日を以てマーシャル方面派遣中の一航戦戦闘機隊の原隊復帰を下令す
12・4	○六三七 ○八〇五 本日 一七〇〇 一七三〇	アパママの東240浬に戦艦2、巡洋艦2、運送船2出現 マロエラップ、グニニッチ、ミレに各一機宛来襲 我が陸攻10タラワ夜間攻撃 連合艦隊電令作第七八〇号

年月日	時刻	記事
18・12・5	○四五五	一、丙作戦第三法終結Z作戦部隊の支作戦を解く 二、内南洋方面部隊は現作戦を続行すべし 三、先遣部隊は適宜兵力を以てギルバート方面に対する敵の増援補給を遮断すべし
12・5	○七○○	電探はルオットの40度80粁に敵機の大編隊来襲を捕捉我が艦戦27激撃、戦果　撃墜9機、被害　未帰還16機、大破3機、被弾陸攻10、艦戦10、地上焼失艦戦12
12・5	○四五五	敵小型機50機エビゼ水上基地、クェゼリン通信隊及在泊艦船爆撃
12・5	一○○○	敵機14機撃墜（952空水偵被害大）
12・5	一二○○	第二次敵小型機30機我が飛行場及び陣地爆撃
12・5	○七○○	ルオット島の45度170浬に空母2、巡洋艦3を発見
12・5	○八三○	連合艦隊電令作により552空を内南洋方面部隊に復帰せしめらる
12・5	○八三○	ミレに大型機40機、小型機40機来襲
12・5	一○○○	オーシャン及ナウルに大型機数機、タロアに小型機30機来襲、敵小型機3機撃墜
		敵機動部隊マーシャル来襲時の内南洋部隊の綜合戦果被害 戦果　航空母艦1、巡洋艦1撃沈、航空母艦1、巡洋艦1撃破、敵機撃墜24（内不確実6） 被害　自爆艦上戦闘機16、未帰還艦上戦闘機2、艦上攻撃機6、水上偵察機1、大破炎上艦上戦闘機16、艦上攻撃機3、水上偵察機2、水上戦闘機12 六通送信所大部破壊 沈没　朝興丸、立山丸、朝風丸、第七拓南丸 被弾　長良、五十鈴、第二号永興丸、第十八御影丸 ミレ、グリニッチに大型機各1機宛来襲 ミレに大型機3機来襲 マロエラップにB24 9機来襲 ミレに大型機1機来襲 第三艦隊派遣の艦攻隊派遣の艦攻隊16機カビエン到着 艦上戦闘機、艦上爆撃機計250機ナウルに来襲、撃墜5機（1機不確実） 巡洋艦6、駆逐艦3、ナウル砲撃（駆逐艦1・15糎三弾命中中破）、我方の被害、戦死39、重軽傷17、破壊　探照灯1、高角砲1、機銃2 我索敵機はナウルの北北東30浬に大部隊発見報告後未帰還、ミレに大型機14、ヤルートに大型機21、オーシャンに大型機機1来襲 オーシャンに大型機1機、ミレに大型機20機来襲、大型機4機撃墜、被害、艦上戦闘機1機大破 ナウルにB24 2機来襲 内南洋部隊指揮官警戒下命 14戦隊五十鈴トラック入港 陸攻11機を以てタラワ攻撃内3機攻撃、他は天候不良のため引返す 陸攻8機を以てタラワ、マキン攻撃、未帰還1機 ウォッゼに大型機10、ルオットに大型機10来襲 タラワの東350浬に航空母艦1、駆逐艦3発見 タラワの東15浬に航空母艦、巡洋艦1西航 552空を第11航空艦隊に編入す 陸攻4機マキン攻撃 マロエラップに飛行艇20来襲、艦上戦闘機11にて邀撃、撃墜1機、撃破4機、被害戦死3、焼失戦上戦闘機1、使用不能25粍機銃2、探照灯1 ヤルートに大型機1来襲 マーカス岬の南東6浬に運送船5、駆逐艦5北上中を発見 敵はマーカス岬を砲撃 南東方面部隊指揮官は邀撃作戦部署発動を下令 艦上戦闘機56、艦上爆撃機6を以てマーカス岬の運送船3、駆逐艦6、巡洋艦1、海虎8を攻撃、戦果撃沈運送船1、海虎1、炎上巡洋艦1、上陸前の舟艇の約半数紛砕 連合艦隊電令作第八六○号 機動部隊指揮官は瑞鶴艦上戦闘機をRR（?）に派遣北東方面部隊指揮官の指揮下に入らしむべし マロエラップに大型機20機来襲 ウォッゼに大型機8機来襲、被害大破倉庫4、中破倉庫2、小破陸軍野砲 マロエラップに大型機1機来襲、被害重軽傷4 ウォッゼに大型機10機来襲、電信所直撃にて破壊、戦死7、戦傷24 連合艦隊はトラック方面より艦上戦闘機20、艦上爆撃機36を南東方面に増勢発令
12・6	○九一○	
12・7	○九三一	
12・8	○一二五	
12・9	○三○○	
12・10	○八○○	
12・12	○八○○	
	夜	
12・13	○八四五	
12・14	○八四六	
12・15	○八三○	
	○六三○	
	○七五○	
	○二○○	
	○九○四	
	一三○○	
	○二○○	
	○四二○	
	○五三○	
	○七○○	
12・16	○六○四	
	○六一七	
	○九○二	
	一四四五	
12・17		

年月日	時刻	記事
18・12・18		（マーカス岬方面の戦況活潑、我は空襲を激化しつつあり）マーシャル方面敵潜の状況その他に鑑み、敵はナウル、オーシャ方面に対し策動の算あるを以て内南洋部隊指揮官は第一警戒配備を下令す
12・19	○七五五	ミレに大型機一機来襲
	○三〇〇	我陸攻2機タラワ攻撃
	○四〇五	B24 2機、小型機4機ミレに来襲
	○八一〇	小型機の大編隊ミレに来襲
	○四〇〇	ミレに大型機17機、小型機4機来襲
	一〇〇〇	敵機一機クェゼリンに来襲、昭栄丸火災沈没
	二二〇〇	内南洋部隊第二警戒配備となす
12・20	○七二〇	ミレに小型機10機来襲
	○八二七	ミレに大型機19機来襲
	一三〇〇	マロエラップに大型機11機来襲
	○〇一〇	大型機6機を以てマキン攻撃
	一四二〇	B24 12機マロエラップに来襲
	一三一五	B24 8機マロエラップに来襲、撃墜2機、被害格納庫一、爆弾庫一焼失
12・21	○七四八	
	○八四五	B24 8機マロエラップに来襲
	一〇四七	大型機2機マロエラップに来襲
	一一三〇	マジュロに大型機一機来襲
	○七一五	タロアに大型機16機来襲、艦上戦闘機20機にて邀撃、撃墜3機、被害　未帰還艦上戦闘機一、大破艦上戦闘機2、焼失飛行機3機
	○八五五	
12・22	一〇三五	ルオットにB24 5機来襲、艦上戦闘機11にて邀撃
	一一〇〇	クェゼリンに大型機3機来襲
12・23	一〇四五	ミレに艦上戦闘機、艦上爆撃機計30機来襲、艦上戦闘機9にて邀撃、撃墜一機、被害第二南海丸沈没、被弾艦上戦闘機一機、燃料20缶焼失
12・24	○六一七	ミレに艦上戦闘機、艦上爆撃機計20機来襲、艦上戦闘機8機にて邀撃、戦果、撃墜艦上戦闘機一機、未帰還戦闘機2機
	○七〇〇	クェゼリンB24 16機来襲、戦果　撃墜一機、被害　沈没曳船一、小艇5、火災搗坐乾祥丸大破、戦死傷22名、燃料一、〇〇〇屯焼失
	一四二〇	ウォッゼにB25 6機来襲
	一六四〇	我陸攻6機、タラワ攻撃
	○二四〇	

年月日	時刻	記事
12・25	一六三〇	我陸攻7機、マキン攻撃
	○一三〇	我艦攻3機、マキン攻撃
	○三〇〇	我艦攻3機、艦戦33機マキン攻撃
12・26	○六一五	敵は有力なる航空機の支援下に、ニューブリテン西北部及ボルゲン湾及タワレ方面に侵入、〇六〇〇揚陸開始、第二航空戦隊戦闘機36機トラックよりカビエン着
	○五二五	ミレに大型機3機、艦上戦闘機4機来襲
12・27	一二五	ヤルートに小型機数機来襲
	一三〇〇	ウォッゼにB24 16機来襲、艦上戦闘機16機来襲、艦上戦闘機6機邀撃
	一二二五	
	一三二〇	ミレに艦上戦闘機一機来襲
12・28	○四四一	マキン、タラワに対し大型機一機宛を以て攻撃
	一六三〇	ナウルにB25 4機来襲
12・29	○二四五	マロエラップに大型機27来襲、戦果　撃墜3機、撃破一機、被害戦死一、戦傷25
	○七四〇	ミレに艦上爆撃機22機来襲
	○四〇五	クェゼリンに大型機3機来襲、戦果　撃墜一機、被害　爆弾倉庫2全壊其他3棟半壊
	一一一	ヤルートにB29一機来襲
	一三〇五	マキンに陸攻4機来襲
	○九五〇	ミレに小型機8機来襲
12・30	一一一〇	ミレ艦上戦闘機、艦上爆撃機40機来襲
	一六七九	ヤルートに小型機10、大型機数機来襲
	一〇六四	敵機動部隊の飛行機約100機カビエンに来襲
	一三二八	マロエラップに大型機4機来襲
	一三三五	ミレに艦上戦闘機18機来襲
12・31	一一〇五	クェゼリンに大型機16機来襲
	一一〇八	グリーンニッチに大型機一機来襲
	一八五〇	マロエラップに大型機9機来襲
19・1・1	一一三〇	ウジランに大型機2機来襲
	一八四〇	ナウルに大型機一機来襲
	一五〇三	モートロックに大型機一機来襲
1・2	○九二七	ラボールに機動部隊飛行機22機来襲
	一一三〇	カビエンに敵機動部隊飛行機70機来襲、敵は戊二号輸送隊（妙
1・3	○七五〇	
	○七五五	
	○八〇三	
	○八一三	
	○九二五	
	一〇五七	
	一三二〇	
1・4	一一一〇	
	○七一〇	

年月日	時刻	記事
		高、羽黒、利根、駆逐艦2隻）を発見せずステフェン水道に来着せる22駆に攻撃を集中被害文月浸水若干、皐月船体機関に相当の被害を受く
	〇八〇〇	ミレに艦上戦闘機、艦上爆撃機計50機来襲
	〇〇八五九	ヤルートに大型機数機来襲
	一〇九二〇	マロエラップに大型機7機来襲
	六四七	我陸攻2機マキンを攻撃
	一七三五	我陸攻一機タラワを攻撃
	一八三〇	我陸攻6機アパママを攻撃
19・1・5	一四三〇	ミレに小型機編隊来襲
	一六三八	ルオットに大型機2機来襲
1・6	一一八四五〇	ヤルートに中型機2機来襲
	一一五〇三	マロエラップに大型機3機来襲
1・7	二二三三一	ウォッゼに大型機12機来襲、被害　倉庫、害舎8棟大破炎上、陸戦兵器若干焼失
	二九四〇三	
	二三〇四	
1・8	〇七四八	ヤルートに大型機30機来襲
	一六五〇	我陸攻2機を以てタラワ攻撃
1・9	二一三〇	ルオットに大型機7機来襲、被害　艦上戦闘機3機炎上
	〇八二〇	ヤルートに中型機2機来襲
	一二三〇	ミレに艦上戦闘機4、中型機2来襲
1・10	二二三五	ミレに艦上戦闘機4機来襲
1・11	一二四四	連合艦隊電令作第八九三号
	二一一二	北東方面部隊及内南洋部隊各指揮官は情況許す限り飛行艇隊の大部を以て夫々本土東方海面及マリアナ諸島海域に於ける海上護衛に関し海上護衛部隊に協力すべし
1・12	一七〇〇	陸攻2機を以てアパママ、陸攻各一機を以てタラワ及マキンを攻撃
	二〇二二	マロエラップに敵中型機3機、大型機10機来襲、被害　艦上戦闘機2機炎上、艦上戦闘機3機、陸上攻撃機一機大破、艦上戦闘機5機中破、探照灯一使用不能、倉庫3炎上
	一八三〇	クェゼリンに大型機9機、B24 9機来襲、生田丸沈没、戦死16、戦傷54
	二二一八	ミレにB25 9機来襲、我が艦上戦闘機20機を以て邀撃、戦果　艦上戦闘機一撃破、被害　大破艦上戦闘機一
	〇九四五	
	一五二〇	

年月日	時刻	記事
		マロエラップにB24 9機、飛行艇一来襲
1・13	一五二〇	我陸攻2機をもってタラワ攻撃
	二二三五	ミレに艦上戦闘機10、艦上爆撃機30来襲
	二三三五	クェゼリンに大型飛行機一機来襲
	一一〇〇	ミレに敵艦上戦闘機、艦上爆撃機計20数機来襲
1・14	一一三三	ウォッゼにB25 9機来襲、戦果　撃墜2機（内不確実一）被害
	〇七二〇	沈没、監視艇一隻、大破日栄丸
	一五一五	ルオットに大型機7機来襲
1・15	〇〇一〇	ウォッゼにB25 3機来襲
	〇〇二〇〇	マロエラップにB25 12機来襲、戦果　撃墜一機、被害　大破中攻3機
	〇三四三	マロエラップに敵大型機10数機来襲、戦果　撃墜一機、被害　宿舎二棟中破
	一二〇〇	我陸攻8機を以てタラワ、マキン攻撃
1・16	一二四〇	ミレに艦上戦闘機、艦上爆撃機計50機来襲
1・17	夜	ミレ基地より帰還中の陸攻4機は敵艦上戦闘機4機と交戦
	〇八二七	ミレにP39 4機来襲
	早朝	ミレにB25 10機来襲
1・18	〇六五三	クサイに大型機17機来襲
	一一二六	我陸攻3機タラワ攻撃
	〇八一五	南東方面実動機数
1・19	一七〇〇	
	一三〇〇	

艦上戦闘機	80	
艦上爆撃機	15	
艦上攻撃機	11	
陸上攻撃機	32	
上記中テニアン方面で訓練中のものを含む		
夜間戦闘機	4	
偵察機	4	
水上偵察機	20	
合計	166	

尚、搭乗員約3割罹病の為作業参加不能

ヤルートに艦上爆撃機34機来襲

ミレにB25 12機来襲、戦果　撃墜一、被害　戦死一、中破探照灯2

ミレにB25 34機来襲

ウォッゼに機種機数不明10回来襲

敵側ラヂオ放送、ハルセー艦隊参謀長談「近く展開さるる大規模な略戦に於て、ラボール及びカビエンを占領せん、日本軍は意外な客に意外な時に見舞はるることとなるべし」と

マーシャル諸島方面作戦日歴

年月日	時刻	記事
19・1・21	〇八二四	ウォッゼに中型機2機来襲
	一二〇九	ミレにP38 4機来襲
1・22	〇三四四	ミレにB—25 3機来襲
	〇六四八	ヤルートに小型機大編隊来襲
	一〇一七	マロエラップに大型機12機来襲
	〇〇二四	ルオットに大型機10数機来襲
	一一〇八	ミレにB—25 9機来襲
	九八二四	艦上爆撃機2機を以てタラワ攻撃
	一二一五	南東方面艦隊は南東方面へ第2航空戦隊進出に伴い第26航空戦隊
	八〇八	を後退せしめ、第204空其の他部隊をトラックに移動し練成再建す
1・23	〇八五〇	ることに決定す
	〇〇九	ミレにP—39 4機来襲
	〇〇三	ウォッゼにB—25 9機来襲、被害　戦死2、燃料220罐焼失
	一〇九〇	マロエラップにB—25 12機来襲、戦果　撃墜3
	五五四	ルオットに大型機10機来襲
	〇〇〇	タラワの東方250浬に輸送船9、西行中を発見陸攻3機を以て攻撃
1・24	〇七四〇	を行いたるも目標を発見せず
	〇八	マロエラップにB25 31機来襲、被害大破艦上戦闘機1機、陸上攻
	〇一〇	撃機1、兵舎2棟破壊
	九五二	ヤルートに大型機1機来襲
	〇七四七	ミレにB—29 1機来襲
	一四四〇	ウォッゼに小型機10数機及びB—29約20機来襲、被害　戦死7、
	一六三〇	負傷1、大破艦上攻撃機1、速射砲1、機銃1
1・25	一二二五	ウォッゼに中型機8機来襲
	一四〇〇	第二航空戦隊の大部（旗艦、艦上戦闘機62、艦上爆撃機18、艦上
		攻撃機18）ラボールに進出、第2航空戦隊司令官は第26航空戦隊
		に代り第6空襲部隊の指揮を継承す
	一四四五	マロエラップにB—25 9機来襲
	一七九五	マロエラップにB—25延15機来襲
	一四五四	マロエラップにB—25 9機来襲、我艦上戦闘機21機を以て邀撃、
	八五〇〇	戦果、撃墜3機、被害、艦上戦闘機3、陸上攻撃機3炎上
19・1・26	二三〇五	ボナペ北方海面に於て涼風は輸送護衛中敵潜の雷撃を受け沈没
	〇六四二	ミレに艦上戦闘機、艦上爆撃機計30機来襲、戦果　撃墜艦上戦闘
		機2機
		26航空戦隊は第2航空戦隊と交代を了し其の大部はトラックに転
		進、戦力再建を開始（第26航空戦隊司令官は将旗を竹島に掲ぐ）
	一三五〇	マロエラップにB—25 9機来襲
	〇四三五	北緯9度30分東経157度50分に於て興津丸敵潜の雷撃を受け破損
	一六〇〇	クェゼリンにB—24 15機来襲、被害　戦死傷18、電探使用不能、
1・27	一一二〇	552空は内南洋部隊に編入発令せらる
	一五〇五	タロアにB25 9機来襲
	一一二五	ミレにB25 1機来襲
		マロエラップにB25 9機、P40 12機来襲、我艦上戦闘機21機にて
1・28	〇七二六	邀撃、戦果、P40 3機
	一一三七	ナウルにB25 6機来襲
	一三〇七	ウォッゼにB—25 3機来襲
	一四四七	ミレに戦闘機爆撃機29機来襲
	一五四五	ロンゴラップにB—24 1機来襲
		ヤルートに中型機1機来襲
	一六三四	マロエラップにB—25 4機来襲
	一四二五	ウートロックに大型機1機来襲
	一一五五	ロンゴラップにB—24 1機来襲
	一三〇〇	マロエラップにB—25 7機、B—24 2機来襲、戦果B—25 1機撃墜
	一一三六	ウォッゼに大型機3機来襲
1・29	一九二二	ウォッゼに大型機5機来襲
	一〇〇五	マーシャル諸島方面に敵機動部隊来襲、ルオット、クェゼリン、
	二五〇〇	ウォッゼ及びマロエラップに各戦爆連合40乃至50機を以て数次に
	二一四〇	亘り来襲交戦中
	早朝	聯合艦隊は丙作戦第二法を下令、マーシャル防備部隊は敵上陸に
1・30	〇五二五	関し警戒を厳にしつつあり

年月日	時刻	記事
19・1・30	○六四五	偵電令作第六七号
		一、丙作戦第二法用意
		主隊　敦島部隊　邀撃部隊の出撃は特令す
		二、敦島部隊は転進を直ちに準備し、同部隊より、7SS 10SSを除き邀撃部隊に復帰す
	○八三○	マロエラップの西方八〇浬に空母を含む敵部隊を発見
	一一五五	タロアを敵巡洋艦1隻、駆逐艦2隻砲撃
	○八一五	ナウル、オーシャン、クサイ第一警戒配備
	○四五○	ルオットに飛行機70機来襲
	○○五三	ルオットに飛行機30機来襲
	○○三三	クェゼリンに敵機来襲
	○四四五	クェゼリンに飛行機48機来襲
	○五二三	クェゼリンに敵機20機来襲
	○○九二	マロエラップに敵機数機来襲
	○四○○	マロエラップに敵機50機来襲
	○二五	ウォッゼに延大型機2機、小型機130機来襲
	○○五四	マロエラップ敵機31機来襲
	○四三五	ウォッゼに対し敵巡洋艦1隻、駆逐艦2隻砲撃を行う
	○八八五	ミレに対し敵P―39 12機来襲
	○○九九	マロエラップの地上砲火に依り敵巡洋艦を撃破
	一○一五	ウォッゼに於ては駆逐艦2隻撃沈
	○四一三	ラボール方面には艦上戦闘機、艦上爆撃機延三○○機2回に亘り空襲
	○四一○	我が艦上戦闘機95機を以て邀撃、戦果　56機撃墜
	夜六五五一	第14戦隊（那珂）陸軍輸送のためポナペに進出、在ポナペ陸軍甲支隊の二ケ中隊は出動準備を行う（マロエラップ、ウォッゼ配備の予定）
1・31	○七五五	七五五空に対しウェーキ進出を命ず（○八三○に至り中止）
	○九○○	敵はグリーン島を砲撃制圧の後兵力約五○○を以て上陸を開始す
	○八二○	ラボールに敵機約180機来襲
		マロエラップ、ウォッゼ、クェゼリン、大鳥島空襲或は艦砲射撃を加う
		エビゼ（クェゼリン島の北方）に敵上陸の疑あり
	一○○○	エビゼ通信連絡絶えたるも今朝に至りクェゼリンと連絡し、同島は確保中なること判明
19・2・1	○五三○	ルオットに敵上陸せるものの如きも通信を連絡絶え詳細不明
	○七○○	大海令第27号「第一航空艦隊は其の主力を以て二月中旬以降逐次内南洋及非島方面に進出待機し併せて、同方面に於ける聯合艦隊の作戦に協力すべし」
		早朝より敵はウォッゼ、マロエラップに小型機を以て連続空襲を加えると共に機動部隊の空襲及び戦艦を含む約17隻の艦艇よりの砲撃支援下に輸送船45隻を以ってクェゼリンに対し上陸開始
	○七一一	第四艦隊旗艦より甲支隊の那珂乗艦時機は特令す
	○七三○	クェゼリン島南砲台附近に敵上陸を企図し我はこれを反撃々退す
	早朝	チョイセル、ブカ敵駆逐艦2隻乃至3隻の砲撃を受く
	一○○	マロエラップは敵の艦砲射撃を受くるも陸上より反撃敵巡洋艦1隻火災
	一三○○	ウォッゼ敵艦砲射撃を受く
	一一三○	エニブージ島（クェゼリン島の北西約二浬）に敵上陸
	一八○○	クェゼリン島守備隊は敵の熾烈なる砲爆撃により全砲台破壊せられたるも人員の損害は約五分の一程度、士気旺盛
	二二○四	第四艦隊旗艦よりポナペ甲支隊の進出準備を取止む、第14戦隊はトラックに帰投せよ
	○○○○頃	クェゼリン島礁内に運送船17、礁外に約運送船10、戦艦4、巡洋艦4、駆逐艦4は本島を取巻き砲撃続行中
		本日敵機来襲状況マロエラップ19、ウォッゼ50以上、ブラウン約60、ヤルート約7、ミレ20
		二月一日に於ける内南洋方面戦況概観
		トラック方面（聯合艦隊、第四艦隊）
		○七一一　4艦隊陸兵の那珂乗艦時機は特令す
		二二○四　ポナペ甲支隊の進出準備を取止む、14戦隊はトラックに帰投すべし
		クェゼリン方面
		○四○○　戦艦以下17隻、運送船16隻
		○四五○　戦艦以下17隻、運送船45隻
		○七○○　敵は上陸を開始す、エビゼ31日一○○二以後通信なし
		一四○○発信　○七三○敵の位置は礁外より南砲台附近に上陸

年月日	時刻	記事
		せるも之を撃退す、爆撃により全砲台破壊、人員損傷1のみなり、士気旺盛昏って敵を撃滅す
19・2・1		一八〇〇　戦艦5、巡洋艦5、駆逐艦10、運送船14礁外にあり
		ルオット方面
		31日〇六三〇　以後通信なし
		マロエラップ方面
		〇五一〇　艦上戦闘機艦上爆撃機19機来襲
		一一〇六　敵艦は緩徐なる砲撃中
		一四一三　敵は砲撃を止む
		一六三四　〇三三〇迄に滑走路完成の見込、燃料三、二〇〇缶
		爆弾八〇番二六五、二五番六一七、〇六番、一、一五〇
		一八一〇　巡洋艦更に火災を生ぜしむ
		ウォッゼ方面
		〇五二〇　一次戦闘機爆撃機来襲
		〇六四五　二次戦闘機爆撃機来襲
		〇九〇〇　三次約50機
		一一一五　巡洋艦一隻、駆逐艦一隻を以て艦砲射撃を開始す
		一三五〇　燃料約二、六〇〇缶、爆弾六番二、〇〇〇、二五番六〇〇、八〇番一〇〇
		ブラウン方面
		〇八二〇　敵飛行機見ゆ
		一七三〇　艦上機約60機来襲、戦果なし、飛行場施設破壊、小型機使用可能
		ヤルート方面
		〇九四六　敵機来襲
		一〇〇〇　敵小型機4機来襲被害なし
		一三〇九　敵艦上機2機来襲
		一六〇〇　敵中型機1機来襲
		ミレ方面
		〇八四〇　敵小型機約20機来襲、撃墜1機、A滑走路明朝迄にC滑走路本日中に修理完成の見込
		ウェーキ方面
		一三一〇　飛行場使用可能
		其他方面

年月日	時刻	記事
19・2・2		クサイ島及ウジラン島に各数機宛来襲
		二月二日に於ける内南洋方面戦況概観
		ルオット方面不明
		クェゼリン方面
		〇六四五　運送船17礁内に進入、礁外に運送船20戦艦4、巡洋艦2、駆逐艦4本島に上陸す、守備隊一、九〇〇其他二、二〇〇名
		ウォッゼ方面
		巡洋艦2、駆逐艦2来襲砲撃を行う
		マロエラップ方面
		巡洋艦1、駆逐艦1、艦上爆撃機2来襲砲爆撃を行う
		ブラウン方面
		〇三五五より一四一五の間に艦上戦闘機、艦上爆撃機約70機来襲（エンチャビ53機、メリレン5機）
		一六五五　運送船8隻見ゆ
		ミレ方面
		P—三八　4機来襲
		ヤルート方面
		大型機数機来襲
		ナウル方面
		B—25　5機来襲
2・3	〇九〇四	聯合艦隊電令作第九三三号
		北東方面部隊指揮官は第八〇一空二式大艇全力を明三日トラックに到着する如く派遣すべし、派遣期間約五日間の予定
		二月三日に於ける内南洋方面戦況概観
		ルオット、クェゼリン方面
		通信杜絶戦況不明
		ウォッゼ方面
		〇二〇〇　敵巡洋艦1沈没（見張報告）
		一一三〇より一三三〇迄巡洋艦1、駆逐艦3の砲撃を受く
		夜間呂三九潜を以て所在搭乗員を収容の計画なりしも失敗す
		ブラウン方面
		小型機の空襲を受く。礁内外未だ敵を見ざるも数ヵ所炎上中
		ミレ方面

年月日	時刻	記事
		午前艦上戦闘機一、艦上爆撃機約25機、B—24 4機来襲
		ヤルート方面
		2機来襲
		ナウル方面
		B—25、2機来襲
		敵機約220機来襲。艦上戦闘機50機を以て邀撃、戦果撃墜約15機
		グリーン島に対し77名を以て逆上陸に成功
19・2・4	一〇〇〇	二月四日に於ける内南洋方面　戦況概観
	一二〇〇	クェゼリン、ルオット方面
	〇三〇〇	通信杜絶、情況不詳
	〇〇〇〇	ウォッゼ方面
		〇五五〇より〇七三〇迄巡洋艦一、駆逐艦2砲撃を行う、B—24 3機来襲
		夜呂三九に依る搭乗員収容を試みたるも再度失敗す
		マロエラップ方面
		一一四五より一三一五迄巡洋艦一、駆逐艦2の砲撃を受けたるも被害軽微
		ブラウン方面
		〇五三〇艦上爆撃機30機来襲（飛行場は二日以後引続き使用不能）
		ミレ方面
		午前艦上戦闘機8機来襲
		ヤルート方面
		B—25、8機来襲、在泊中の五隆丸（一、九〇〇頃）船体に亀裂を生ず
		敵機143機二次に亘り来襲、艦上戦闘機47機を以て邀撃
		トラックにB—24、一機来襲（偵察）
	朝	敵大型機十数機武蔵湾、摺鉢湾地区及び占守島方面来襲次で約一時間に亘り駆逐艦6隻の砲撃を受く北東方面部隊指揮官は警戒配備を発令す
	二一三〇	飛行艇6、陸上攻撃機2を以てウォッゼ、マロエラップ及びブラウン所在飛行機搭乗員一二〇名をトラックに収容（同上機のうちマロエラップを発進せる陸上攻撃機一機は、二〇一〇クェゼリンの一〇〇度五〇浬に於て敵航空母艦2隻、駆逐艦一隻を発見す）
2・5	夜	

年月日	時刻	記事
		ラバウルに対し敵機200機来襲、艦上戦闘機60機を以て邀撃、撃墜40機、本日の敵機来襲状況
		ブラウン（戦爆四〇、艇一）マロエラップ（大型九）ウォッゼ（大型四二）ミレ（大型九）ヤルート（大型六）大鳥島（六～八）クサイ（二）ナウル（二）
		敵は次の公表を行う
		「米軍は日本軍の熾烈なる抵抗を排除しルオットを三日、クェゼリン及びエビゼを今朝完全占領せり」
		クェゼリン、ルオット守備部隊は極めて少数の工員を除き全員玉砕せるものと認む
		海軍守備部隊次の通り
		クェゼリン、エビゼその他
		第六根拠地隊司令官秋山少将以下三、四三〇名右の中には海軍大尉候爵音羽正彦を含む
		「ルオット第二四航空戦隊司令官山田少将以下二、五四〇名」
19・2・6	朝	マロエラップに巡洋艦一、駆逐艦2来襲砲撃
		ウェーキに兵力不詳の敵来襲砲撃
		ミレに約40機来襲
		ヤルートに艦上戦闘機12機来襲
		マロエラップは七日以降小型機に依る空襲及び艦砲射撃を断続的に受けつつあり（本日の来襲機延36機）
2・7	一〇八〇	以降約一時間半ウォッゼに対し巡洋艦一、駆逐艦2、砲撃を行う（一七三〇以降〇二三〇まで一時間毎に砲撃を受く）
	二〇二一	二月九日内南洋方面戦況
	〇〇二六	マロエラップ方面
	一四二五	一〇三〇頃より約一時間半巡洋艦2、駆逐艦3の砲撃を受く、午後駆逐艦一同島の周辺を遊弋、一八四〇以降約六時間右駆逐艦の砲撃を受く、この間敵小型、大型機十数機来襲す
		ウォッゼ方面
2・8	〇六〇三	敵機の執拗なる攻撃を受く夜六回に亘り駆逐艦一の砲撃を受く
		ウェーキ方面
		二一〇〇頃大型機8機来襲同時刻頃敵駆逐艦の攻撃を受く
		ミレ、ヤルート方面にも小型機来襲す
2・9	〇七二〇	ラバウルに敵約214機来襲

マーシャル諸島方面作戦日歴

年月日	時刻	記事
19・2・9		聯合艦隊電令作九四〇号 先遣部隊指揮官は適宜の潜水艦を以てマーシャル方面補給に関し内南洋部隊指揮官に協力すべし
2・10	○八四○	ウォッゼに巡洋艦一、駆逐艦3来襲、約一時間に亘り砲撃（一七四〇以降更に砲撃を受く）
	一七三○ ○三五○ 一一○○	マロエラップに駆逐艦一来襲砲撃を受く ヤルートに艦上戦闘機40機来襲
2・11	○五○○	マロエラップ西方十浬附近に特設航空母艦一隻、駆逐艦2隻を認む
	○七○六 ○八二八	マロエラップに巡洋艦2、駆逐艦3、来襲砲撃次でB—258機の銃爆撃を受く
	夜	駆逐艦一マロエラップに対し約六時間に亘り射撃を行う
	○九五○	ウォッゼ　B—259機来襲
2・12		本日ラバウル、カビエン方面来襲機約150機 敵の航空攻撃はブラウン及びミレに集中せらる（各約30機） ウォッゼに対し巡洋艦一、駆逐艦3約一時間に亘り砲撃
	朝	ブラウン沖に巡洋艦一隻出現
	午後	本日もブラウン、ミレに対し各戦爆聯合約30機来襲
2・13		大艇6機を以てルオットを爆撃各所に火災発生を認む
	未明	マロエラップに巡洋艦一、駆逐艦3約一時間に亘り来襲砲撃
	一一三○	グリーン島礁内に巡洋艦一、駆逐艦3、運送船15入泊中
2・15	朝	敵グリーン島に上陸開始
	○五○○	ウォッゼ、マロエラップ、ポナペ、ブラウン、ミレ等に対し依然爆撃を加うると共にウォッゼ、マロエラップに対しては巡洋艦、駆逐艦各一隻を以て昼夜間歇的に砲撃を加う
19・2・16	午後	ポナペに対し大型機10数機にて二回に亘り来襲同島に対する最初の集団攻撃を行う 聯合艦隊司令部旗艦武蔵その他を率い横須賀入港、中央と作戦要務打合、二十一日パラオ方面出撃の予定 第一艦隊（長門、扶桑）パラオ発昭南に回航、第二艦隊パラオ在泊、第三艦隊（第一航空艦隊）昭南に於て訓練中

年月日	時刻	記事
2・17	○八二○	マロエラップに昼間巡洋艦2、駆逐艦2来襲、砲撃夜間駆逐艦一、四次に亘り砲撃
	一六四七	南東方面艦隊はトラック残留中の第二航空艦隊艦上攻撃機全兵力に対し、ラバウル進出を発令す
	一一三○ 一二三○ ○四一五	阿賀野は追風及び第二十八駆潜艇を伴いトラックより佐世保に回航中、トラックの北方160浬附近に於て敵潜水艦の雷撃を受く ウォッゼ巡洋艦2、駆逐艦3に砲撃せらる 電探に依り敵機の近接を探知トラック所在天山6機、艦上戦闘機40発進索敵並びに邀撃配備に就く
	○七○○	頃索敵機はトラックの四五度九〇浬に航空母艦2隻、戦艦又は巡洋艦4隻、駆逐艦10隻、運送船5隻よりなる機動部隊を発見針路五〇度（二六航戦五五二空飛行機に依り）
	○九一五	敵空母攻撃のため艦上戦闘機8機（内4機爆装）発進敵を見ず トラック北東方に三群より成る敵機動部隊出現、早朝よりトラックは艦載機延約200機の空襲を受く。在テニアン、トラック航空兵力を以て敵機動部隊を攻撃 昼間二六航空戦隊中攻隊の攻撃に依り巡洋艦一隻撃沈 夜間二二航空戦隊中攻隊（在テニアン）の攻撃に依り巡洋艦一撃沈（魚雷一本命中） 爆装戦斗機に依り敵航空母艦の攻撃を企図せるも発見せず敵戦艦に対し攻撃効果なし
19・2・17	一六二二	聯合艦隊電令作九四八号一七一六二二番電 第一一航空艦隊、第二戦隊の移動可能航空兵力を内南洋部隊に編入速に進出せよ
	一六二五	聯合艦隊電令作九四九号 一、五一潜水隊を先遣部隊に編入 二、邀撃部隊機宜待機 トラック空襲に依る我が被害（今迄に判明せるもの） 大破航空廠施設、保管中の飛行機約80機焼失、約十数機破損（飛行機未帰還、地上喪失大中破合計約一八〇機）死傷者四、病収容中のもの約六〇〇名、炎上物件重油タンク三（重油一万

年月日	時刻	目標	所属	被害状況	記事
					三千屯）糧食二〇〇屯 飛行場及び艦船の被害左の通
各飛行場	4	F		何れも相当の被害ありしも其都度復旧使用差支なし	
那珂	14	戦隊		一二三〇頃トラックの南西45浬附近に於て艦橋より前部を失い発煙中詳細不明	
明石（工作艦）	4	聯合艦隊附属	艦隊	五〇〇瓩爆弾一発命中せるも不発至近弾12、被害軽微死傷者10名	
時雨	27	駆逐隊		二、三番砲破壊二号缶使用不能爆雷庫浸水、死傷者36名、パラオに向け航行中	
春雨	〃			被害軽微明石に合同パラオに回航の予定	
舞風	10	4駆隊戦隊		被爆機械室浸水航行不能（北水道外）（沈没）	
秋風	11	航空艦		大破	
追風		隊		沈没	
大刀風		附属		死者多数所在不詳（沈没）	
文月	22	駆		魚雷一命中、沈没の虞あり死傷者30名、トラック環礁内にあり。	
	2	水戦		（沈没）	
香取	6	旗艦	艦隊	被爆大火災中（北水道外）（後沈没認定）	
赤城丸	5	艦隊		被爆沈没（北水道外）（多少疑問あり）	
平安丸	6	艦隊		被爆大火災	
波勝（標的艦）				至近弾に依り中破各部相当の被害あるも普通航行差支なし。死傷者20名	

輸送船

伯耆丸（横運）愛国丸（聯合艦隊）松仁丸（民間）麗洋丸（横運）比洋丸（横運）西江丸（民間）宝洋丸（4艦隊）清澄丸（聯合艦隊）大吉丸（民間）築港丸（横運）長野丸（陸軍）天城山丸（11航空艦隊）りおでじゃねいろ丸（海軍）計十三隻沈没

第三図南丸（民間）山霧丸（海軍省）富士山丸（聯合艦隊）計三隻破損

年月日	時刻	記事
19・2・17	一三〇〇	トラックに於ける実動機数 艦戦20、艦爆15、月光2、艦上爆撃機4
	一八〇〇	艦上戦斗機1、艦上攻撃機5
		第五十二師団長の指揮する約一ヶ聯隊を基幹とする兵力後続部隊約一ヶ聯隊及び戦車隊進出中の所トラック西方に於て敵潜水艦及び飛行機の攻撃を受け相当の損害を蒙る（一四二三辰羽丸（五、七八四屯、陸軍）一七四〇瑞海丸（二、七〇〇屯、海軍）トラック西方約80浬にて敵飛行機及び潜水艦の攻撃を受け両船共沈没、乗員中約一、八〇〇名救助、七〇〇名行方不明、残一隻はトラックに向け航行中）
	二〇〇二	我潜水部隊の行動 呂四四、呂四二、伊一〇トラックより敵機動部陸行動海面に向け進撃中
	二一三五	伊四二内地よりトラックに向け行動中独断行動を変更戦場急行中 呂三六（トラック）伊五一（内地）至急出撃準備中 海軍所属船日朗丸（六、四三四屯）、駆逐艦浜波及第三十号駆潜艇護衛の下に僚船5隻と共にトラックよりパラオに向け航行中パラオの北東約120浬にて敵潜の攻撃を受く 特務艦佐多パラオ北方海面に於て敵潜の雷撃を受く 機械室、缶室浸水沈没の虞あり、乗員は護衛艦浜波に救助中 二月十七日に於けるトラック方面以外の戦況 ラボール、カビエン方面 ラボールは約一四三機の敵機来襲二三〇〇より敵駆逐艦数隻に依り砲撃を受く カビエンには敵機約55機来襲 マーシャル群島方面敵機来襲状況 ブラウン（87）ヤルート（42）マロエラップ（2）ウオッゼ（8）ミレ（14）ポカァック（1） 二月十七日トラックに於ける我航空兵力可動状況

時刻	戦闘機	攻撃機	爆撃機	不詳
戦闘前	40	24	4	6
一〇四〇	22	16	4	
一二〇〇	22	15	4	
一八〇〇	1	5		

年月日	時刻	記事
19・2・18		二月十八日に於ける戦況概観
		ブラウン方面
		敵艦艇は近接砲撃開始、〇七三五敵攻略部隊礁内に侵入交戦中
		トラック方面
	〇三三〇	〇三〇〇より一八三〇迄トラックに七回に亘り約100機の戦爆連合の空襲を受く
		〇〇四五より〇四〇〇迄トラック所在艦上攻撃機4機を以てトラックの北東方200乃至300浬の飛行索敵を行い敵を見ず
		文月、平安丸沈没
		一〇〇〇在テニアン艦上戦闘機24機トラックに進出
		テニアン方面
	一七〇〇	テニアン発進の索敵機トラックの東約150浬にて西航中の機動部隊を発見せるも詳細不明
		マーシャル方面
		マロエラップに巡洋艦2、駆逐艦2来襲砲撃
		ウオッゼに巡洋艦1、駆逐艦5来襲砲撃
		ラボール方面
		〇四三〇より〇五五五迄敵駆逐艦5、カビエン砲撃地上より邀撃応戦
		一六三〇頃セントジョージ岬東方より巡洋艦3、駆逐艦2を以て同岬を砲撃せるものの如し。南東方面戦隊は艦爆3、艦戦5を以て薄暮攻撃を実施せるも敵を捕捉せず
		ラボールに艦上戦闘機、艦上爆撃機164来襲
	〇九三〇	25航空戦隊の陸上攻撃機11機ラボール発テニアン着（艦上爆撃機は出発見合わす艦上攻撃機隊はトラック空襲のため引返す）
		第2航空戦隊の艦上爆撃機14はラボール発トラックに進出
19・2・19	早朝	在ラボール艦上攻撃機7、艦上爆撃機14同地発トラックに向う
		ブラウン其後通信なく状況不明
	払暁	グリーン島守備隊一〇二名敵に突入する旨報告以後連絡杜絶全員玉砕せるものと認む
2・20	〇三〇〇	ブラウン方面艦船攻撃の為進撃中の陸攻撃3はウジラン島の西方約40浬附近に於て敵機動部隊2群間隔10浬にて南進中なるを発見
		敵機動部隊は各群共航空母艦を含む約10隻
		第三水雷戦隊（夕月、水無月）はラボール発パラオに向う

年月日	時刻	記事
	〇九〇〇	ブラウンは通信杜絶、十八日以降消息不明
		ブラウンの南方120浬に航空母艦数隻を含む大部隊発見
		内南洋方面に対する航空機の転進状況
		(イ) 艦戦、艦攻37、艦爆、彗星4、艦攻2　トラックに向けラボール発
		(ロ) 第一航空艦隊司令部及び飛行機隊本日内地発進の予定
		(ハ) 28航空戦隊の艦戦、艦爆42、艦攻35は19日印度洋方面より転進開始
		(ニ) ラボール方面残留航空兵力　艦戦10、艦爆2
		其後判明した2月17日に於けるトラック及びその附近に於ける我方被害
		(一) 沈没巡洋艦2（那珂、香取）　駆逐艦4（追風、太刀風、文月、舞風）　運送船26
		(二) 大中破　艦艇6
		(三) 飛行未帰還、地上焼失、大中破約180（内約一〇〇地上）
		(四) 死傷者、相当数（艦船乗員多く四病収容中のもの約六〇〇更に増加すべし）
		(五) 炎上物件　重油タンク三個（重油一万七千屯在中）糧食二〇〇屯
2・20	一二〇八	トラック、テニアン方面飛行機の集中概ね順当に進渉中今明日中にトラック約100機、テニアン方面約200機集中の見込
	一四五四	マーシャル方面著変なく、ブラウンは依然連絡なきも敵上陸軍と交戦中と認めらる
	一五四〇	マロエラップに戦艦3、駆逐艦1砲撃
	午後	マロエラップ南東方に航空母艦1、駆逐艦1南下を認む
		約2時間マロエラップに対し戦艦3砲撃
19・2・22	一〇三五	第一航空艦隊司令部テニアン進出（61航空戦隊）
		テニアンより出発せる索敵機はテニアンの90度450浬に於て航空母艦2乃至3、戦艦3、駆逐艦10数隻よりなる機動部隊発見
	一四五〇	索敵機5機発進、触接持続
	一七〇〇	第一次雷撃隊陸上攻撃隊14機触接隊は終始触接を持続、雷撃隊は暗夜敵発見に困難を感じつつも勇敢に雷撃実施中
		二一三〇迄に航空母艦一隻、艦型不詳二隻、魚雷各一命中
		マーシャル方面戦況従来と大なる変化なきも敵は攻撃の重点をマ

年月日	時刻	記事
	午前	ロエラップ、ウオッゼ、ポナペ方面に指向し居る模様なり
	午前	ウオッゼ戦艦3、駆逐艦4、約3時間に亘り砲撃
	二〇〇六	ポナペに大型機9来襲、焼夷弾を市内に投下
	二〇一七	大海指第三三六号二二二〇〇六
		横鎮長官は横空主力をして作戦に関し聯合艦隊司令長官の指揮下に入らしむべし
	二一四五	大海指第三三七号
		東号作戦部隊の編成発動
		聯合艦隊電令作第九六三号
		一、横空の陸攻隊約20機は第一艦隊長官の指揮を受け作戦すべし。右飛行機隊は、雷装の上差し当り硫黄島に進出せしむべし。同隊横須賀方面所在部隊は東号作戦に参加すべし。
		二、第三〇一空横須賀方面所在中東号作戦の際は横空司令の指揮を受け作戦すべし。
2・23		聯合艦隊電令作第九六五号
		内南洋部隊指揮官は内南洋所在陸上航空兵力をして第五基地機動部隊指揮官の統一指揮下に入らしむべし
		東号作戦発動（本土防衛の為）
	〇二三〇	在テニアン航空部隊敵機動部隊攻撃
	黎明	第二次雷撃隊陸上攻撃隊35機発進
	〇三三五	爆撃機、彗星12機、艦攻、戦闘機18発進
	〇四四〇	敵機動部隊サイパンの東一三五浬に近接
	九四五	サイパン、テニアン方面空襲
		マリアナ、カロリン方面行動中の艦船は概ね列島線の西方又はメレヨン方面に避退を命ず
		南東方面我方の航空機の内南洋転進以来敵来襲機数並びに回数は減少せるも敵水上部隊がラボール、カビエン方面に砲撃を加うるに至る
	早朝	早朝よりサイパン、テニアン、グアム空襲開始
	〇五〇〇	敵機動部隊飛行機サイパン空襲（三回に亘り延120機来襲）地上砲火に依り撃墜八機、味方被害炎上21機、格納庫一、燃料庫一破壊
	一二三〇	テニアン被空襲（格納庫、居住施設若干損傷被害軽微）
		グアム被空襲（被害4機炎上、其他被害軽微）
		サイパン東方出現の敵機動部隊攻撃状況並びに戦果被害

年月日	時刻	記事
19・2・23		22日夜間より23日黎明の間に於て
		第一次攻撃隊　陸上攻撃隊16（雷装）陸上攻撃隊5（接触）
		第二次攻撃隊　陸上攻撃隊5（雷装）
		第三次攻撃隊　索敵6、攻撃30、索敵攻撃12
		戦　果
		第一次攻撃に於て魚雷5命中第二、第三次攻撃状況不明
		索敵機の偵察に依り中型空母一隻傾斜し間もなく復元し左舷より黒煙を吐く。大型艦一隻沈没せる油紋を認む
		右以外詳細不明
		被　害　未帰艦機多し（〇九三〇迄に七機帰還）
	〇七三〇	索敵機の発見せる敵機動部隊の兵力左の通り
		第一群　大型空母×3　中型空母×1　小型空母×3 戦艦×2　巡洋艦×4　駆逐艦×多数
		第二群　大型空母×3　小型空母×3　戦艦×4 巡洋艦×6以上　駆逐艦×多数
		その後状況を総合しマリヤナ群島来襲敵機動部隊の推定兵力左の如し。
		甲　群　大型空母×2-3　戦艦×3　駆逐艦×10　数隻
		乙　群　大型空母×3　小型空母×3　戦艦×4 巡洋艦×4　駆逐艦×6
		丙　群　大型空母×3　小型空母×3　戦艦×4 巡洋艦×4　駆逐艦×6
19・2・24		ミレ島に小型機10数機来襲
		マロエラップに艦上戦闘機8機、大型機6機来襲
		ウオッゼに6機、ヤルートに17機、ミレに4機、マロエラップに12機来襲
19・2・25		ヤルートに25機、ミレに4機、マロエラップに3機来襲
2・27		ミレに8機、マロエラップに7機来襲
2・28		マロエラップに5機、ポナペに22機、ウオッゼに7機、ヤルートに4機、ミレに15機来襲
2・29		ウオッゼに9機、ヤルートに6機、ポナペに一機、クサイに一機ミレに12機、マロエラップに一機来襲。